
女鑑
第十八年
第拾壹號

産科婦人科
楠田病院長

楠田謙藏先生考案

◎改良分娩具

安産は人生歡喜の第一聲なり、安産は如何にして求め得べきや分娩具の善悪と産前後の衛生如何によることと論を俟たざるなり而して安全なる分娩具と産前後の心得は何れに於て求得べきか安生堂に於て販賣する物唯一完全なる事、論より證據、實驗せられたし。

御望の方は御通知次第、楠田先生の講述せられたる産前産後の心得、及價格表を無代御送付申すべく候



販賣元

東京牛込區簞笥町三十八番地
安生堂

大阪西區阿波座一番町一二六
安生堂

女鑑第十八年第十壹號目次

讀者文藝

裝畫


天長節


PEARL 毛髪料 CREAM
パール
毛髪の保護發育に注意せらるゝ諸君に告ぐ煉香油パールの有する特効は
黒色の美を全たからしめ特に頭髪の悪臭を去り衛生上唯一の必要品なりと認めらる
スミレ香水本舗 東京浜町一 平尾亢店

小笠原伯爵の家庭



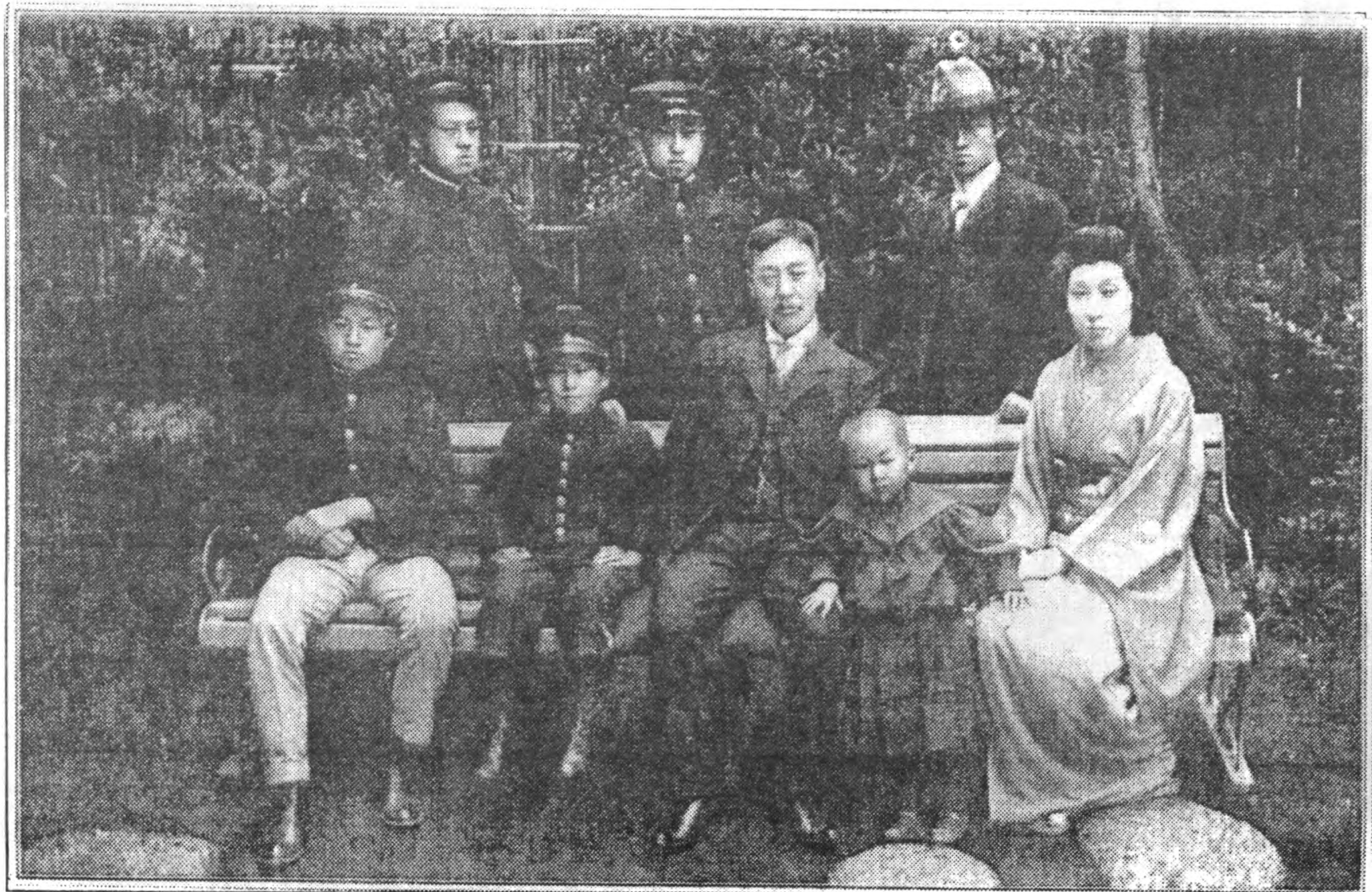
令孃　明子君

令夫人　貞子君

令妹　百子君

山科氏の家庭

前列右より　令夫人　甫子君　良夫君　山科禮藏君　薫君　捨三君



後列　修藏君　快藏君　邦雄君

渡邊法學士の家庭



渡邊輝之助君　令孃　靜江子君　令夫人　輝子君

裁縫の競技



三越呉服店裁縫部


御婚禮用櫛笄
東京市 白牡丹本店 尾張町
待つ春の御支度なり、又御婚禮の御用意として御新調こそは、御櫛笄の肝要なれ。茲に本店は此季節に向ひ、恰好の品々を取揃へ置き、價は大凡本甲一揃にて五十圓位より二百圓位迄、又四方張にては八圓より二十五圓位迄にて御需用に應ずべく、希くは陸續御用命あらんことを。
本店は目下の流行の粋を掲げ候「ちぐさの花」を發刊仕候に付御報次第送呈申候

醤油醸造界の一大革新

最良醤油



●資本金＝壹千萬圓

醸造元
日本醤油醸造株式會社
東京深川區小名木川通
電話浪花（長）三七七三番
一五九五番

特色
製造清潔
品質佳良
黴を生ぜず
價格低廉
特色

弊社は前人未發の新發明にかゝる嶄新にして完全なる鈴木式醸造方法及機械的装置により精良無比の醤油を醸造販賣す

特約販賣所
東京日本橋區北新堀町
合資會社 日本醤油東京販賣所
電話浪花（長）一四六番

其他
東京酒類問屋組合酒類仲買店及各地小賣店にて販賣致候間御用命願上候

第五回内國勸業博覧會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登録商標

壽美禮おしろい

五二會品評會 功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴイオレツト煉製

錫蓋附乳白硝子器入



壽美禮れしろい

ヴイオレツト水製

ねり製 定價 大壜二十錢 小壜十二錢

水製 定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢

錫栓附乳白硝子壜入

◎壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顔肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生せざるは本白粉の特色なり「菫れしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の塲所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

綠、藍、紅彩蝶香ひ 鑵詰 八錢

別製鑵詰 五拾錢

大袋 二錢 小袋 一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美しくなす◎壽美禮あらひ粉は御髪洗ひに御用ひ給へば髪のねばりを取り油あか等を生せず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は温湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登録商標

四洋色白くなるあらひ粉

SUMIRE
WASHLNG POWDER

壽美禮あらい粉



製造本舗 東京東両國元町（両國橋際） 壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

清國貴夫人筆蹟

黄憲祐、王勤、王昌國、陳光璇の四君より中川主筆に寄せられたるもの

瓊樓高處寒如許俯瞰鴻濛是帝鄉
十里歌聲春錦繡百年史跡血玄黃
華嚴國土天龍靜金碧山川草樹香
獨有行人少顏色撫欄天末望斜陽

右錄梁任公登華盛頓紀功華表詩

中川先生惠存

黄憲祐書

長句一章敬呈
愛冰先生吟席即希 郢政
洞庭浩渺君山青衡岑七二鍾英靈道州衡陽毓奇傑
沅蘭湘芷懷芳馨邇來名儒多俊發中閒淑媛亦才俠
去年不佞題其間褰裳東渡懋懋追閨哲今年夫壻來扶
桑二子前後皆東航一家裹糧旅海國乃心私祝黄人强
濫竽充數行一載哲理宏深多未解望洋向君思懋
何異井蛙賦東海裝束裝就道予將行同人共祝黄人
强立東大國俱萬歲海天萬里遥相望
清國光緒三十二年七月五日

王勤呈稿

歸夢依稀到漢家滿
樓殘月數亂鴉歸去
亭亭楊枝水灌編瓊
林神妹花
中川先生政

王昌國呈稿

雲葉不動鮮飆緊御風人奏歸風引
絲不如竹竹自然天籟與人巧相半
如樂出虛風過簫譜不能言心自領
驚鴻一點是耶非仙山路遠鈞天近

右韻風箏詩一章錄呈

中川先生惠鑒

陳光璇

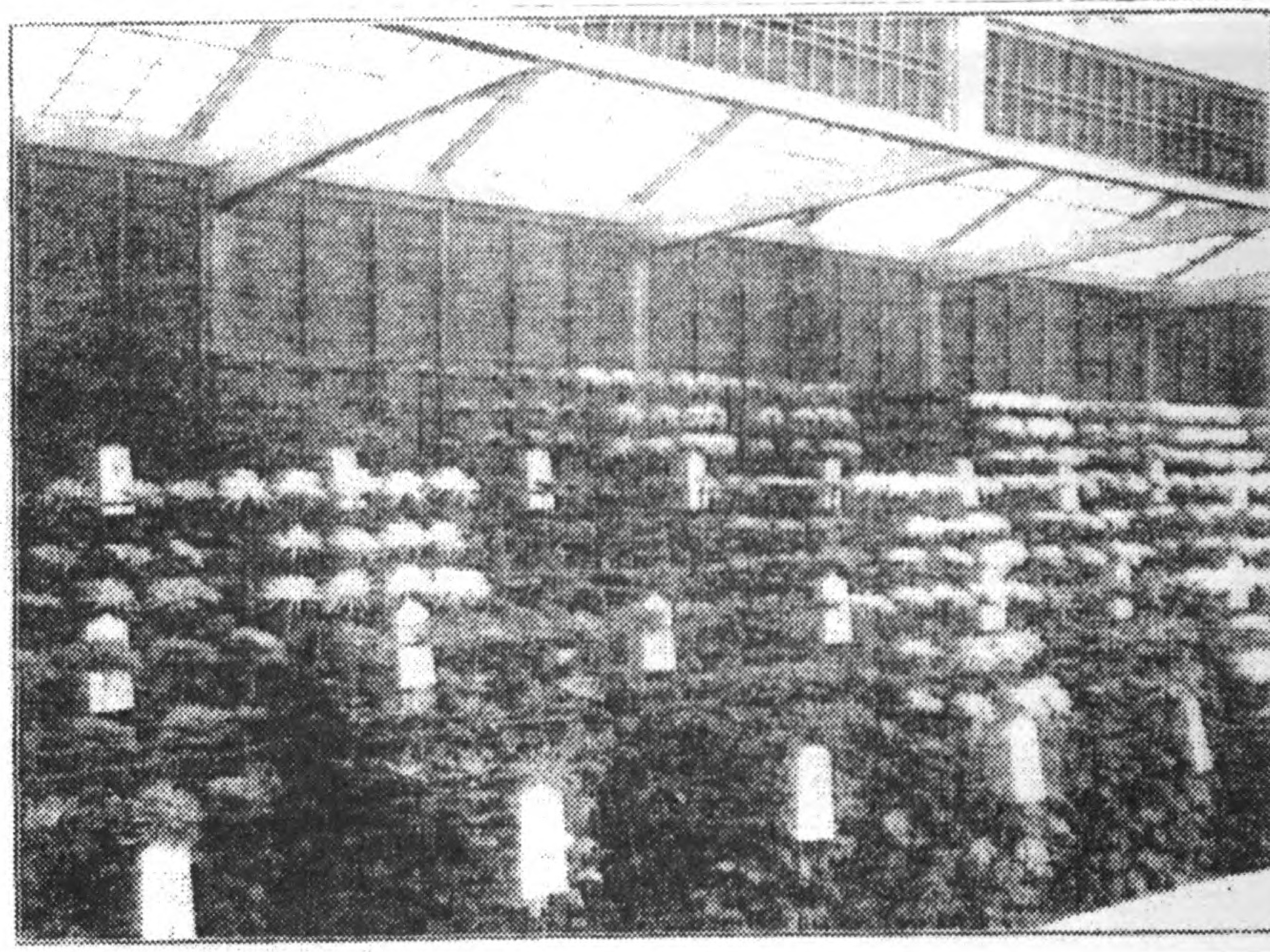
岸海の阪舞

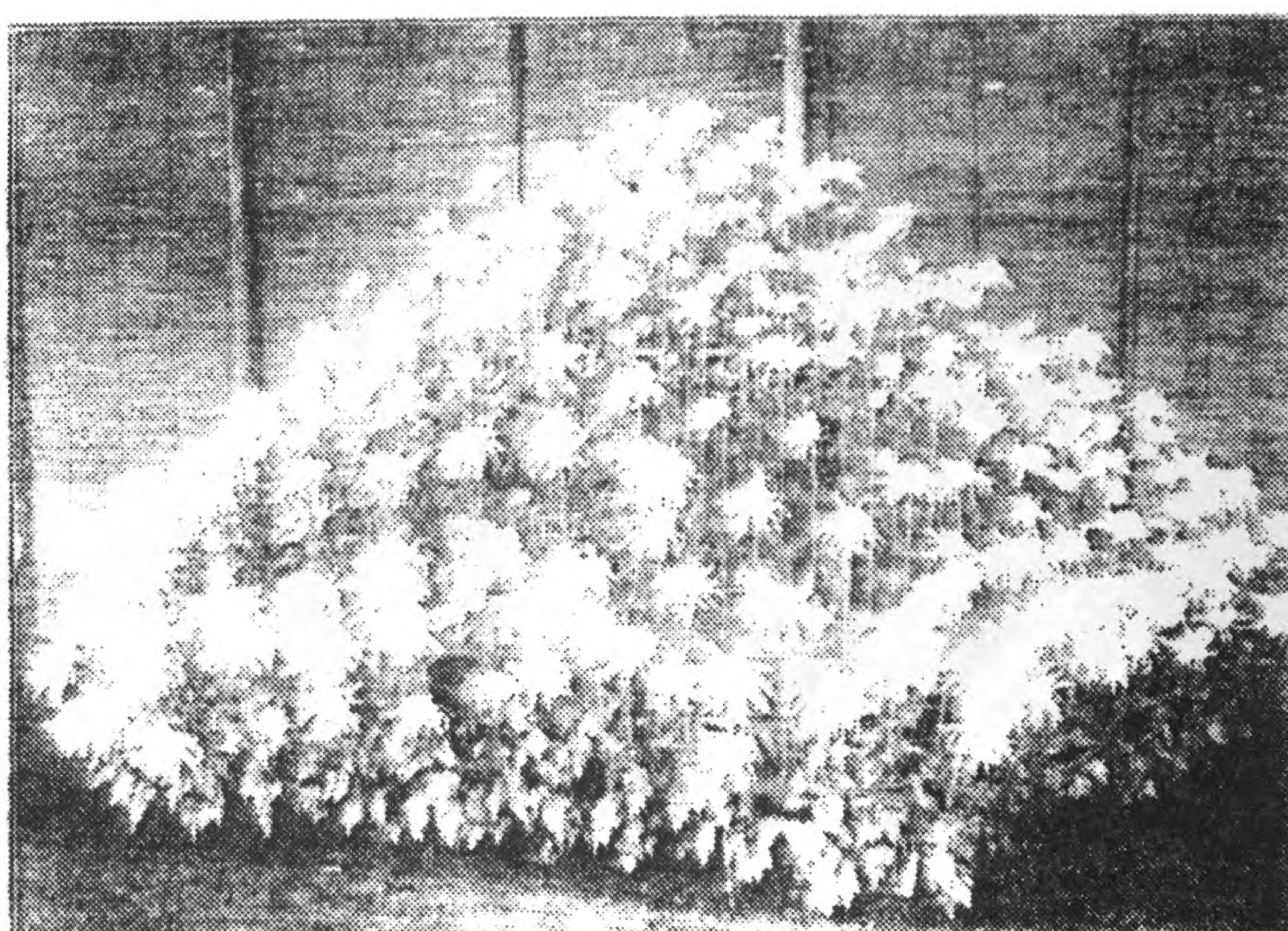


伯爵 松平直之君撮影


十一月一日より
十五日まで
祝月賣出し
餘興福引
最高百圓以下數千點
オコーチャン
大丸呉服店
東京日本橋區
通旅籠町
電話浪花
八三三
六六三
六〇五

大隈伯邸の菊花





彈箏と挿花





上野香畝君撮影


さくら油
東京日本橋區よし町
椿油化粧品
小間物商
よしや
髪のよいのを望まぬ方はありませんが頭髪の油は何を用ひたらよいかと御迷ひになるのは未ださくら油を御用ひにならぬ方で一度さくら油を御使ひになれば必ず之に限ると
販賣所は全國重なる小間物化粧品店に有り
定價（極大三十錢 大廿五錢 中 十四錢 小七 錢）
電話浪花 一四四六番



女鑑　第十八年第十一號

御園の菊紅葉

御歌所參候
文學博士　小杉榲邨

吉野山の櫻花を雲とながめ、龍田川の韓紅を、神代もきかずとうたひ出む趣致は、其眞盛りのをり、これをものせんに、おのが心のまゝなるべかめるを、禁苑の櫻の白雲、菊もみぢの倭錦なども、身のほど〱につけて、御ゆるしかうぶらざる限りは、心のまゝにこれをうかゞはむわざ、いとかたなり、余いまだあげまきの頃ほひより、木草の花を愛するこゝろ深く、しかも櫻、菊をなむ、いとしたしまれける、されど、櫻は高く大きやかに、枝もひろごりて、御空の雲とあふがむ色をこそ、又なくたふとめ、所せき庭にはいかでこれを作り出さむ、其野山ひろく、おのづから生茂れるを見て、春ごとに心をやり、菊は年のはにうゑかふれば、いさゞめの園にも、これを培ひて、千代の長秋、

たのもし人にしたりき、さいつ年こゝに移ろひても、猶其野山の櫻は、あくよ知られぬを、菊を養ひつちかはん處を、とゝめ得ざるほど、かの品かたちを少しくかへて、山野におのづから生出る類ひ、鈴鹿、養老、金花山、或はうつのや箱根などはさるものにて、京都八阪の奥なる菊谷、また矢脊の里、攝津の箕面、或は近江の比叡、紀伊の高野、また薩摩の櫻島、大隅の高千穂、阿波の祖谷などの山菊といふもの、白華あり、黃花あり、薄紅色あり、又山城の嵯峨野の宮のほとり、或は津の國の須磨、播磨の明石の浦、又紀伊の吹上の濱、或は美濃の虎溪、また陸中中尊寺、また肥後の阿蘇山などいふあたりの野菊、白色あり、紫色あり、薄紅、薄紫もあり、すべて〳〵單瓣の小輪なるが、旅行のついで、目にふれしものは、みづからこれを根こじ來り、或は友にもあとらへ、人のもてるをこひ得などして、はひりの垣根、庭の杉の木のもとに植置るにおのがまゝに生ひ出で、秋ごとにあるじがほに、瘦たる花咲出るをことにめで、いつくしむれば、先きにえられし、大輪、中輪などは、しばし忘れたるに似たり、然るにこのほど、禁苑の菊花拜觀ゆるし給ふよしのおほせごとありければ、いとかしこくも、嬉しくも、雲ゐの庭たちならさむとまうのぼりて、御車寄の東の御門よりまづ入りぬ。

けふは風もなく、日いとうらゝかなるていげなり、さてやうやう、進み行て、そこゝと處をかへて、しつらはれたる花町、所々拜觀するに、例の大輪あり、中輪あり、くるひ咲、くだ咲、ほそ花びらなどくさくさの色ある花形、めでの盛りとよきほどに植こませ給へる、見なれたる品種は、むかし人にあへらんが如くいとなつしく、いまだ知らぬも、數種あるは、けふしり初る友にあふが如き思ひあり、好ふける心ぐせには、えもいひ難く、其花町立さりがてにながめをり、つらつら按ずるに、かの藤原敏行朝臣が、久かたの雲のうへにも見る菊は、あまつ星とぞとうたひしは、まだ殿上ゆるされざりける時に、めしあげられて仕ふまつるよしなるに、思ひ合せられつゝ、余はその四五句を改めて、ひそかに、こゝろのうちにて思ひつゞくる

は、『日のひかりとぞてらされにける』、といはましや。

かくて行かへり、道すがらの御庭苑のたゝずまひ、かりそめの口のはにかけまくもかしこけれど、おほよそ常盤木高く深くしげれるひまびまに、もみぢいと多く植まじへたるが、其物さびたる有さまよ、古き繪巻見出たる心地せられて、山かたづける處あり、石苔の滑らかにして、瀧落す處あり、池あり、淵あり、橋わたせる處もあり、またそこかしこ廣芝あり、松原あり、笹原あり、花の木園もあり、御殿舍、御茶屋、あづまやなども、なほ見わたさる。

すべてかゝる所々、何がしくれがしの御名、必あるべきものならめど、今うかゞひしるさんよすがあらぬぞ口をしき、さはいへど、そのときは木のひまびま、深く淺くてり合ひたるもみぢ葉は、げに所から幾百千の錦帳、かゝげさせ給へらむよと疑はれて、いといとたふとし、いかでか龍田の山川の韓紅、たちも及ばんなどひとりごちて、木のもとにたゝずみつゝ、おふげなけれど、

こぼれ來る倭錦のもみぢ葉はかづけものとはいふべかりけり。

いとのどやかに、御園をめぐり、再び歩をかへして、もとの花まちにいたり、猶よくながむるに、むかし大江匡衡朝臣が、清涼殿にて、菊是花聖賢といふ心を賦して、制に應ずる詩の序に、夫代好㆓芳草㆒、時賞㆓菊叢㆒、是花之聖也、是花之賢也とかきしも、容姿のゆほびかに、其節を竹林にくらべ、蘭蕙の霜を知らざるを、咲ふが如きみさをを、思ひて、かくはたゝへけるなりけり、あはれこの秋の菊もみぢの、かゝる色香、春の花、櫻の白雲と見むにほひ、櫻は春日にあふごとに、花時に及ぶごとに、其紅艷を發するは、これ此花の此御時に遇へるなりと、菅贈大相國も、南殿櫻花を惜む應制の詩序に、かき給へる、春秋の花のひかり、いづれをいづれとわきがたき名木ながら、いでけふはこの聖賢を仰ぐべきにこそ。

所謂女優問題

技藝と操行

文學博士　井上哲次郎

女子にして俳優たるものは、古くから西洋などにもある事で、我邦に於ける女優の嚆矢ともいふべきは、果して何時の頃よりであるか、未だ其樣いふことは調べた事が無いから知らないが、現今一部の女優が活躍して居ることは、予よりも却つて世間の人々の方が好く知つて居らるゝ事實である。

乃で近頃世上に發表せられた、彼の川上貞奴の設計に係る女優養成所とか敎習所とかで生徒を募集した所が、その募りに應ずる者も尠なからざるのみならず、その中には知名の紳士の令孃、それも相當の女子敎育を受けて居らるゝ令孃であるさうだが、併し之に就て予は毫も其令孃の、平素に於ける行動も亦性情等も知らないのであるから、何とも之に對して批評を試むべき根據を有たないので、且らく其事は不問に附するとして、

女子が俳優に爲るの可否

は如何と云つたならば、何も女子が俳優に爲るといふ事は、絶對に善くないと認められないものであらうと考へる。

今は改名して梅幸とかいふ男優が、まだ前名榮三郎と云つた時の事と思ふ、その榮三郎なるものが女子に扮して舞臺に出て來ると、誰もアレが男子であらうとは思はない、役割等で承知して居るものまでが眼を眩まされて了つて、眞の女子と思込む位である、今事新らしく云ふまでもなく、

元來演劇は摸倣であつて、眞の物では無い、故にその演伎の巧拙こそ命脉の岐るゝ所と云つても好い位のものであるから、約めて云へば、演劇は技術に屬するものである。

乃で男が男の仕草を爲し、女が女の仕草を爲ると云ふ事になれば、決して何方にも演伎の上に於て無理が無からうと考へる、尤も故名優の團十郎とか、又は菊五郎とかいふ人々に爲つたら如何か知らないが、もと〳〵異性の男が女に扮裝、女が男に扮裝といふ事が摸倣である以上は、その發する一言半句に至るまでも、彼の此のと摸倣しなければならないのであるから、隨分時としては不自然な聲を放つたり、或は觀るに忍びざる態度を現はす事等がある、併しそれが男は男、女は女といふ風に其性に逆はずに演じるやうになれば、おの〳〵其本性に從ふのであるから、前に述べたやうな無理が無くなりはすまいか、且つ男女兩性ともに、充分その特色を發揮し



易い方法ではあるまいか。

演劇の脚色が男のみなればイザ知らず、男女兩性より仕組れたるものとすれば、如何しても右のやうに女優の必要もあらうと思はれる、素人許であらうが、如何なる名優が演じやうとも、演劇そのものが素より摸倣である、その模倣を亦復男が女を摸倣して演ずるのであれば、その演伎が如何に巧妙でも、如何に純熟して居やうとも、一擧手一投足の微に至るまで、緻密に精細に觀察したならば、何處かに異性は異性だけに毫釐の齟齬、または缺坎が無いとは保證の出來るものでは無い、而かも各々その本性に從つて演ずる事となれば、優に夫等を招ぐの憂を除く事が出來やうと思はれる、併し其にしても女優の演伎が拙劣であるときは、却つて純熟したる男優よりも見劣りの爲るものであるから、技術の練磨といふ事に就ては、十分の上にも十分に怠つてはならぬ。

女子が女優を希望するやうに爲つたといふものは彼の川上貞奴なる女優が、數次の渡歐で、殊に佛蘭西に於て多少成功して皈つて來たのを耳にした爲、幾分それらに感染した結果、希望する者が出て來たのではあるまいか、そは兎も角として、女子が女優に爲るのを予が絶對に責むべからざるものと云ふの理由は、畧前陳の如くで、女子が一の技術者として立つには適當であらうと云ふ、最も單純なる考から云ふのみにして、即ち女子の天職といふ側からしては如何あらうかと思ふのである。

終りに一言して置くが、女優に對して節操を責むることは出來ない、強いて之を責んとするものは、何ほ一時世上に囂々たりし、高麗藏に對つて德操を强ゆるやうなもので、殆んど滑稽に屬するのである、何故なれば、女優は技術者としての女子で、天分を竭すべき女子として社會に立つものでないからである。（文責在記者）

風教にかゝる大事

法學士　渡邊雨山

納言が簾を褰げたる事は、千古の逸興、いみじき風雅のすさびなるも、識者多くは之を賞せず、女子のやさしき心、茲より移り變らんとて、打嘆きたる歌人もありき、我が神州に生れたる女子は、唐國と異り、高くして清く、且つやさしき特性あり、男子の武士道と併稱せられて、宇内に誇るを得べし、色香の妙なりと云ふ、「ローズ」の花も、敷島の山櫻一枝をかざゝば、香は消え色は褪めて、抛ち捨てんとの心も生ずめれ、文化日に進み行きて、時に推移あり、善き事は、海の東西を問はず、廣く求めて、學ぶべきも、我が固有の美質に害あるべからず、薄俗紛々、女の道もさまぐに分れて、岐に泣く人は、吾のみならず、泣くも詮なし、其の涙を硯に滴して、志を同ふするの姉妹に告げんかな。

夫たる人に命を望まるゝも、更に動せず、妻去るてふ一言に、驚き悲み、絕せんとするは、劇に所謂武道女形の典型にして、又眞髓なり、能く我が女子の志操を現はして餘蘊なし、淸くやさしく、且つ高きが故に、大節に臨み凛乎たる覺悟の操、侵し難き狀は、外國の脚本に例あらず、寔に難有き大帝國の精華ならずや、忠臣孝子は皆此の母より生る、今の人口を開けば、良母賢妻を云ふ、されど顧みて今の教方を考ふれば、母の良なる、妻の賢なる、得て求むべきか、一國女子の特性を解せずして、漫りに訓教の道を講ずるも、知育と德育と相添はず、櫻の枝に「ローズ」の花を開かしめんとするは、根を枯らし抵を破るのみ、うたてや吾も人も覺束なしと嘆つなり、世に貴夫人と稱する者あり、何故か人に忌み嫌はる、其の成上りを責むるは酷なり、其の前身の妓たり、娼たるを論ふも亦非なり、成上りは慶すべし、妓たり娼たるも女の道に缺くるなくんば、妻たるに何の妨かある、徒に前身を搜りて云々するは、却つて僻事ならん、いかに良家に育ち、學問

の道暗からざるも、今日此頃の風俗を見ては、誰か女德の腐敗を慨せざらんや、新紙の傳ふる所に依れば、歌舞伎座に芝翫の女優大藏に扮し、當時女流の不貞を痛罵するの一齣あるより、例の貴夫人、我が身の不德を諷せらるゝ心地して、怒り惡み、此の劇に限り、一同申合せて見物を廢せりと、此の上記るさんは筆の汚るゝ恐あり。

夫にもまして驚くべきは、しかるべき人の女にして、優人の群に入る一事なり、輕薄なる論者は、藝術の高尚なるを唱へ、演劇を以て其の最とす、藝術は高尚にして、演劇も高尚なるべし、吾は彼の佞者をにくむなり、藝術の執行者たる優人を見よ、其の品位は如何、言ふに忍ひざるざるなり、醜の又醜、古よりの惡き慣は、牢乎拔くべからず、名は役者と云ひ、俳優と稱せらるゝも、心は依然たる河原者なり、乞丐なり、藝術の如何など、彼の輩の解すべきにあらず、心賤しき女子の悅を迎いて、媚諛百方唱婦の色をひさぐと異ることなし、こは男の優人につき言ふなれど、芝居界なる一廓は、斯る賤丈夫に依り組立てらる、別乾坤なれば、醜惡の府と見て近よるべからず、女優の內狀に至つては更に甚しと聽く、頃日、新に女優の養成を企つ者あり、既に其の人に非ざるは、世間皆之を知る、此の人頻りに歐米女優の德を賞揚しければ、迷ひ信ずる者も尠からずと云ふ、憂ふべきの限りなり、前にも言へる如く、我か女子の性、餘りに淸ければ、他物に汚され易く、柔さしきこと比なければ曲れ易く、折れ易し、輕跳者流の理論は、直に少き腦裡に沁して、優人を以て此上なき貴き者と信じ、我か一身の破滅を知らずして、醜穢の群に投ずるは、悲みても尙ほ餘あり、事茲に至りては、高き心もいつしか失せて、女の道を守るべき時に遭ふも、得守らずして、德操塵芥の如く、打ち捨てられぬ、娼婦となり、妓女となり、路傍の春柳、客の折るに任せて、風絮乍ち泥土に委し了んぬ、斯くして女の河原乞食は、遊蕩子の玩弄物たらん、

職業に上下なしと云ふは非なり、女子の獨立は贊し難きも、若し獨立を企て、又は親兄の爲め、職業を求めんとせば、女子の道に缺けざる者を撰むに難からず、尋常普通の業にては得る所少く、獨立の途も立たず、一家を扶養するに足らずとせば、吾又何にをか言はん、女優は極めて卑賤の職業なり、身分あり地位ある人の女子の爲すべきものにあらず、一旦誤つて此の境に入りたる人の近狀を見れば、思半ばに過ぎん、歐美にても「アクトレス」は高尚の藝術家をもて遇せられず、其の品行の醜劣なる賣女と異ることなし、女優と賣女其の詞二にして、其の義一なり、

やさしき清き女子をすかし、誑かして、斯る魔道に導くは、果して誰の罪ぞ、如許風敎にかゝる由々しき大事に對し、當局の風馬牛相關せるざは何故なるか、問はまほし、吁、



女子教育偶感

文學士　下田次郎

隨意科の增加

今度高等女學校々長會議の結果で、隨意科が非常に多くなつた、即ち學科の自由といふ事が出來たがこれは實に喜こばしき現象だと思ふ、西洋の方へ行つても、女學校も上級になると、ずつと隨意科といふものが多くなつて、生徒自身の要求に應じて學ぶといふ樣になつて居るが、これは實に必要な事であつて、是非左樣なくてはならない、日本の樣な狹い所でも、高等女學校の所在地が各所に散在してをつて、土地の狀況は勿論、風俗も習慣も違ふ、其所へもつて來ていづれも同一の型をはめ樣とするのはむしろ非常な困難なことなので、隨意科の增加はこれが爲、大きに喜ぶべきことである、ことに女子は大抵高等女學校を卒業後、家庭に入るであるから、この短日月の中に學ばねばならない學科が余程適切に、實際的ではならないのである、役にたゝない樣な勉强の致方では一向教育の價値が乏しいといはねばならぬのである、

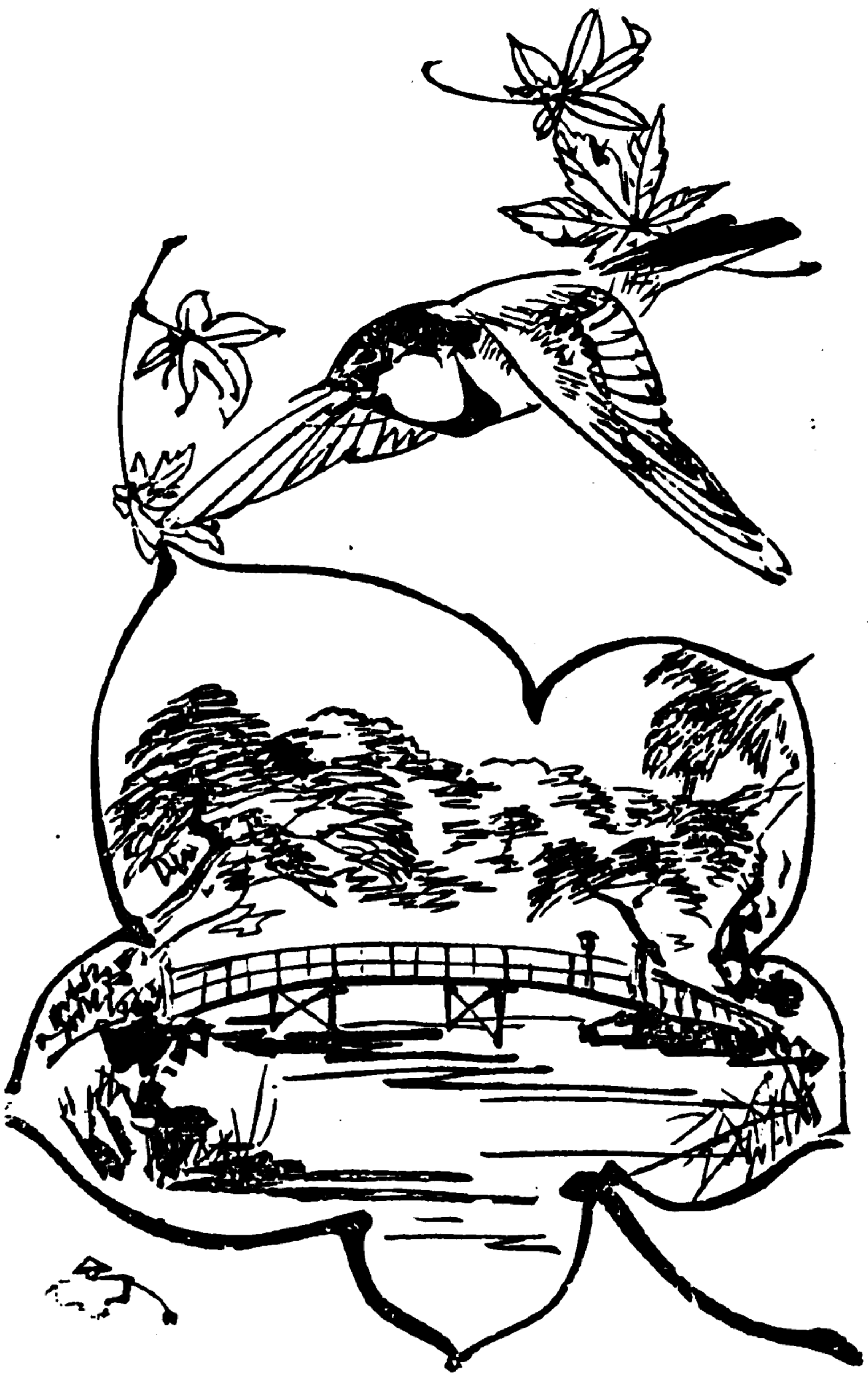
家事科の教科書

ことに家事科の書物が全國通じて仝じものだなどといふのはもつとも實際を缺く事で、都會と田舍とでは全然で生活の狀態が違ふから、それに仝じ家事の教科書を課するのは不當である、ことに經濟などに至つては官吏などの樣な月給取もあれば、商人の樣なものもある、農家などは出來秋などによつて、非常に收入の事などがちがつて來る、これに仝じ教科書をもつて、かうして豫算を立てろの、かうして家事經濟の整理をせよなどゝいふのは間違がつた事で、見當ちがひの事が多いから、却つて益が少ない、云はゞ或は徒らに頭を勞するに過ぎぬかもしれないのである、

出入の商人と作法

帳簿の整理などを教へる時には、いつも出入の商人

などが不正の事をしやしないか、よく檢査せよといふ事をいふのであるが、これぱかりではない、主婦は、出入商人に對していかなる態度であらねばならぬかといふ事も大切な問題なんである、つまり作法である、今迄作法といへば全等や長上に對してのみするものゝ樣に敎へられてあつたが作法はそればかりでない、下に對しても大切である、一例を擧ぐれば飯の盛り方でも左樣である、草取に來た働き人などに、いかに作法だからとて、八分目位などに御飯を盛つては、草取は喜ばないのである、下に對しては矢張一杯も山盛りにしてやつて



喜ぶのである、これは常識であるけれども、一つは作法である、作法とは非常に改まつた別物の樣に考へるのは、それは作法を死物として扱かつて居るからである、生きた作法の精神は上中下に通じて、自由に働かせ得るのである、

ダンスと普通體操

私は隨分歐米の女學校を觀察して歩いたが、日本程ダンスの盛んな國は見た事がない、卻つて歐米の方がダンスをしないのである、私は地方に行く敎師がウケをよくするには、ダンスを生徒に盛んに敎るに限るといふ事を聞いた事がある、一

体體育の目的は身體を丈夫にし、規律を尊び、意志を練るといふ必要にあるのだから、ダンスの樣な遊戯的のものは寧ろ、少くしてもよいのである、が、近年は却つてその反對の狀況を呈しつゝあるのであるから、今度の會議の如く、體操は普通體操を奬勵し樣といふのは、甚だ適當である、私は決してダンスを攻擊するのではないが、どうもダンスをあまりに奬勵すると、人間が浮薄になり、慥かに輕率になつていけない、一体考へのツハ〳〵したものは一時の虚榮に眩惑せらるゝものである、

外交官、海軍々人

女學校の卒業生などが、よく外交官や海軍々人と結婚する事を望むものがある、しかし眞にかれらの心中に國家の爲、夫の裏面に立つて、夫を補佐し樣などゝいふ眞面目な考へがあつてではなく、只夜會に招待されることがあるからとか、ヤレ舞踏會が度々あるとかいふ事の爲に結婚するものがある、そんな人はたゞ舞踏會や夜會の招待券と結婚したといふに過ぎないのである、實に淺ましい次第ではないか

ダンスは遊戯である、必ずしも排斥するのではないが、只普通體操によつて心身を鍛練して、さて後ちに學ぶべき必要のものである、

リボンの競爭

巴里といへば、人はいかにも贅澤な華美な所だといふかもしらないが、私の見た巴里の學生は、非常に質素なものであつた、それから見ると實に日本の女學生は花の樣に華美である、つい此頃まで細かつたリボンが、近頃は太く廣くなつて、それが二つも三つも裝飾さるゝのであるから、非常に贅澤である、その贅澤さを巴里邊りの女學生が見たら驚くことゝ思はれる、一体巴里は世界の遊園地であるから、亞米利加人などがお金を落しに來るのである、それだからある一部分の人は、出來る丈華美にしてこれらの人を引き附けるが爲に傲るが、そんな必要のない學生は何所迄も質素儉約である、どうか日本の女學生もこの美點を酌み、何所迄も實際的な敎育を勵ん

で、役に立つ女となられたいと深かく希望するのである。

（文責在記者）

感情の練磨

日本女子大學教授　松浦政泰

五分の感情

私は婦人の人格としていつも美しい慕はしい條件として、こんな事を考へて居る、もしか婦人の心を十と分つ事が出來たら、その三分は強い固い意志力であり度い、知力は二分、感情は五分を得させ度いかういふ割合でもし婦人の人格が出來てあつたら、定めし優しい、美しい婦人を得る事が出來やう、否出來ると信じて居る、五分の感情は四分になつても六分になつても、どちらになつても婦人の弱點に陷る、世の人は頻りと婦人には感情を抑へよと云うて居る、尤も婦人は感情に走り易く、走れば必ず其所に婦人の弱點を表はして、或は嫉妬となり、怨恨となり、所謂瞋恚の焔を燃して身を害ふか、但しはお天氣ものといふ一向取り止めの無いその日〳〵の心のまゝに喜怒を更へて行く様な無能な婦人となる、もし無暗に抑壓に抑壓を加へて四分三分とならば、寬容なく同情なくゴツ〳〵ギシ〳〵とした、一向優し味のなき冷たき淋しき理屈一偏なものとなつて、美しき婦人の德、その特質を滅却する様になる、それであるから余は敎育を受け、高き理想により、知力を增進し、意志の力を增す程、それ丈だん〳〵と感情を發揮して、フーワリと優しき感情の中に、何所やらに知の光りも意志の堅さも知らるゝ様な婦人が、眞に婦人らしき婦人として望ましいと思ふ。

貞女ドラー

かのテニソンの詩の中にドラーといふ少女の事を歌つた詩がある、余はドラーを讀む度に嗚呼美しい少女の心だと思ふ、ドラーは百姓アランの姪でウイリアムとは從兄妹同志であつた、いつも同じ家に住んで居つたから、アランは息子のウイリアムと夫婦

にしやうと久しく考へて居つたが、ウイリアムは何だかドラーを好かない、アランが種々に言葉を盡してその結婚を勸めたけれども、生命に掛けても厭やだといふ、果は頑固なアロンが腹を立てゝ一月の中に自分の滿足する樣な返事をしろ、しないならも一決して我が家の閾を跨くな嚴しい言付で嚇し附けて見たが、ウイリアムはことにドラーを好まないやうに見えて、遂に一ケ月たゝぬ間に家を飛び出して、あてつけ半分にメリーといふ少女と結婚をしてしまつた、こんなに情なくされたけれども少女ドラーは只從順に謙遜に、ウイリアムに仕へたのである、それのみではない、結婚式のベルが敎會でなつた時にかれの伯父はなんと云付けたか『お前は今後決してウイリアムとは口を利いてはならない、又かれが妻だといつて居るメリーにも言葉をかはしてはならない、もしお前がこの誓ひを破るなら、お前は再び私の所へは返つてはならない』、誠に僅かな數語ではあるが、かれを慕へるドラーの身に取つては、非

常に苦痛であつたが、彼は只唯々として、伯父の心に逆はなかつたのである、この間に眞のドラーの從順は遺憾なく流露して居るが、遂にウイリアムに子が出來、又かれの身の上に種々な困難が降りかゝつて來る樣になると、父は一文の助けをしないにもかゝはらず、ドラーは人知れず、少女の力には能ふ丈けの貯蓄をして、彼に送つたのであるが彼を棄てしウイリアム、又彼が妻と呼ぶメリーも妬の爲には敵である、けれどもドラーの心に燃ゆるのは只美しい仝情心ばかりであつて、敵を許し惡を許す寬容の德が油然として彼の涙を誘ふたのである、心から敵を愛して罪を許すことの出來る理屈以外の情が溢れたのである、其の時にウイリアムは熱病にかゝつて死んでしまつた、ドラーはどんなに悲しんだか、かれは直ちにメリーの所にいつて、ウイリアムがこんなに父にも見放され苦しんで死んだのは、自分があつた爲である、どうかせめてこの小兒だけでも祖父樣に許され度い、丁度今年は四五年來珍らしい豐作で

祖父様がよろこんで居られる、この機會に乘じてこの小兒を伴れて行つて御詫をしやうと、種々メリーを慰めて、遂に小供を伴れて小麥の畑の傍のポッピースの花の咲いた、小高い所にをつた、伯父が出て來たがあゝ可憐なドラーは、敢へて小兒をおしつけることが出來ないで、日はくれたけれども、その大膽なことを押し切れずに返つて來た、優しい少女、少女の胸には仝情には燃えながら、伯父の譴責を恐れて居る優しい〳〵心がアリ〳〵と見える、翌朝亦小兒を伴れて野に出で、伯父の目に美しく見せる爲に小兒の帽子に花輪をこしらへて附けてやる事や、靜かに伯父を待つ事や、伯父に問ひつめられて遂にしづかにウイリヤムの子だといふ事、又は私は何となさつてもよろしいから、この小供をお取り下さいと賴む事などは、どうしても美しい婦人である、さうして細かい知惠によつて磨かれた垢拔のした犧牲である、遂に子供は伯父の方へとる事になつたが、ドラーはその場から勘當されてしまつた、頸をうなだれ、次第々々に遠ざかり行く小供の泣聲を聞きながら、過ぎ來しかたを思ひ出で、潸然として人知らぬ袖をしぼつて居る、自ら犧牲となつて去りしウイリアムの爲に小供を通して自分の心を盡さんとするドラーは、決して理屈を言つて伯父に肉薄して居るのではない、メリーの處へ返つて來てけふからあなたとゝもに居りましやうといふと、メリーはドラーに氣の毒だといふて非常に伯父を恨んで、折角の小供を迄取り返さうといふて、その晩二人で伯父の處へいつて見ると、小供はお祖父樣に戲れて、至極機嫌のいゝ体であつたが、入つて行くとかれを見て泣いた、メリーはどうかドラーをもとの樣にお家へ入れて下さい、今日參つたのは自分の爲でも、小供の爲でもウイリアムの爲でもない、只ドラーの爲に來たといつて、メリーは靜かに彼の息子のウイリアムが、臨終を物語る、神よ願はくはわが父をして私がした苦しみを知らしむるなさいつたといふ、ウイリアムの眞情やメリーの情の事を話すとこゝに骨肉の

親子の情をがムラ〳〵と涌いて、さしもに頑迷なアランも言葉もなくうちかたぶき、遂に大きに懺悔して、神よ許せ、わが子を殺せしものは吾なりと叫ぶ様になつた、こゝに於て勘當の放逐のと騒いだ人々の深怨も渾然として打ちとけて、二人の娘と嫁とは伯父の頸にキッスをして、小供をかこんで三時間泣きあかし、きのふに百倍した愛がまた返つたのである、遂にこの四人は睦まじく一つ家に住む事になつたが、メリーは後に他に配偶をとつたが、ドラーは遂に一生涯結婚しないで暮した、ドラーの優しい情は、固くなゝ男子の心と心とに滑らか油となつて、他人同志が互に親子の誓を結ぶ様になつた、彼の心は調和となり一致となり、生涯を貫いて美しい情で成効して居る、この情は實に練磨された情である、十分に知惠もある、十分に意志も動いて居る、さうして一點の不自然な所がない、余はドラーが何所迄も優しく柔々しきを愛する、さうしてこの柔々しき性質が成効したと信ずる。

感情と智と意

世の中の事は理屈と理屈とを合したとて、眞に融合ふ様にものとはならない、強いものと強いもの、固いものと固いものとは決して一つになるものではない、強と柔とあつて初めてよく結び合ふのである器械があつても、油がなければ廻らない、油とは即ち感情である、油が多すぎてもいけない、少くてもいけない、丁度いゝ位の油、それを練磨されたる感情といふのである、感情は知によつて磨かれ意志によつて高められる知と意の足りない感情は未だ練れないから、野生たるを免かれない、ことに婦人は人格の半ばを美しき、感情にて滿たさるゝものだから日々夜々に知を磨き、意志を練り、次第に感情が美しく優しく、清く練磨されて行く事を望まねばならない。（講話筆記文責在記者）

交際の季節に就て

文學士　三輪田元道

例年秋になると交際の時期に入るので、最早今年も其時期に入つて居るのであるが、この交際といふは最も必要なる事であつて、社會の種々なる關係より多くの人々が結合するのであるから、之に就ては最も注意もし、また研究をも要する事と思ふ。

一体この交際、即ち結合力の弱い國は比較的に野蠻であるから、從つて大事業を成すことが出來ないのである、之に反して、この結合力の強いのは謂ゆる大國民の特色と云はねばならぬのである、少し事は舊聞に屬するが、先頃不圖日清戰爭時代に於ける清國の軍備の事に關して某專門家に聞いた事があるが、彼の當時に於ける清國の用ひたる機關砲といふ樣なものは非常に進んで居つたのみならず、個人々々が持つて居つた小銃の如き兵器も頗る嶄新なもので、却々我國のものは遙かに及ばない位であつたが、併し彼等は、殘念にも團体的の運動が出來なかつた爲に、口惜しながらも千歳拭ふべからざる敗を取つたのである、何うして清兵の一人々々は、体格も強壯で決して弱くはない、殊に清兵の勇悍なる事は、明治十七年の清佛事件の當時、佛軍をして膽を寒からしめたのみならず、一時は歐羅巴の各國をして眉を顰めしめた程であつたにも關はらず、遂に我國に負けたといふものは、畢竟彼等の行動が一致協同を缺いたのに歸因すると云ふ事であるが、之に就ても特に婦人に關して、社會や學者は勿論、貴族社會等に就ては十分な交際を爲さしめ、而して結合力を強めなければならぬのであるが、それには團体的の行動を取らしむ事が必要であると考へる。

云ふまでも無く、日本婦人の位地を高め、その他種々改良すべき事の第一着は交際にあるので、この交際即ち多くの人々に附合ふことが、

多ければ多い程利益がある、まづ其一二を云つて見れば、お互に此人間

といふものゝ品位が高くなる、それと同時に人と人と接すると禮義といふものを紊るやうな事はなく、且つ同情に富んで來るから、謂ゆる吉凶禍福共に頒つと云ふやうに思遣りが深くなつて、即ち惻隱の心が發つて來るから、そこで道德的生活を味ふ事が出來るやうになるのであるが、若も之に反して、孤立で深窓の裡に蟄居して居ては、單に衣食住の慾望を充たすに過ぎないので、到底婦人の價値を發揮する事は出來ないのである、それと同時に婦人の智識は非常に單純であつて、その見聞界は僅かに一家の中を出でないと云ふ風であるから、從つて人情に疎く、事理に暗いといふ事は免れないから、如何も男子の側から、婦人といふものは大事を共に議ることの出來るものでは無いとまで見限られて居る。

所が、幸にこの交際なるものが發展すれば、單に社會上の智識が頭に入つて來るのみでは無くしてそれが爲に人情に通じ、事理を解するやうに爲つて來るので、自然卑屈でなくなつて來て、婦人に通有の最も忌むべく最も厭ふべき一種の性癖が脫れて、其者の品位が高くなる。

前述の如く、婦人に交際の必要なる事は論を俟たぬのであるが、まだ其ばかりでは無く、社會多くの事業中で、或者の如きは、如何しても婦人の名前に依らねば完成を望まれないものがある、例へば、慈善、感化、その他神社佛閣に關する謂ゆる宗敎上の事業、或は風俗に關する事柄等の如きである、是等は如何しても婦人の力を籍らなければならない、斯ういふ活動は婦人の力に依つて爲なければ容易に完成は望まれない、併し其も個人では不可ぬ、如何しても團體の力、言換ふれば、交際上に於ける結合力に依らねばならぬのである。

右の如く交際は、個人の品性を高め、および社會の事業の上等に就て利益のある事は蔽ふべからざる

事實であるが、これは利益の事のみを云つたもので、翻つて其半面を見ると弊害の點も少くないから、其點は除くべきは除き、改むべきは改めて貰ひたい、其弊害の中で第一番は何であるかと云ふに、我國の婦人は交際服を有たないそれは服其物のみではない、物質も色も、はた形までも有つて居らぬ、今日世上で稱ふる所の婦人の禮服は謂ゆる白襟紋付であるが、この禮服は男子のフロックコートの樣にそれで何處へでも出る事が出來るといふものではないその白襟紋付を着けて出るのは、謂ゆる何々大會とか又は大宴會とか云ふ席にのみ限られて居つて、平生は流行



物を被て出る風習となつて居る、歐羅巴各國では、隨分この流行といふ事に就ては八ケ間敷く、交際界にも亦それ〴〵の規則もあるのであるが、併し彼方では其樣に八ケ間敷く云ふにも拘はらず、夜會は何々、晝會は何々、その他冠婚葬祭には何々といふやうに習慣が出來て居るから、然までゝ無いが、わが日本には其がない、であるからして、偶々その流行物の裡へ一人白襟紋付を着て出ると、

恰も烏の中の白鷺

のやうで、非常に人々が目を聳てるのみならず、一種異樣に感じられるのである、去れば如何なる服を用うべきかといふ事の習慣は、まづ婦人界より極めて掛るといふ、この事は交際を進める第一着であらうと考へる。

歐洲と我國との富を比較して見ると、彼方の富は非常に進んで居つて、我國は外國から二十八億圓も借金があると云ふ始末であるから、此點より見ても我國では質素にせねばならぬ、然るに動もすれば無

暗に其流行を趁ふべく婦人が腐心するが爲に、一家の主人の迷惑といふものは一ト通りでない、是は婦人が少しく省みねばならぬ事である。

次に世間の人が、慈善界その他の事業に關して、孰れも其名を美にし、而して其美名の下に婦人を利用し働かしむるものがある、婦人はもと〳〵虛榮心に富んで居るものであるから、何とか其會の下に種々の名稱を貰つて働くのであるが、その中には謂ゆる義理づくめに、その名の下に餘儀なくせらるゝ事柄もある、斯ういふ場合は婦人に取つて少なからぬ迷惑を來すのであるから、實は婦人が自己の見識を以て十分之を拒むことが出來るのである、所が、大抵は否々ながらも之を承諾する、その承諾するのは畢竟虛榮心の發現に外ならぬ、そこで一旦之を承諾すると、例へば、慈善會の切符とすれば、之を押賣するやうな結果に陷るので、これは万止むを得ないとは云ふやうなものゝ、斯ういふ事になつては

その婦人の德を傷ける

ことが少くない、何故なれば、其切符を押付けられた者も、其人の顔に對して餘儀なく一枚だけは取つて置かねばならぬと云ふやうな事になるからである。元來慈善とか又は公共の事業とかいふものに關しては、決して表面でなく心底から出た同情同感の念から出て、而して喜捨するといふのが本質である、然るに心にも無き慈善券を强うるといふ事になりては、これを精神界の狀態から云へば、已に業に墮落の根源である、尚ほ一歩進んで云へば、世の人を欺く所の僞善者である、この僞善者なるものは、表面には殊勝らしく仁義を唱へるけれども、素より心の底を洗つて見れば何も無いのであるから、その手先に使はるゝ者も亦自ら僞善者とならしめらるゝので、之は精神界の墮落を醸す基となるから、斯ういふ弊害は一日も速く改めたいものであるが、之を改むるに就て、眞心より竭す、僞善を衒ひたくないといふ事の精神を、まづ婦人界の方面から持出すやうにせねばならぬ、

婦人は慈善の權化

であるから、この世の如來を以て自ら任じて、奮つて右の如き弊害を除くことに努めて貰ひたい。

一般の婦人の交際に必要な事は何であるかといふに、兎角婦人に有勝ちの、互ひの間に分隔てをする、即ち心に墻壁を築くといふ事は宜しくない、如何なる階級の者と交はらうとも、共に與に善く話すは勿論、その話すにも胸襟を披いて、謂ゆる心の奥底を明かして話を爲るといふやうにせねば不可ぬ、併し家事の相談などは禁物であるが、その他は心置きなく話合ふやうに望ましい、然るに在來我國の婦人は、二三の知己のみには兎や角と隔てなく話を交ゆるけれども、その他の者となると、縱ひ一家の中に同じく働いて居つても、恰も行路の人、即ち途中で逢つた見ず知らずの人かのやうに、少しも打融けて話をすると云ふ事はないから、お互に一緒に居ても其不愉快サ加減といふものは無い、一體交際し談話する

と云ふ事は、自ら如何に其が爲に樂しむかと云ふことよりも、まづ

　如何に人を樂しましむる歟

如何にせば人を不愉快に導かぬやうに爲る事が出來るかといふ事を、先に自己の腦髓に描いて置かねばならぬ、別言すれば、自分自らが樂しむ爲に交際すると云ふのでは無くして、先づ相手の者に快感を發させる爲にするのであると云ふ考で掛れば、その話振は何所までも無邪氣であると同時に、

　話題もまた趣味あるものを撰び

さうして滿座の人々に滿足を與へるやうにしなければならぬのである、若しこの兩方面に於て滿足を得らるゝ事となれば、實に其こそ婦人界の一大進歩の基である、

　以上述べた如く、交際の必要なることは論を俟たぬのであるのみならず、それより得る所の利益も多大なものであるが、如何も我國の婦人は未だその方法に熟達して居らぬから、之に伴ふ弊害の爲に或方面から無益のやうに思はれるだけならば尚たしもであるが、何や彼やと世間から批評の辭も聞くのであるが、その惡い所は十分に改善して、而して漸次に之を進歩せしめたならば、單に個人としての婦人に利益があるばかりで無く、延て社會國家に稗益する所が多大であらうと思はれる、それには繰返して云ふが、その弊を去ると同時に之を向上に導くの必要があらうと考へる、聊か所感を述べて、丁度交際の季節であるから、之に適合せしめたいと思つて、一言諸姉の參考に供するのである。

貧苦に打勝つ方法

三浦千枝子

古來からの習慣で、人間の定命は誠に短いものゝやうに、人生僅か五十年などゝ申して、ツイ其が耳慣れて居りますので、吾人ともに悲觀して、五十歲以上一ツでも出ますと、非常に何か儲事でもしたや

うに思つて居るのでありますが、何も昔だからと申して、人間の壽命の相場が五十歳と限られて居りました次第ではあるまいかと存じます、何方かと云ひますれば、世の中は文明開化に進みましたが、却つた御維新以來は割合に人の壽命が短くなつたかと思はれる位でありますが、之は畢竟昔しの人と今の人とを比べて見ますれば、今の人は爲すべき事、行はねばならぬ事柄が多いので、如何しても昔の人のやうに暢氣に搆へては居られない、身体や精神を勞する事が烈しい、乃で壽命が短くなるといふやうな傾があるのかも知れません。

併し昔だからと云つて、皆が皆暢氣な人ばかりでは無く、隨分身体は申すまでもなく、精神を非常に遣ッた人は少くないのでありますけれども、それでさへも大抵長命せられたので、その例は今一々茲に擧るまでゝも御座いますまい、諸孃は既に御承知のことであらうと存じます、然れば何故に、昔の人は概して長命であッたが、當今の人は比較的短命であるかと云ふに、之には種々なる原因がある事で御座いませうが、爾ういふ詮議は御專門の方に讓ると致しまして、

五十歳といふ壽命の相場は何から割出したものであるかと云ふことに就まして、私の聊か思付た事柄をお話いたして見やうと存じますが、果して諸孃の御參考になりますか如何か、その邊は一に諸孃の御判斷に任せると致しませう。

乃で男女に關はらず、人といふものは何の爲に此世の中に生れ出たものであるかと申しますれば、これは申すまでも無く、働くべき爲であるから、如何に身分が善くとも、如何に財產が有らうとも、貧困のものは固よりでありますが、謂ゆる上下貴賤の差別なく、縱んば仕事に異はあらうとも、即ち身体を資本に稼ぐ者もあらうし、また一方は精神を働かせる者もありませう、或は精神も身体も一緒に活動せる人もありませうけれども、孰れも働くといふ事に變りは無いので、申すも畏れ多いことで御座います

が、雲の上なる止んごと無き御一方の御心遣ひといふものは、却々私風情が御察し申し上げるやうなものではございません、この働くといふ事のみは、
　昔も今も通じて
人といふものを支配して居る、動かすべからざる萬代不易の規則かと存じます。

もと〳〵私は片田舎に生れたもので、この東京へは御維新の後、明治五年に良人と共に出てまゐつたもので御座いますが、恥をお話申さねば分りませんので、私の田舎は隨分邊鄙の上に、私の嫁いた良人の家と申しますは謂ゆる水呑百姓なので御座いますから、財産と申したところが、云はゞ鍋釜に鋤鍬ぐらゐが關の山で、この外には別に財産らしいものは一つも有ちません、實は嫁入りの仕度も借着で間に合せたといふ始末で御座いますから、これで大抵は御察しが就かうかと存じます。

ソコデ明治の初年、世の中がガラリと變りましたので、別に是ぞと申して目的のあツた次第では御座いませんけれども、幼少の頃に母などから寢物語に、
たとひ乞食になツても
　江戸の乞食
になれといふ諺があるといふ事を聞かされて居りました事を、ある夜不圖それが胸に浮びましたので、種々良人と相談の上、秋作の收穫を濟し、鋤や鍬の類を賣り、僅の路銀を懷にいたし、鍋釜は世帶を持てば直ぐ要るといふので、それに一二枚の着換を合せて荷を拵らへ、天秤棒にて良人と差擔で、丁度六日目で東京へ着きましたところが、今とは諸式も廉うございましたが、二兩一分二朱の路銀は、剩すところ僅か一兩三分足らずといふ心細い懷で、この一兩三分が二人の命の綱で、之が無くなれば愈々乞食かと思ひますれば、そゞろに故鄕が懷かしくなりましたが、一たび決心して踏出したものを、如何して今更臆面々々と引返すことが出來やう、爾うかと云つて、西を向いても東を向いても一人の知合があるでは無し、サテモ旅の空は辛いものであると、熟々

二人で額を鳩めて兎や角と相談は致して見たものゝ、別に善い分別も附かず、去迚一日々々と路用は減ツて行くし、實に其時ばかりは命が縮んで行くとは此事であらうと存じました

斯くして三日程を過しますと、最早いよ〳〵殘り少なになつて、此上二三日經てば飢死の外は無いので、成程世間の人が、金錢の無いのは首の無いより辛いといふが、斯うも哀れなものか、淺猿しいものではないかと思案に暮て居りましたが、



斯うなツても命は欲しいのが人情で、殊に一層命の大切なることを感ずるのでありますけれども、その命を繋ぐべき食糧を得ることが出來ないと爲つてはその心細サ加減といふものは無いもので御座います、依つて先づ端的この命を維ぐべき方法を講じなければならないのでありますけれども、前にも申し上た通り、旅の空で知合は無し、ソコデ二人相談の上、一時分れ別れになつて奉公することに定め、桂庵の世話で他家へ雇はる

ゝ事となつて、これで一方命の綱は維ぐことが出來たものゝ、今度はその手數料を拂うことが出來ない、主人の家でも昨日や今日來たものであれば、給金の前貸をして呉れないのは當然でありますから、據ろなくタッタ一枚の田舍縞の袷を賣りまして、それで辛とその世話料を拂ッたといふ始末でございます、マー私ぐらゐ貧乏したものは稀だらうと存じますが、併し斯ういふ時に人間といふものは氣を落しては不可ません、働くべき爲の人間であるから、其務を盡すのであると思ひますれば、毫しも辛いの苦しいのといふ考の發ざいますから、奉公なども同樣でごるものでは御座いませんが、併し貧乏といふ事は辛い苦しいものでございますけれども、世の諺にも、

稼ぐに追附く貧乏なし

と申す如く、それ程私などは貧乏いたしましたが、私の仕へた御主人は情深い方で、誠に仕合せで御座いましたから、丁度足掛け六年勤めまして、明治十年の春お暇を戴き、良人と共に稼ぎ蓄た僅かな給金を資本に小商をはじめますと、間もなく西南の戰爭が起りましたので、馬糧用の藁を買つて問屋に入れましたのが本で、それが爲に聊かの利益を得ましたから、その戰爭後は荒物屋と商法換をいたしまして、傍ら良人は石油の引賣をいたして居りますと、御蔭で商賣が繁昌しますので、僅かな儲蓄も出來るやうに成りましたから、追々それを積んで貸家の一戸づゝも求めてまゐりまして、只今では二百軒程の貸家と、五六千坪ばかりの地面も所持いたして居ります、是といふも世の方々の御引立に依ることゝ深く心の裡で御禮を申して居ります。

私は今年丁度五十五歳になりますが、是まで別に何處と云つて惡い所もございませんので、若い時分から病氣で寢たといふ事は無いので御座いますから、藥といふものゝ味を知らないので御座いましたが、年といふものは爭はれないものか、または歲を取つて氣力が衰へたとでも申しませうか、尤も是までとても、別段に養生といふ程の事もしないが、去迚不

養生もしないのでありますけれども、如何したものか、この春以來頭が時々痛みますので、實は此歳になつて始めて御醫者に掛りますと、腦病だといふ御診察で、粉藥や水藥を下さいましたが、如何いふものですか、蟲が好かないとでも申しませうか、それを頂きましてもお腹に保たないのみならず、三度三度頂いた物まで保たないので、爾うかと云つて、

啼く兒にお乳汁

といふやうに、如何しても病氣には藥を用ゐなければならぬものとは存じながらも、如何も散藥や水藥では前に申し上たやうで、却つて病氣を增し、身体を衰へさせますので、何とか良い工夫は無いものであらうかと、お心易い方々は勿論、お遇ひ申す方々にも其手當を伺ッて居りますと、丁度今年二月十一日の國民新聞に、常持醫學士が合劑創製せられたるレーベンといふ腦病の新藥のことが見えたので、その發賣所の弘濟藥院へ如何なる藥かと云つて問合せると、丸藥のやうに出來て居るといふので、兎に角少し取寄せて呑んで見ると効驗があるやうであるから、引續いて一ト月ばかり服みました所が、その以後は少しも頭の重いのを忘れて了ひましたが、聞けば腦病の藥を錠劑に拵へたのは中南定太郎氏が我國では元祖ださうです、お互に幾ら働かう稼がうと思ひましても、身体に甲斐ない所がありますと、思ふやうに働くことの出來るものでは御座いません、諺にも

命あつての物種

と申します通り、ホンの針の尖で突いた程の惡い處がありましても氣分に障るもので、況して身体中で一番大切な頭の惡い程困ることはございません、私などは既に人間の定命五十歲の上、五年も踰えて居るのでありますから、云はゞ儲けもののやうなもので御座いますが、それでも尚ほ此上にも長命がしたいと存じます、それに今少々私が生て居りませんでは、悴が只今大學の二年で、それが卒業してから洋行したいと申して居りますから、何うか歸ッて家の

極りの附くまではと存じて、實は斯うやッて頑張つて居るので御座います、何うも御聞苦しい貧乏話ばかりで痛み入りました。

菊の話

千勝義重

秋におくれて人目も草もかれ行く頃に咲き誇る花といへば、菊を措いて他になく、或は野に山に、或は前裁に、或は後園に、鄙都のけぢめなく其美を賞せられて居りますが、東京では菊細工など申しまして、俗人の眼引き袖引き、少からぬ利得を占むるものもあります、併し美といふ事も斯う利慾に伴うては喜ばしいお話ではありません、高貴の方でこの花を樂しんで居られますのは早稻田の大隈さん、それから曾禰さん、麻布の溝口さん、雲の上にしては赤阪御所の菊で御座いませう。

さてこの菊の花は、我邦でも隨分古から賞美されて居りますから、この花が文學上如何に其美を發揮して居りますものか、其邊の事を深く研究しましたならば面白からうとも思はれますが、夫れ等の作品をかき集めることは一寸容易なことではありませぬ故、今は暫くホンのお話と云ふことに止めて置きませう。

元來この花は支那から渡つたもので、日本固有のものではない樣に思つてお出の方もありませうが、實際は左樣でないのです、植物學者の牧野と申さるゝ方が四國で發見されましたノヂギクといふのは日本固有の花ださうです、菊は造作もなく變り種を作ることの出來るものださうですから、夫れから推して考へますと、外の菊も矢張り昔からあつたのだらうとも思はれます、猶これに就ては「傍廂」といふ書物の前篇に、左の樣なことがあります。

「菊は神代より皇朝にありしかど、いやしげにてめづべき花にあらねば、歌によみしことなし。今も野山に自ら生ひ出づる、俗に野菊といふ物なり。神代記に菊理姫といふ御名のあるは、菊を久々と

いひし證なり。花形括りよせたる如くなればなり。水干直垂などの括綴を菊とぢといへる同じことなり。名義と字音と似たる故に、和名抄に菊四聲字苑云、菊擧竹反、本草註云、菊有二白菊 紫菊 黃菊一、和名加波良與毛木、一に云、可波良於波岐、日精草也とあるは、外戎の菊と混雜したるかきぶりなり。括りのうつりたる通言にて、字音と等しく聞ゆ。菊の字音は、擧竹反とも、居六反ともありて全く等しく聞ゆれど、クヽリ、クヽル、クヽレルなどはたらけば、活用の用言なり。字音は死物にて、うごくこと能はず、似よりても大に異なり。當時家々の庭に生ふしたつる種々の菊は、野山におのづから生ひ出づるとは異にて、今京以來のものなり。本朝通紀に、仁德天皇七十三年、始自レ唐獻二菊種一とあるは、何を證にいへるかおぼつかなし。この天皇の御世に、さる事古事紀にはなし。書紀には六十七年より、八十七年までは事なければ記されず。かにもかくにも、奈良朝以前にはなし。平安以後に渡りしこと、六帖に紀貫之

古鄕にわかれて咲ける菊の花
　たひらかにこそ匂ふべらなれ

このたひらかは則ち、平安の都なり、奈良朝以前に渡りなば、萬葉にあるべきなり。後水尾天皇の

ならの葉のえらびに洩れし菊の花
　のこれる梅の恨やはある

とよみ給ひしは、萬葉に菊花なきと、外戎の楚辭に梅のなきとをのたまひしなり。されど、今の菊は萬葉集の頃はいまだなかりしなり。梅は楚辭にあるべきを洩れたるなり。もとより無きと、有りて洩たるとはいたく異り。」

諸孃も御承知の團子坂の菊細工、彼を行て見ますと何處の家でも、菊細工の元祖はコチラで御座い、本家本元はコチラで御座ると大きな看板で、ドレが本家やら元祖やら分りません、細工は流々、併し大概似寄りのもの、見るといふ點からは別に元祖を尋ねる必要もありませぬ、同じく花を賞するのでありま

すから、菊は日本固有のものである、否や支那より渡つたものであるとさう角目だつて爭ふ程のこともありませんが、話の序であるから、右の樣なことをも書きぬいてお目にかけた次第です。

然り、種ばドウでもよいのです、本家は何づれでも花の美しさに變りはありません、吾人は其美を見やうといふのですからドチラでもよいとして、拔書序に二つ三つ何かお目にかけませう。

▲心あてに折らばや折らん初霜のおきまどはせる白菊の花　凡河内躬恒

▲露ながら折りてかざさん菊の花老せぬ秋のひさしかるべく　紀友則

▲ぬれてほす山路の菊の露の間にいつか千年をわれは經にけん　素性法師

▲うすく濃く色ぞみえける菊の花露やこゝろをわきて置くらん　清原元輔

▲我宿のきくの白露けふごとにいくよつもりて淵となるらん　仝前

右の歌の作者は何れも三十六歌仙の中に數へらるゝ人々でありまして、老せぬ秋の、いつか千年をの二首は菊水を汲みて長命なりし故事に依つたものです、これは後に述べませう。

▲隱れ家や月と菊とに田三反　芭蕉

▲何となく植ゑしが菊の白きかな　巴丈

▲田舍間の薄べり寒し菊の宿　尙白

▲菊の香や嫁入夜着の置古し　許六

▲辻番の一もと菊のあるじかな　也有

▲白菊や庭にあまりて畑まで　蕪村

▲村百戶菊なき門も見えぬかな　同

▲白菊に北の御園は暮れにけり　白雄

▲大名と肩並べけり菊の花　一茶

▲手燭して色失へる黃菊かな　天府

何となく植ゑし白菊や、手燭して色失なへる黃菊など、とり〳〵に面白い句ですが、また俳人許六の百花譜に於る菊の見立も面白いではありませんか。

菊の隱逸なるは、和漢共に名に立ちたる花なれば

あらためて言ひ難し、風流物好、目立ちたる事を嫌へるは、よき女の夫におくれて、閑なる片田舎に立ちしのび、齢も未だ三十になるやならずの盛なれば、さすがに髪などおろすべくもあらず、たゞ一人ある幼き者にひかれて、心ならず世の中に住佗びたるを恥かしと思へる人に似たり。

と、此外わが國の文學にあらはれた菊の花に就て、彼此と詮義立てをしたならば、趣味深いことでありませうが、それは既にお斷り申した通り爲ぬことゝして、古城氏が支那文學にあらはれたる花と題して語られました中の菊の條を左に御紹介しませう。

菊は陶家の愛種にて、菊としいへば何人も先づ淵明を聯想すると同時に、又其の文學上の製作として品題を菊に取り、大に鋪叙敷陳の技を擅にせるものあるべしと想望せんも、其集中を案ずるに、唯僅に「九日閑居」の題下に於て、菊花に言及せしものあるに過ぎず云々。

菊も亦、經子百家の散見するもの極めて多し、禮記には、季秋之月、黄有二黄華一と見え、崔實が月令には、九月九日可レ採二菊花一と記せられ、風俗通には南陽の酈縣山に大菊あり、甘水山上より流下し民家その滋液を飲みて長命する者多きを說き、范至能が菊譜の叙には、秋晩に至り草木變衰すれども、獨り菊のみ灼然として秀發し、風露に傲睨するは幽人逸士の荒寒寂寥に在るも、道を味うて其樂みを改めざるの趣ありと稱せり、又菊を以て仙家の藥と稱して、其液を飲めば長命安康なりとし壽詞に用ひられたること多し、太平記俊基朝臣關東下向の條に　昔南陽縣菊水、汲下流而延齡と見えたるも、亦た謠曲に枕慈童の一曲あるも、共に風俗通に原本して、其長命を述べたるものなり、されば此花は和漢に通じて目出度名譽を荷へるものといふべし。

とありますが、菊の事を一に、淵明の花、若しくは延命の花と申すことも、推してお分りの事と思ひます。其延命といふ事が緣起になつて、我國でも古くから

月も日も九陽にあたる九月九日を、重陽の節句と申して菊酒を飲む例があります、清少納言が枕草紙の「せち」(節)はといふ條に、九月九日の菊を綾と生絹に包みて、などありますのに見ても、古くからの例といふ事が分りませうし、又延命の故事や九月九日の事は前項にも見えて居りますから、支那の故事に依つたものである事がお分りだらうと思ひます。ザッとお話しをすれば、昔支那に桓景と申す人がありまして、或時山に遊び、不圖一人の仙人に逢つたのです、すると仙人が、御前の身には今災難が降りかゝつて居る、事によると命も危うい、けれども、九月九日に山へ入つて菊の酒を飲めば之を逃れることが出來ると云ひました、そこで桓景は九月九日に云れた通り山へ入り、菊の酒を飲んで居ましたら、案の如く家では色々不思議なことがあつて、殘して置いた生物は悉く死んで仕舞つた、といふのでありますが、これは九月九日の原因で、菊水を汲んで命を延ぶることは、矢張り酈縣の菊水が原因のやうであります。で、我國の朝廷にあつても、昔からこの例を行はれました、即ち此日に、天子樣は多くの御役人を御招ぎになり、菊のお酒宴を御開きになりましたもので、これは何の御代にも行はれたのであります、明治の御代になりましては、舊暦を御廢止になりました爲め、表向き菊の御節句はなくなりました―が、赤阪の御所では、今でも年々菊をお作りになつて、在朝の貴紳を初め、外國の紳士に拜觀をお許しになります、是れ取りも直さず明治の菊の御節句なのであります。

　見渡せば世は今秋の末つ方、野邊の錦とばかりありました八千草も大方枯れ〴〵になりまして、ひとり菊のみ香も高き盛りで、而かも天長節といふ嘉辰を間近に控えて居ります折柄ですから、一には天長節を壽ぐしるしまでに、目出度いお話をして終ることに致しませう、と申すのは、この菊花が皇室の御紋章であるのは、抑もどんな理由であらうか、深き根ざしは固より知る由も御座いませんが、唯思ひの

まゝを申上ぐるので御座います。
赤地の錦に十六瓣の菊花を表した御旗、それに天皇旗と御名稱を附せられましたのは明治三年のことで御座いますが、古くは、後鳥羽天皇が隠岐國に在された時、親しくお鍛へになりました刀劍の銘、それから、白河院が法勝寺の瓦にお用ひになつた御紋章、何れも菊花であつたとの事今のやうに皇室の御紋章を菊花と定められましたのも夫れ等の因緣からでも御座いませうか、其形の太



陽の光線に似たるもふさはしく、將た、くゝりの花、天皇陛下は日の本の總ぐゝりにて在はせばと申すも、因緣のあることにて、目出度しとも目出度き事で御座います。
群芳地に落ちて滿目蕭條たるの時獨り霜にもめげぬ色香のけだかさは何にたとへませう。あゝ菊なる哉、菊、また
菊はクリサンセマムと申ますが、氣の早い方は、菊は禁裡—皇室—の御紋であれば、キンリサンのモンと云ふのを訛つたのではないか、などと申される

かも知れませんが、これは拉丁語のクリソス（黄金）といふ語と、アンセマムといふ語の熟合で、即ち黄金の花といふ意味ださうです、あゝ黄金の花、菊は誠に尊い花ではありませんか。

さらば諸孃、この菊の花をかざして、陛下の萬歳を唱へませう。いざさらば。

岡のにしき

小川　子

頃しも秋の末つかた、ひと日清岡覺子の君がのたまふやう、目黒のさとなる岩永里子君から、紅葉見にゆかまほし、君も來給ひてむやと、さそひ給ふに、さは面白からんと契り置しに、其日になりければ、時刻をいつとも聞かざりければ、口をしと電話にて尋ぬるに、おもと人達が答ふるやう、とく出給ひぬ、今頃はかなたに至り着き給ひぬらんとあるに、驚きてそゝやと小車はしらせてゆきぬ、至りて問へは、

まだ來給はずといふ、されど里子君いで迎へていざなひ給へば入りたるに、阿部優子君はやうより來給ひて奥なる母屋に木の芽にさせて居給ふが嬉しくて、かたらふ程に琵琶の上手いで來て平家を語る、琵琶の名を秋風といひ、曲は小督の局なりけり、折しも庭にはうら枯わたる篠薄の幾むらとなく、打なびきたれば、優子の君

　秋風のさそふまに〱いにしへの
　　さが野をわくる心地こそすれ

とよみいで給へば、おのれ

　よつの緒の靜けきしらべ身にしめて
　　見わたすそのになびく小すゝき

と口すさびけるに、里子君とりあへず

　招きつゝ枯行庭の花すゝき
　　うれしかるらん君にとはれて

とかへしゝ給ふ程に、時も移りけれど、覺子の君まだ來給はねば、はえなくていざや先づ見むとて、優子君諸共庭におりたてば、庭の氣色はげに夕日が岡

と名づけられたるも似げなからず、向ひたる方はさながら打日さす西の都の朝日が岡を、少しさゝやかにしなしたるやうにて、おのづからなる山のいと高やかながら、横ほりふせるに尾上よりふもと迄、老木若木の松ども數しらず、並みたてるに、紅葉の木末ひまもなう、枝さしかはしつゝてり渡れるは、目もあやにうるはしければ、優子君

いつの間に都はなれて山姫の
おれるにしきにつゝまれぬらん

とあり、おのれは下陰の苔むしたる石に腰打かけて

紅葉のてるや夕日のおかの名も
げにと見るまで匂ふ色かな

と口すさびつゝある、程に覺子の君來給へりとのゝしれば、皆喜びて笑みつゝ迎へたり、おのれ

さそはれて出にし我は先きだちて
おくれし君をまちぞわびつる

とかこちつゝうらみ顔にいひければ、覺子の君ほゝゑみながら

まつといふつらさを君に知らせむと
道のほとりに草はつみけり

と答へ給ふ、此時末の姫君若子の君御うま子の喜美子の君もしたがひて來給へるに、若子の君は御年十八九なれば、盛にていとうつくしう、見め形すぐれ給へる君なれば、たとへむ方なし、はた喜美子君六つになり給へるが、いはけたるさまのらうたげなるは、彼若紫の君がをさなくて、いはけ給へりしさまにもよそへらるゝ斗なり、覺子の君さこそ樂しくおぼすらめど、うら山しう見ゆ、斯くて表なる客人居にいざなはれて人皆座に着きぬ、向ひの方を見やるに、峯の木末はかゝやく斗てり盡したれば、おのれ

さしむかふ峯にも尾にも染つくす
紅葉のにしき何にたとへむ

覺子の君

てり渡るもみぢに松の色そへて
君がことばもあらはれけり

とよみいで給へば、里子の君

めでらるゝ君がことばに此秋は
　紅葉もさぞな嬉しかるらん

また琵琶ひきける人

秋されば目黒の山は名のみにて
　こずゑのこらず色づきにけり

と口ずさびければ、また里子のきみ

うるはしきことばの露に我庭の
　はえなき紅葉いろそひにけり

などいひ〳〵して喜びあへるに、これよりあるじまうけも、海山の心づくしを種々いたさるゝ中に、かゝるさとびたる所なればとて、園の中なる畑つものをとり〳〵、珍らしきさまに調じて物せられけるが、わきて味はひのよければ、人皆あきみちて喜びたり、

覺子のきみ

紅葉のあかき色にぞあらはるゝ
　あるじまうけの心づくしも

里子の君

へだてなき友のまとゐの嬉しさに
　あるじまうけも打わすれつゝ

かゝる程に、若子の君箏の御琴かきならし給へば、里子君もおなじ音をあはされ、野邊地瀧子ぬしは、三すぢの糸を今めかしうしらべらるゝに、聲さへ曇りなき空に澄のぼりて、たとしへなう面白し、かゝれば、おのれ

かきならす玉の小琴にみつの緒の
　しらべをそへて送る松風

里子君

嬉しさにかきなしけり爪琴を
　しらべあはして老もわすれつ

跡見玉枝女史は、筆をぬらして、菊よ紅葉よ尾すゝきよと、くさ〴〵ゑがかるゝ中に、あるじの君ことに稲を好み給ふさがありとて、房やかなる稲穂に雀のとまり居て、口を開きたるかたをものせられけるがありければ、おのれ

うるはしく實るたり穂のゆたけさに
　千代とさへづる小田の小すゞめ

など書きすさびつゝ、猶庭の面のあかぬ氣色を、かへす〳〵もめでゝ、左の方を見やれば、岡のなから斗に細やかなれど、瀧の糸もかゝりて靜なり、其流の末廣き池にて蓮葉の枯れたるが、そよ吹風にもはら〳〵と音するなどもいみじう哀れなり、玆に白鷺などたゝせまほしき風情にこそ、彼方なる中門のきはには、大きやかなる菊のませの中に、なみたてるが珍らしく、花やかなる色あひごもして數しらず匂ひあひたり、されば此菊を里子きみがみづから手折來て、覺子の君に御覽せさすれば覺子の君

花かめにさしたる菊の香にめでゝ
　我よはひさへ千代ものぶらん

と口すさび給へば、里子のきみ

心なくかめにさしたる千代の香に
　よはひをのぶときくぞ嬉しき

などいひあへるに、また琵琶をひき出たり、曲の名を横笛といふ、覺子の君

横ぶえのしらべ妙なるよつのをに
　心ひかれて長居せしかな

とありける折は、はや岡のなにおふ夕日のかげも、山のうしろに入りはてければ、里子の君

へだてなき我友どちと遊ぶ日は
　秋の日かげのことにみじかき

と口をしげにいはるゝも、愛敬深き心よりこそと、あかず懷かしけれど、いざや夜のふけぬ間にと、催したてゝたち歸りぬ。

愛兒を持てる母の爲に

醫學士　金田　循

貴賤貧富となく、愛兒を持ちたる母の心は一つで誰ありて其兒の不健康を希ひ虛弱を喜ぶものがあらうや、其は必ず强健の上にも强健に、無病の上にも無病のやうにと希ふに相違ない、然るに動もするとその望む所と行ふ所と反對なる事實を見るといふ、斯くも奇異なる現象が世の或一部に行はれつゝある

のであるが、畢竟それは舊習に荒んで育兒の新知識が普及しない爲ではあるまいか、どうも爾うと察せられる、依つて或は陳腐かは知らないけれども、聊か愛兒を持てる世の母の爲に、その平素心得て置かれねばならぬ緊要の點を掻摘んで御話して見たいと思ふのである。

第一は乳兒の哺育

であるが、元來乳兒が屢次病の爲に苦むは何に因るかといへば、多くは其哺育の惡い爲である、尤も世の中には、自己の職業上や又は健康上の關係から、その乳兒を生みたる母の乳汁を直接に與へる事の出來ないものもある、かゝる場合には何を以て其愛兒を哺育したものであらうかと云ふに、富有なる家庭に生れた乳兒は、幸にして相當なる乳母を傭入れる事も出來やうけれども、中産以下の家では其が叶はないから、先づ以て牛乳とか山羊の乳とかを用ゐるのであるが、その牛乳や山羊の乳は、人の乳と比べて大して其成分や効力の異はないものであるけれども、人の兒は矢張り人の乳で育てるに若くはない、併し牛乳や山羊乳を代用するには其儘用うる事は出來ない、大凡それらの乳一分に水三分、乃至それらの乳二分に水一分位の割合に薄くして、それに極良い砂糖を少し許り混せ、而して之をよく煮沸した後に與へなければ不可ないのであるにも拘はらず、世の多くの母たる人はホンの、素人考で、牛乳や山羊の乳を薄くすると、隨つて効能が弱くならうと云ふので其儘與へる方があるが、是は以ての外の了簡違ひといふものである、何故といふに、嬰兒の胃は大人のやうに消化力が完全でない、そこで其乳が胃を刺戟するから吐瀉をする、之が度重なると消化器を害する所より疾病を惹起すに至るのである、尤も夫等の代りにコンデンスミルクを薄くして與へても可い、又時としては生後二三ケ月を經たる乳兒には、白米を煎じたる汁を漉して與へても可いが、この米汁は牛乳や山羊の乳のやうに滋養分に富んで居らない、故に之は萬止むを得ざる時の策と思はねばなら

ぬのである、それから牛乳等を容れる器物は、常に清潔に保つべきは勿論　殊に乳兒が直接に口に觸れる部分は一層の注意を拂はなければ不可ない。

かの乳兒に最も恐るべき吐瀉病は、主として右の器物の取扱が不潔に渉るからである、生後十ヶ月も經てば、最早カステイラの如き、軟くして且つ多少の滋養分に富める菓子を與へても差支ない、又半熟の鷄卵は、生後滿一ヶ年經つてからで無ければ無理で、消化し易い犢の肉、鷄肉、脂肪の少ない牛肉等は、生後滿二ヶ年を經過するまでは與へてはならぬ、そして最早此年頃になれば、淡泊なる青物、馬鈴薯、菓實などを與へ、且つおひ〳〵に成分の強い食物に慣れさせるやうにしなければならぬのであるが、消化し難い食物は勿論、香料を加へたる食品とか酒類等は一切與へてはならぬ、それから砂糖分に富んだ食物は最も小兒に有害無効なるものであるから、是等は母たる者が深く注意をせねば不可ぬ。

第二は乳汁を與ふる時間

の事であるが、これは頗る其嬰兒の健康上および生長後の習慣上に大關係を有つて居るので、實に大切な事であるにも拘はらず、世の母たる人を見るに、多くは愛兒が叫ぶを聞くと等しく、直ちに乳汁を與へて其叫を靜めやうとする傾があるが、これは大に戒しむべき事であるから、爾う急に一時に舊來の習慣を改めるといふ事も困難であらうが、然らば漸次に之を更めて、成るべく一日に乳汁を與へる時間を正確に定めて置いて、その時間以外には決して與へぬやうにせねば不可ない。

第三は乳兒の號叫

だが、一體乳兒の號叫するのは大人の談話するのと、さして差いはないので、即ち此號叫によりて飢渴を知らせ、或は苦痛を訴へ、或は不快を報ずるのである、それ故に母たる者はよく種々の點に注意し、その號叫が飢渴の爲だと知つたならば、常よりも稍多量の乳汁を與へ、若し苦痛の爲だと感じたならば、懇ろに其原因を探つて苦痛を去る事に勉め、或は不

快を訴へるのであると覺つたならば、もしや小虫でも皮膚に觸れて居るのではあるまいか、または被服の濕潤および壓迫等の爲ではあるまいかと云ふやうな事を撿べて、大抵の塲合には其號叫は健全を示すものである事を覺つて、濫りに乳汁を與へて胃を害せぬやうに爲るのが母たる者の務である。

第四は乳兒の睡眠であるが、大人と差つて乳兒は睡眠を要することの多いものであるから、その睡眠の間は、努めて靜粛にして熟睡より覺さぬ樣にせねばならぬ、多くの母は乳兒を眠らしむるに乳汁を呑せながらする人が十中九分九厘であるが、これが爲に乳兒の消化器を害するは云ふまでもなく、時としては母の乳房の爲に乳兒を窒息せしむることは決して珍らしくない、之は深く愼しまなければならぬ、若し乳兒が寢着かない時は、母の手にて輕く乳兒の臀部を擦つて行るが宜い、左すれば大抵眠附くものである、それから之は言ふまでも無いが、乳兒の臥床は成るべく常に清

潔にして、而して輕くして能く乾きたる物を用ゐ、枕は柔らにして、あまり高くないものを用ゐるやうに注意するが肝腎である。

第五は乳兒の澡浴に關する事で、乳兒の發育が佳良であるやうにと希ふならば、第一に身體を清潔にすることを怠つてはならぬ、乳兒の身體は常に排便等によりて汚さるゝものなれば、しば／＼澡浴せしめ、太腿の近所は殊によく洗つて行るが可い、而して最も汚るゝ部には、浴後少しく水揚酸を加へたる澱粉を撒布してさへ行れば、決して糜爛るなどといふ事のあるものでは無い、一体澡浴せしむるには、成るべき密閉したる明るい浴室を撰ぶが可い、といふは、乳兒の皮膚は極めて薄弱なもので、直ぐに外氣の刺戟に感じ易いものであるからである、去れば風雨の甚だしい時などには澡浴を廢して、温湯に浸したる西洋手拭をよく絞り、それにて汚れたる部分ばかりを拭ひ、後に濕氣の殘らぬやう乾きたる西洋手拭にて拭取つて置い

て遣らねば不可ぬ、此澡浴に用うる湯の温度は、所謂る熱からず冷たからず、攝氏の三十四度位のものが最も適當である、而して澡浴が全く終つたならば、暖かく衣服を纏つて靜かに眠らせに限る。

第六は乳兒の衣服に就ては、輕く柔らかく、且つ空氣を通し温を保つ毛織物で作られたる物が最も可い、されば之は不潔になり易いのみならず、甚た高價なれば、木綿物でも宜い、乃で不潔物が附いたり、又は濕つ



た時は、直ちに他の乾きたる清潔の物と取換へる事を怠つてはならぬ、帶締を堅く締め、又は幾枚も衣服を多く重ねて胸や腹を壓迫せぬやうにせねば不可ぬ夫から頭巾、襟卷といふやうな物は戸外に出る時の外決して用ゐぬが宜い、併し足袋丈は常に穿かしめて置が可い。

第七は乳兒と空氣との關係であるが、天氣が清朗であつて風の烈しく

無い日には、乳兒を抱くか又は乳母車に載せて、成るべく戸外に連出して、而して新鮮なる空氣を呼吸せしむるが可い、太陽と淸淨なる空氣とは、實に乳兒に取りて此上なき良友である、但し濕氣の多い朝とか晩には、長く戸外に出して置いてはならぬ、それに一つの禁物は乳兒を脊に負ふことである。

第八は乳兒と眼病

であるが、乳兒は兎角生後幾もなく眼病に罹りたがるものであるのみならず、之が爲に終生不具の身となることがある、斯ういふ時には母たる者は差措かず專門のお醫者へ馳附けねばならぬ、若も治療が手後れにさへならなければ、大抵は全治するものである、而してその眼病の徵候は、眼尻に粘汁が附き又は眼瞼が閉止等によりて知らるゝものであるから、母は常に乳兒が眠から覺めた時は、淸潔なる布を微温湯に浸したるものにて能く眼の邊を拭いて遣ることを忘れてはならぬ。

第九は乳兒と齒牙

との事であるが、生後半年經つと、早晩齒牙の發生を見るもので、此時期に於ては、乳兒の顎緣は著しく膨起し、唾液の分泌は著しく增し、或は乳兒は屢次己の手を口中に挿入れたり、又は寢ても安眠しないばかりでなく、叫び易くなつて、其上時としては熱を發する事さへある、而して此時期には兎角痙攣、咳嗽、皮膚發疹、高熱等の諸徵候のあるものなれば、毫しも油斷をせずに小兒科の醫者に診て貰ふが可い兒供を澤山に持つた人は、是等を悉く齒牙の發生期に於ける常態として殆んど重を置かないで、往々夫が爲に愛兒を死地に陷ることがある、實に無慈悲の至りと云はなければならぬ。

第十は乳兒と言語

との關係は如何といふに、生後一年を經たる乳兒は、最早喃々と語り初めるものであるが、併し各自多少の遲速はある、それを世間では、吾兒が隣りの同年の小兒に比して少し言葉の出しやうが遲いと、頻りに其を苦にして、或は不具ではあるまいかなどゝ心

配し、神佛に祈念し、或は加持祈禱に耽り、甚しきに至りては、舌の繫帶が短かいのであらうなど〻想像して、切斷を企つる人さへある、されどこの舌の繫帶なるものは談話するに從つて延びて行くもので自然に舌を自由自在に運動せしものであるから、繫帶の切斷などいふ怖ろしい事は何の役にも立つものでは無い、却つて夫が爲に熱を發して膿を釀すことがある、何も左程苦にせずとも、月日の經つに從つて發音するものであるから、安心して彼此と迷はないが宜い。

第十一は起立と歩行とであるが、これも小兒が發言する時期に達すれば、否とも起ちもし歩みもしたかと思ふものであれば、側のものは危險の事の無いやうに注意監督してさへ居れば宜い、併し之とても言語と同じく遲速のあることは免れないものである、殊に佝僂病一名英吉利病に罹つて居る小兒は、その骨が柔軟なる爲に歩行を初めることが遲い、さいはひ我國には此病が少いけれども、若も此病に罹つた小兒のあつた時には、決して無理に起立せしめやうとしたり、又は歩行を勸めたりしてはならぬ、何せなれば、骨が軟かであるから体重の爲に屈曲の恐れがあるからである。

第十二は智能の發達であるが、小兒が生長して稍思考力に富み、智能が增加しやうとする時代になつたならば、小兒の身体の發育を計ると同時に、また精神教育を施さなければならぬ、出來得るならば、その身体の發達は自然に任じ、餘り必要ならざる事に向つて想像力を用ゐさせぬ樣に爲るが宜い、斯くすれば或は多少智能の發達は遲れるか知ないけれども、身体は夫が爲に一層强健の度を增すものである、世の親を見るに、己の愛兒を他人の兒に劣らしめぬやうにとて、身体の發育時期などゝ云ふ事には毫も頓着なく、濫りに種々の學科や技藝などを授けたり、又は難問などを試みる者があるが、これは大なる謬であつて、今發育しつゝある小兒には堪へ得べからざる事である、一

時は神童と呼ばれ、世間から注視されたる怜悧の小兒が、生長するに從つて記臆惡しく思考力の減退するのは、多くは其時期に於ける過度の腦刺戟に外ならぬのであるから、職業上或は其他の事故により、父母自らが其子女の敎育に身を委ぬることの出來ない家にては、親切なる幼稚園へ預ける方が安全な方法である、斯くする時は、其小兒は他の園兒等と樂しく遊びながら、必要なる初步の敎育は受けしむる事が出來るからである。

第十三は幼女の敎育

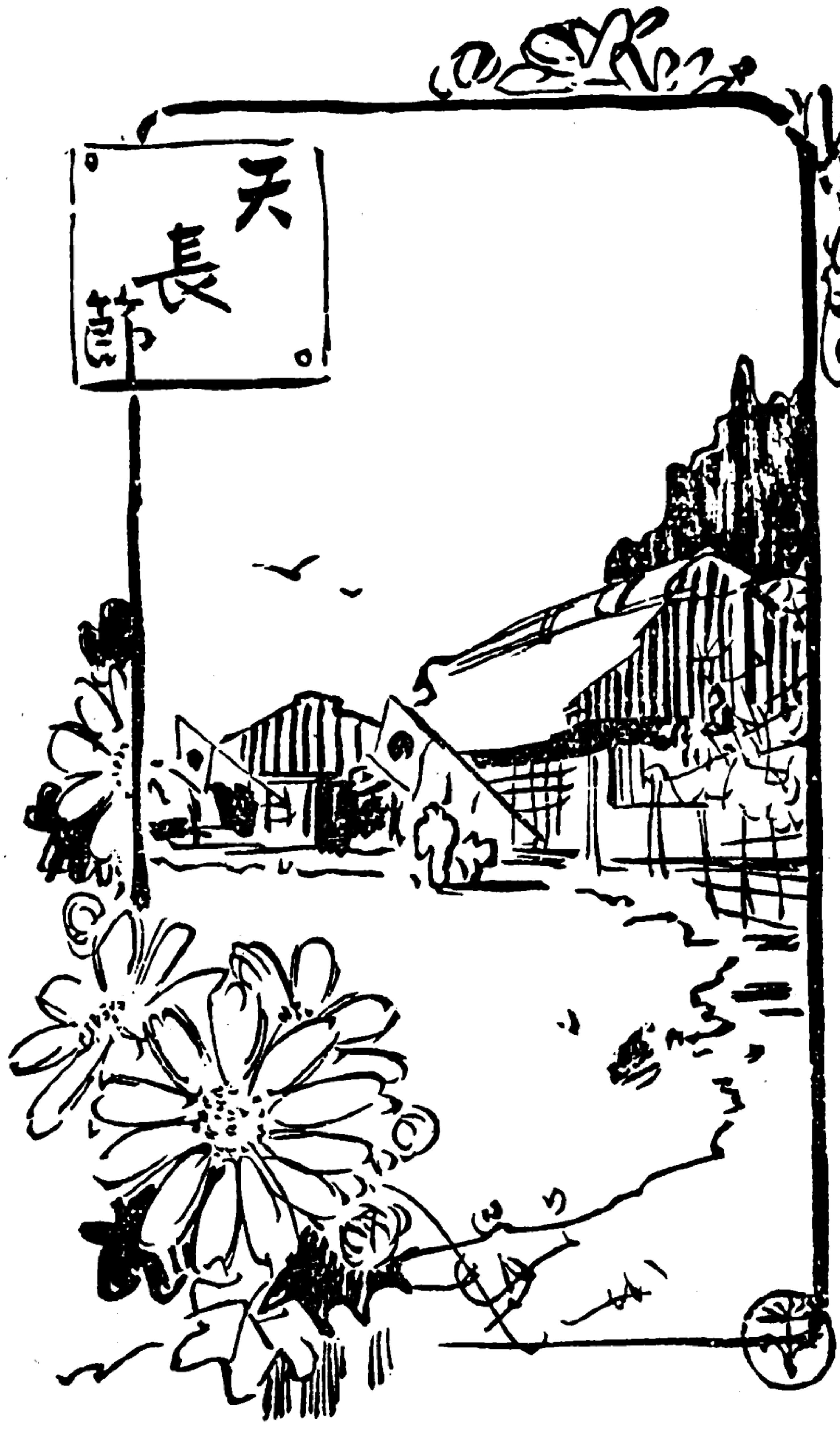
元來女兒は男兒と異なりて、自然身体の纖弱なるものなれば、特に其看護敎養に對しては注意を要するのであるが、もしも腦を用うることが過度なる時は、其の纖弱なる身躰はいよ〳〵益々纖弱となりて、遂には萎黃病、神經過敏症を發するものであるから、幼女を持てる父母は、專ら慈愛を旨として庇保敎訓することが肝要である、決して無用の愛に偏してはならぬ。

下婢時代の感想

蓬生女史

私は不幸の身で、三歲の時夙く父親に訣れ、母の手一つで育つたものでありまして、それも私一人ではありません、固より家も餘り裕では無い、父が長々の病氣の爲に、多くも無い家財道具までも藥の代に換へた後でありますから、上の二人の姉は、子守または水仕奉公に出されたのでありますが、尙ほ七歲になる姉と當歲の弟と、それに私と都合三人の者は、據ろなく母の膝下に括附いて居りましたので、母は纖弱き女の身を以て、彼方の使ひ此方の漸洗濯といふやうな事をいたして、夜の目も碌々合はすこと稀な位に稼がれて私共を育てゝ下さいましたのであります、その中に直ぐ上の姉も奉公に出たのでありますが、私はまだ幼けないので依然家に遊んで居りましたので、今は吾等兄弟は二人となりましたが、母は寄る年波と共に持病のリウマチスの爲に時々窘

しめられますので、小供ながらも御痛はしいとは思ひながらも、何にいたせ我界のない小供のことでありますから如何とも致すことは出來ませんで、倘、二三年を過しました、丁度私が十二歲の夏、母に請ふてツイ近所の富豪の家に子守として行く事に定たのであります、これが抑も私が世の荒浪に漕ぎ出た初めであります、近所とは云ひながら、懐かしき母の手を離れて行くのでありますから、餘り好い心地は致しませんのみならず、何んとなく裏悲しいやうな氣がいたしまして、覺えず淚一雫こぼしますと、母も淚のこもる目をしばたゝひて、辛からうが心棒してくれとの温かき慰め言を仰有るので、是は今に身に泌みて居りますが、イーエ母上、私は奉公が辛いの子守が厭のといふのではありません、タヾ何となく母上の傍を離れるのがと申して、乃て母に伴れられて奉公先へ參りました。



サテ初めの中は何うも人様の家といふことが頭にある爲か、ごこどもなく氣塞さへなやうな心持がいたしますので、まづ小供を負つて出て居ります間は別に何んとも無く、自宅に居りました時も始終弟の保傳を致しましたから、子守は少しも厭ひませんのみ

ならず、如何云ものか少い時分から嬰兒が好きでしたから、その小兒衆も克く懐きまするので、結句自宅に居る時と少しも替りません、けれども晝はさうでもありませんが、夕方家の中に入る時になると、どうも足が重いやうな氣が致しますると共に、生家の方の空を眺めては、別に思ふといふではないが、何となく懐かしいやうな氣も致しましたが、二日三日と經ちますに從つて、最早それも止みまして、子守大事と奉公いたしますると、その御子さんが非常に私に馴染まるゝ所から、御兩親も悦ばれて、自然なにくれと無く私を劬はつて下さるので、今は自分の生家も同樣な氣になつて、夜になつても母の夢路を辿るといふ事も少くなつたのであります。

春と暮し夏と過ぎて、丁度足かけ此所に四年の歲月を送りて年期も明けましたので、今度は少し離れましたお家へ奉公替へをいたすことになつて、サテ御暇乞といふ時になりますと、是まで御守を申した御子が絡まられて、中々放さうとは爲さらないので

兎や角と御騙し申しても、蟲が知らせるとでも申しませうか、どうも私の袖を捉へたなり、平常とは違つてお去りなさらないので、惡いとは承知しながらも角に斯くとお騙し申し、隱れるやうにして御暇を戴きましたが、その時に御兩親は淚を浮べて居られましたので、私もツイ貰ひ泣をいたしましたが、サテ渡る世間に鬼は無いとか聞きましたが、實にさうかと思ひました、能く世間の子守方は、非常に辛いものゝやうに言はれますが、一体それは何故でございませうか、私は前にお話し申す如く、幼い時からの不幸で、他の御方のやうに學校へも上がることが出來ないので、漸く此の子守先で、夜々僅か一時間か二時間程づゝ、物の本や手習を敎へて戴いて、今では自分の名前位は書くやうになりましたが、その外に學問といふものは如何なものか存じませんが、たゞ子守は、その御子を自分の親身の弟か妹のやうにしなければならぬといふことゝ、御主人の大切の御子さんであるから、若しも怪我でもあつてはなら

ぬといふやうに氣を配るの外は無いものであると、斯やうに

胸に問ひ胸に膺へ

て勤めて參りましただけですが、仕合と御子さんにも亦その御兩親にも可愛がられました、是は私が勤の宜いのではない、全く御主人側の方が宜かつた爲であると存じて居ります、

それから今度は水仕奉公でありましたが、この御家には三夫婦も居らつしやるといふのでも大抵は御推量が附きませうが、隨分大勢の御家內でございますから、御番衆も私より二つ年上の方と二人でございますが、中々忙しいので、自分の襦袢一枚洗濯する暇も容易に得られないといふ有樣、それに御家が御交際が廣いと見えまして、夜も晝も必ず二人や三人の御來客が絶えないといふ風でありますから、仲働きの方も容易では無いのでございます、ソコデ私共は奥の方へ遠いので克くは存じませんが、どういふものか、奥の女中は二月と居る者が無いのでござゐます、餘り不思議でなりませんから、うす〳〵どういふ譯かと氣を附けて見ますと、取次のしやうが惡いとか、茶の出し方が宜くないとか、障子の閉てやうが緩いとか、それは〳〵一々、時としては御客の前をも御構へなく小言を仰有るので、如何にも堪へられないといふので直に退つてしまはれるのだといふ事が分りましたが、如何に給金を頂戴して居たとて、餘り御客の前をも御構へなしに仰有られては、中々堪へらるゝものではありません、ソコデ同じ奉公人を召し使はるゝにも、蔭で親切に敎へて下されば有難いと身に耐へますが、さうで無いと、或は奉公人根性とでも申しませうか、直ぐに退るやうな事になるので、双方の御損は此上なからうと存じます、

水邊の紅葉

孫見道人

霜に色添ふもみぢ葉の
　岩うつ瀬にかつちりて
にしき曝らすおもしろさ
　妹が小袖に縫はまほし

箏曲を初學者に授くる注意

鈴木鼓村

私が多年箏曲の教授法に就ては隨分苦勞をした、如何にせば箏の有する自然の妙音を遺憾なく顯はし得るとか出來るか、如何にせば私の教授によりて門人諸子が完全に技能に習熟し、一面作曲家として世に立つことが出來るか、勿論此點に就ては各自の技倆如何に據ることは云ふ迄もないが、先天的不器用なものでも教へ方によつては、相應な覺え方をする者である、自分の許へ來る初學者に教ゆる順序は第一に

指の良否を見る

ことが最も大切な條件である、如何に本人が熱心に覺え込むにしても、先天的手指の機能に障りがあつたら到底完全なる箏曲家を成立たす事が出來ない併しそれも程度の問題で、兎も角箏でもやると云ふ者には這麽心配はマア無いとして差支へないものである、夫から愈々本人が入門に決すると、先づ箏に觸るゝ前に當つて

箏の說明をする

この樂器の名は箏と謂ふ、琴と云ふ字は遍く用ゐられてゐるが、琴は元來七絃のもの、意味が擴くなつて絃の多少に拘らず通俗琴と云ふ事になつてゐる例へば二十五絃、六絃、二絃、一絃、何れも後から出來たもので、十三絃も矢張この意味から琴と呼ばれてゐるが、此樂器は箏である、箏は十三絃に限るのですと云ふ樣に教へてかゝる、次に箏を形成する部分の名稱等を一々說明して、深く初學者の頭腦の中に先づ箏と云ふ樂器の形態を會得せしむる樣に努める、夫から

姿勢が肝腎

である事を教へるのです、樂器を彈奏する方法には通常座彈法と立彈法の二ツがある座彈法は目下廣く行はれてゐる姿勢で、立彈法は腰を掛けて彈くのです、この方法は最も古い時代に行はれたるものだそうで、今此方法を試みたとて別に不思議でも何で

もありませんが、私は座彈法に就て少しお話する

彈奏法の歴史

王朝時代則ち管絃樂にたづさはつてゐた頃の姿勢と、足利中世即ち筑紫流時代と德川時代に入つて八ツ橋中興以後、則ち盲人の手に委せられた時代との三期に渉つて少くなからぬ變遷があつた、先づ女子のには二方法あるが、男子で云つて見れば、左の足を右の股の上へ載せて足を組むのが古い姿勢である、中世は男子も女子も、兩脚の膝より下部を右の方へ出して座り、其左の足の裏面を右の股に附着させるのであつた、其後八ツ橋に到つてから兩膝を折つて箏に對して座る樣になつたのです、

各流の違ひ

を謂つて見ると、生田流は箏の磯(側面部)に對つて、殆ど四十五度位左斜に座するし、山田流は眞直に磯に對すると云ふが、私の考へる處から云ふと兩方法とも餘り優れた樣にも思へない、自分は技術の習熟上、若くは優雅なぞと云ふ點なぞを參配して、目下行つてゐる姿勢は先づ、臀部の右側端を龍舌(箏の頭部端)の延線上に置き、少しく斜の左向きをなし、右の膝頭を殆んど『磯』に附着せしめ、左の膝頭は巾(絃名)より三指程離して坐る工合にやる、次に身体をまつすぐにして左手は『柱』の左側に於て運用を自在ならしむる樣になし、右手の上關節と肘と手首、指を頗る柔軟にして絃の面に對ひ、凡そ四十五度位の角度で彈くのです、また

眼の着け工合

は樂器の前方、竪に一丈位を見る心地、まアこんな姿勢で私はやつてゐるのですが、それも常に外觀上閑雅であるか什うか、と云ふ點や、古の趣味ある姿勢なぞを考へ合せては始終改良を怠らない樣に努めています、姿勢の話はこの位にして

運手法は如何

であるかと云ふに、夫は兩手とも悉く指を揃へて、右手は掌に鷄卵一個這入る位の圓を持たせ、左手は親指を內に屈し、其他は同じ樣に揃へて指の附著部

を百二十度位の角度に曲げる、そして必要に應じて親指を延ばす様にさせる、又右手の母指は食指の左側の左へ出さないやうに心懸けさせ、なるべく指頭ばかりの力が柔く輕く彈かねばいけないのです、

兩手指の遣ひ分け

元來箏音は、右手によつてなる絃音と、左手によつて造らるゝ装飾音と、歌詞の肉聲とに基いて成立するもので、其等の關係は恰も右手が人間の骨格なら、肉聲は筋肉の如く、左手は衣服の如きもの、語を更へて云へば、右手が繪畫の線書なら、左手が色彩で、兩々相俟つて彈奏した處に眞に妙味が存してゐると云ふ様なとは初學者が心得べき事柄で、それに適宜の曲譜を授け實地に就て敎へ導いて行くのです

初步の樂典

初學者が稍單純な小曲を彈奏し得る様になつたなら、私は箏曲に對する初步の樂典、則ち文法の如きものを敎へる、それは古への諸大家の行つたものに自分の發明したのを併せ、西洋の理論なぞを考へて今様に解釋を下すのです、大体を云つたら右手法、左手法の使用別等を理論に對照して明らかに示したものを筆記せしめ、又更に説明をしてそれに習熟せしめるのです、其れと同時に箏曲の旋律法(柱の立て方)を矢張泰西の論義にかなつたのを授けて行く、

譜記法の利益

追々會得する様になつた上で、今度は譜記法と云ふのを敎へる、譜記法は在來の筑紫式、安永式、天保式、高松式、自分式、洋式等に區別を立てゝ示し、直ちに本人をして作譜せしめ、又は譜により宿題を課して自ら習得せしむる様にする、終には、手の運用なぞは樂譜に任せ、實技の稽古には寧ろ其以上の修正を嚴格に加へるので利益が却つて多い様に考へる、イヤ實際亦多いです、目今盲人間の稽古の仕方を見に、唯門人が師匠の前に座つて、手頭の働きばかりに浮身をやつす丈で、初學者が非凡な天才でない限り覺え込むには少なからぬ時間と、勞力を要するのです、故に此譜記法は拍子及び歌詞の曲節

を明らかに書き顯はしたに過ぎないのですが、單に本人が備忘と通信に供するばかりでなく名曲を後世に傳唱する上には最も善い方法と思つてゐます。

歌詞の講義

同時にやる肝腎なことはこれで、世間往々にして自分が敎へてゐる歌曲の詞意を了解出來ないと云ふ哀れなのを見受ける樣ですが、是とりもなほさず、傳授するものゝ不親切に基くので、私は玆に注意して一面歌詞の講義並に作歌の心得をやつてゐますが何派に限らず初學者は心懸け可きことでせう。

歌ひ方

聲の出し工合、及び抑揚、浮沈、强弱、音便、曲節等に注意を拂ふのは師たる人の任務であるが、自分は絃音を離れて歌はしたり、或は伴奏によつて獨唱せしめたり種々の方法によつて行ひつゝある一面年齢を男女の區別によつて色々旋律を考へ、聽く可き人の距離、多寡、室の廣狹などに就て他日師となるべき人々の平常心懸けに念を用ゐています、初學者に對する敎授法と云のは先ざつとこんな者です。

作曲のかず〳〵

私の作曲中の重なる者は高安月郊氏作 橘姫、靜、嚴島詣、薄田泣菫氏作笠置落、大原女、花賣女、思ひ出、蒲原有明氏作野路の曲、枳殼、島崎藤村氏作落梅、與謝野鐵幹氏作秋の夜、自作の領巾振山等四十九曲で、目下歌詞のない夜の曲を略仕揚げて新たに露と云ふ曲を作つて居ります。

禁煙夫人

山科禮藏

私の禁煙斷片の事が世に紹介せられましてから、餘程止めた人がある容子で、實業之日本社に大分禮狀が來て居ると云ふ事である、亦私に直接禁煙した次第を申し送られし人も可なりにあります、其内尤も面白い一佳話がありますから、是を御話して御依賴の責を塞ぐ事に致します。

岡山在の素封家に井阪氏と云ふ人がある、其人が送られし書面に、私共夫婦は喫煙者の狂なるものでありましたが、貴下の禁煙談を讀みまして、互に斷行することに致しました、然るに最初の程は非常に苦痛を覺えましたが、今日となりましては、年中醫者の手を離れざりし私が、体格も肥大になり、全く健全な人となりました、然るに妻の方は、一向に其効驗もなく、倍々衰弱する斗りで、實に不思議に思うて居りました、或日のこと、夕方に何氣なく臺所に行つて見ますと、火鉢の灰に紙卷煙草の喫い殼が二本ある、私の家には一人も煙草を喫むものがないにと思ひまして、下女に糺しますと、下女が眞赤な顏をして、慌てながら漸くに答へますに、それは先刻髮結が參りまして、喫つて歸りました、と云ひますから、左様かと云つて其儘に致しました、又或朝の事で、妻に用事がありまして、妻の部屋に突然這入て參りますと、煙が輪になつて鏡臺の所から立登つて居ります、何の煙かと問ひますと、妻は平氣で

只今小兒にお灸をすゑて遣りましたから、夫で線香の煙が出るのであると云ひます、その後妻は輕き風邪に冒されまして臥蓐りましたが、妻の寢て居る室は十疊で、其次の室か六疊で、其所には大きな姿見が掛けてあります、そのまた次の室が十疊で、私の居間としてある所であります、妻の寢て居る室を六疊の鏡の室との間の襖が一枚開いてある、其を私の居間から何氣なう見ますと、妻が寢て居ながら頻りに卷煙草を燻らして居るのが、丸で鏡に寫つて能く見えます、その時の私の驚きと云ふものは、迚も書き顯はし得ませぬ、イキナリ病間に飛込み、御前は煙草を喫むナ、ヨクモ今日迄欺いた、此調子では何を仕出かすか分らぬ、間男したも仝様であると怒鳴りました所が、妻は喫み掛けの卷煙草を掌の中に握り隱し、決して喫んだことなしと云ふから、これでもかと蒲團の中から手を引張り出して遣りました、其時の腹立まぎれに、心にもなく頭を輕く打擲て遣りました所が、妻は起生りまして、喫煙した位の事

で打擲せらるゝとは、如何にも慘酷である、最早服從する事は出來ませんから、御暇を頂きますと云ひますから、私は態と聲高く、宜しい承知した、今直に里に皈れと宣告しました、妻は此返答は内心餘程驚いた樣でありましたが、泣く〳〵病を冒して、着の身着の儘皈つて仕舞ました、丁度皈國してから三日目の夕方でありました、妻の兩親が來られて云はるゝには、離縁の事は承知しましたが、御前も一



人では隨分困るであらうからと思ふて、段々探索して禁煙の一婦人を連れて來たから、之を貰ひ、今夜我々の媒酌にて結婚しては如何であるかと云ふ、私も禁煙夫人と云ふ事を聞いて、早速快諾しまして花嫁を迎へて見ますと、離緣致しました妻と寸分違はぬ新婦人でありました、茲に禁煙家として圓滿なる新家庭を造りまして、夫婦は互に日々肥大なる体格となり、愉快に暮して居ると云ふ事を申して參りました。

實に禁煙と云ふ事は、婦人に取りまして大切の問題であると思ひます、他日大に御話して見たいと思ひます。

どうも喫煙する婦人は、生意氣な樣な感じが致しまして、特に日本婦人の如きは、天稟の優美を傷ける樣であると思ひます。

昆蟲の共同生活

理學博士　丘　淺次郎

昆蟲の智惠といふ事であるが、その智惠といふ事に就ては、或程度以上は之を智惠とするといふ說と、直ちに其は天性であるといふやうに說が岐れて居るので、なか〳〵容易に之を斷定することは出來ない、實に六ケしい學理上に渉ることであるから、チヨツト無造作に話すことは出來ないが、其に就て一ッ二ッ云つて見れば、昆蟲の中にも却々智惠のあるものがある、その名稱も多くは原語で、一々之を適當な日本語に譯するとが出來ぬ、而して夫等の昆蟲の多くは固より日本に棲んで居ない、それ故に之が名稱は畧くとして、その智惠の度合を云つて見れば、黄金蟲の或一類の如きは、餌を地中に蓄ふるに方りて、若も自己の餌を塡めんとする地上に石塊の如き邪魔物のある時は、三々五々同類のもの相集り、先づ其石塊の周圍を幾度か行つ戻りつして、その何れの方

面が低きやを見定め、乃て其低き部分の土を協同にて他所へ運び、稍その石塊を轉墜せしむる程の深さに達するを見斗ひ、轉じて共に高き部分に至り、與に力を協せて之を凹處に轉落せしめ、以て自己の意志を達するのである、また地中に棲む蜂の一種は、その地床を堅めると同時に、之を平らかに爲さんとする時は、地上に轉輾せる小石を口に銜へ、而して幾度か地床を拆きて目的を達するが如き、その行動は殆んど人類に似たる點がある。

以上は昆蟲の智慧の一班を述べたのであるが、幾多となく同類相集りて團体をなせる

蟻や蜂の類の生活

を見れば、實に我等人類が愧づべき程に、彼等の共同生活は圓滿で、相互の間に一點の不滿不平等がないので、億兆心を一にするとは、實に彼等の生活状態に適合した語句であると考へる、蜂や蟻は同じ子を育てると云つても、自分の子供を育てるのでは無い、即ち他人の子を育てるのである、彼は總て分業であつて、子を產むものは產むだけが役で、それに澤山な子供であるから、却々養ひたてが出來ない、そこで他のものは之を養うと云ふ務を爲るのであるそれのみならず、その子を育てるに就ても、單に餌を與へるといふばかりでは無く、若も床が濕るとか又は雨の降つた揚句とかには、一日の中で何時間位といふ風に、晴天の時を見斗つて日光に其子を曝すといふやうな工合に、それは〳〵朝から晩まで骨身を碎いて働くのであるが、それだからとて少しも働き顏を爲るのでも無ければ、翌日は草臥たと云つて休むといふ事も無い。

之を我等人間社會に比べて見たならば如何であらう、六ケしい事は暫らく措く、極手近な例で云へば日々に我等が手に接する所の新聞の廣告を見るに、何れも〳〵吾店の物より外に善い物は無い、ゆゑに吾店の物を買うに限る、他の店の物は劣つて居る、惡い物であると云はぬばかりに廣告をして居る、即ち同業相互に排擠して居ることは、その廣告の文面

に依つて明かなる事實で、之が克く人類社會といふよりは、寧ろ人心の機微を曝露して居るので、表面は四海同胞の、又は一視同仁のといふけれども、實際は心の中で嫉視反目して居ることは、右の一例でも證せらるゝので、誠に昆蟲にも慚づべき次第ではあるまいか。

人類が苟くも蜂や蟻の昆蟲社會の如く、相互に少しも欺くことなく、また僞ること無くして、何れの時、何れの場合に於ても、能く其協同の實を擧げ、億兆心を一にするの意に愜ふたならば、人類が互に反噬するといふやうな事は發るまいと思ふ、彼の蟻や蜂の社會を觀るに、種族を異にするものは格別として、同類の團体間に於ては、未だ曾て爭といふものを引起すといふ事は無い、去りながら一朝種族を異にする所の敵が襲ひ來るときは、各自身命を賭して之を防ぐのである、例へば、蜂の如きは其尻尖に謂ゆる針なるものがあつて、その針の搆造は、釣針のやうに彎曲しては居らないが、その尖端には矢張魚の釣針のやうに、逆に小さな針尖が附いて居つて敵に遇つて一度之を以て螫せば、動もすれば無難に完全に其針を脱き取り、たゞ毒汁のみを敵の体中に注ぐことがあるけれども、十中の九分九厘までは、一度其針を敵の体中に刺入るゝ時は、大抵彼の逆なる小針の爲に退行を妨げらるゝもので、爾うなると自己の身体は容易に敵の身邊を去ることが出來ない去りながら尙ほ味方の勝敗が氣に掛るので、自己の身体の傷くをも顧みず、力を極めて其針を曳く所から、遂に針は千切れて敵の体内に留まりて苦しましむるのであるが、その蜂自身も亦その爲に生命を失ふのである、而かも一身を鴻毛よりも輕んじて、同族の爲に盡す、即ち義勇公に奉ずるの好模範と稱すべきではあるまいか、我等人類間の戰爭には、砲彈刀槍のために傷を蒙れば、尙ほ外科的の施術法もあるのであるが、彼等昆蟲の社會には爾ういふ結構な事が無い、それにも拘はらず、敵に接して一度其針を刺入るれば己が生命は無いといふ事は知りつゝも

尙ほ且つ進んで敵を殪すといふは、眞に克く我等に義勇公に奉ずるの典型を示すものと云はねばなるまいと思ふ、一類の昆蟲が克く他の異類のものに對つて勝を制するのは、全くこの義勇公に奉ずるの精神に基くからであるとすれば、人類の社會に於ても亦斯の通りで無ければならぬ譯である。

然るに人類の社會になると、如何も爾う行かない、互に自ら相欺き相僞ることは前の廣告の一例に於けるが如くで、如何しても心から底から億兆心を一にする事が出來ないのみか、最早二人となか〱一緒に出來ないのが人類社會の狀態であるとは云ひながら、少しは昆蟲社會の前に面じても、各自幾分づゝは我慢を仕合はなければならぬではあるまいか。

古へより今日に至るまで聖人が我等の履むべき道として敎へられてある所の、種々なる訓誨の一班は、能く彼等昆蟲の社會に行はれて居る、例へば、仁の如き義の如きも、前陳のやうに億兆心を一にし、義勇公に奉ずるといふやうな風に實踐躬行して居るのを見ても知らるゝであらう、併し禮の一點のみは彼等の社會には無くて、特り人類の社會にのみ存して居るのであるが、それは何故であらうか、若し此禮なるものが無かつたならば、人類は相互に反噬し衝突して止まないのである、そこで夫を制せんが爲に聖人は、我等に敎ゆるに禮なるものを以てせられたに相違あるまいと思ふ。

少し話が動物界に涉るが、彼の蝟鼠なるものが、或冬寒を防がんが爲に、何十疋か一つ所に集合した、所が、知らるゝ如く互に餘り密接すると、身体の針で突つ衝き合うので痛い、爾うかと云つて餘り離れて居ては寒い、乃で互に幾分づゝか讓り合ひ、而して適當の距離を保つの程度に於て、集合して暖を取つたといふ譚があるが、これは大いに日本今日の人々が味はふべき價値ある咄で、決して一塲の笑柄として閑捨てにすべからざる好箇の訓誡である、我等も一人で山の中に棲んで居れば宜しいが、併し其は淋しくて、仙人に非ざる限りは出來ない相談で、如

何しても寄合つて棲んで居たい、寄合つて住む以上は相互に各自の自由の一分を犠牲に供し合なければ、迚も圓滿に生活して行くことの出來るものでは無い、小兒の天眞爛熳は實に無邪氣で良いものだが、大人の天眞爛熳などは少しく考へねばならぬ、動もすれば世の中には、往々この天眞爛熳を履違ひて居るものが少なからぬやうだが、それらの人々は彼の昆蟲や動物の生活に對しても、少しく鑒みるところが無くてはならぬではあるまいか。（文責在記者）

因に、蟻や蜂のやうな昆蟲類に螫された時は、その毒汁の成分が酸類であるから、之が應急の手當としてはアンモニヤ水を用うるか、それの無い時は何か植物の青葉を採んで其汁を附けても宜いとは博士の談である。

まさご路

佐々木信綱

白駒にしづ鞍おきて奈良少女、遊びし野邊の秋萩の花。

雲西に遠く流れて越の海の、荒海寒き三日月の影。

秋萩の花みだれちる宵の雨に、ぬれて山路を歸りますとや。

秋風は高ねを吹きて蕎麥の花、ほのかに白き谷あひの村。

玉鉾の道のやちまたわかるとも、われは迷はじたゞ君にこそ。

重荷おひゆきつかれたる旅人の、ゆくてに寒き夕づく日かな。

人しらぬ憂いだきて故郷の、落葉の村にひとり泣くわれ。

故郷をつひのやどりと歸りくれば、こゝはた寒う秋の風吹く。



小春

私の四兒と小說を書く時

國木田治子

國木田治子女史は文壇の一明星であつた故獨歩氏の令夫人で去る月萬朝報紙上へ「破產」の一篇をものせられた閨秀作家である、當時市内赤阪區田町に母堂眞佐子刀自と、四人の愛兒を抱へてゐられる。これは其談話である。

獨歩氏病養時代

突然で何をお話してよいやら……………主人が飛んだ事になりまして、以來途方に暮れましたが、風葉さん、花袋さんなど皆樣の御助力で漸く一家を支へ行く樣な次第でございます、それに當人は病氣中茅ヶ崎南湖院に居て、高田(耕安氏)さんの厚いお氣附に預りましたが天命ですから止むを得ない事で最も病氣の性質が性質ですし、よもや恁う急にとは思ひませんでした、當時妾は一人病院に詰めて、子供達は彼地の別莊を借て母と一所に居ましたのです。

兒供は遊びたい一方

主人は病氣の故か餘程神經が鋭敏になつてゐました、見舞にお出になつた方々が、少し容体を見て不安の素振を致しますとすぐ覺つて了ひ、色々と疊みかけて訊くのです、ですから病人の前では滅多な事は話されませんので、兒供達でも成るべく側へ寄せぬ樣に致しました、主人の亡くなつた當時は兒供達が妾にならつて、泣きましたが、今ではカラ夢中でもう遊びたい一方です、主人が此世にでも矢張生きてゐる樣な氣持なんでせう。

頭腦が組織的になる

長女の貞子が當年十歳で氷川學校の二年生、次の虎雄が八歳、次女のみどりが五歳、次は主人の沒後出產しました哲二で都合四人の忘れがたみを守り立てゝ行く責任もございますので却々骨が折れます、虎雄も一年生で毎日二人は學校へ參りますが、みどりは家で惡戲ばかりです、近頃は妾共の學校時代と違つて敎へて下さる課目の中には、粘土で形を造らせる樣な物まであつて、此間も貞子が達磨、虎雄が慈姑かなんか造へて來て、家中粘土で眞白に

して了ひますので、母は學校へ行つて先生に話して止めて貰ふなんて云ふのです、併し子供の頭腦を組織的に組み立てる上には餘程の効果があります。

兒供も油斷がならぬ

子供に間食は餘りさせませんが學校から歸つてくる時には此頃ならお芋なぞを遣る事に極めてゐますお煎餅の二三枚なんか、運動の盛んな子供ですから、何の補ひにもなりませんからね、子供の遊びは貞子は人形いぢり、幼いのは畫なんぞを書いて樂んでゐます、それに妙なもので妾の筆を持つ事を少しは分つてゐると見えて、先日も此近所に喧嘩があつたので、妾が門口へ出ますと、すぐ『阿母さんは喧嘩を見て小說に書くんだよ』と云ふのです、子供にでもうつかり出來ませんよ。

小說は兒供が寢て書く

モウ晝間は御覧の通りですから、筆は少しも持てません、長女は一昨年の十月から神田の佛英和女學校の寄宿舍へ入れて置きました、約一年ばかり妾の側を離れてゐました、家へ戻つた當座は佛蘭西の唄を覺えてゐて歌つてゐました位ですから少しは聞き分けますが、何しろ跡は幼いので、チツトも油斷が出來ません、それゆゑ原稿は大抵子供達が寢て了ふのを俟ち獨りソツと起て書きますので、ツイ夜更しを致します、書いてゐる間にも子供の寢息を考てゐますので氣が氣ではありません、殊に哲二が泣出しますと折角の感興を破壞て了ふとも度々なのです。

手近いものをモデル

先月も徹夜をして十數枚書きました、妾は他樣と違つて、原稿は必ず一度書き直しますので急には出來ません、『破產』は三十八回で、アレハ去年九月頃の作です、よく覺えてゐませんが慥か八日位かゝりましたと思ひます、此頃は母と妹が萬事手傳つてくれますので家事の方は非常に助ります、妾の小說を書きましたは七年跡に鎌倉で『貞ちやん』と云ふのがあります、長女の事で、當時金港堂の婦人界(？)に載せたと覺えてゐます、其後ちよく／＼短いもの

を書きましたが、去年中央公論に『當世』を出しました、長いものは『破産』位で、どうも手近いものをモデルに取らねと困る様な場合もありますので弱つています。

萬朝報の懸賞小說

妾の原稿を主人に見せて訂正を頼みますと、『俺は厭だ』と云つて滅多に直してくれません、『お前がソンナに書きたければは花袋君の弟子にでもなれ』と云ふのです、妾も一層お頼みしやうかとも思ひましたが、ツイ其儘でした、それでも鎌倉にゐる時分、萬朝報の懸賞小說を徒ら半分書きましたら『俺に見せろ』と云つて、處々朱を入れて呉れました、主人も藤村さん其他二三氏の作品は自身で讀みもしましたが、外は大凡妾が見て筋だけ話したのです。

閨秀作家は同窓生

幼ない時から小說などが好きで、五歲の頃草双紙の八文字屋物をよく祖父から聴かされて喜んでゐました、二葉亭さんの作なんか都の花でよく拜見いたしましたものです、それに妙なもので妾の小學時代は富士見學校ですが、岡田八千代さんも、大塚楠緒子さんも、三木竹二さんの未亡人眞如女史さんも、皆仝校出身者です、富士見學校は文藝に緣の深い處だといつも妹と話して居ります。

料理と廢物

赤堀菊子

廢物と殘物

廢物利用の料理法でございますか、左樣ですね、どうも私共には廢物と名をつけます樣な廢物を出した覺えがございませんので、さてこれ〳〵の料理法があるとは申せません、しかしまあ偶まには已むを得ない廢物が出ます事がございますもので、今日もある所へお稽古に參りまして「ちらし壽し」を致しましたのでございますが、そのお終ひに、玉子の白味

と、二番出汁とが殘つたのでございますが、どうもこれらは巳むを得ない廢物なんで、實は捨てゝもいゝ樣なものでございますけれども、何か出來ないかと、一寸考へまして、丁渡用ひた平目の骨が三つございましたから、その骨の傍について居ります肉、殘つてあるともいへない程のものをこそげとりまして、その白味に交せ、すたつた伊勢海老の頭をせゝりまして、少しづゝの肉をとり、これをまた白味に加へまして、一寸鹽を加へ、布巾で包んで蒸しました、何でもない樣なものですが、一寸伊勢海老の紅がちら／＼として美しいものが出來ましたので、その二番の出汁にいれてお汁の實に致しまして、お露を造つたのでございます、その出汁殼も、一寸砂糖とお醤油で煮立てゝおきましたので、もーあとには何も捨てゝをしいといふ樣なものはなくなりましたが、廢物と申せばそんな類のもので、何かちやんと用ひ途があれば、それはもう廢物ぢやないんでございます、それは殘物なんでございます、ですから廢物といつても、何と／＼とか出ると申すことが出來ませんから、その料理法はこれ／＼だなどゝは無論申し上かねます、廢物の料理こそはもうその人々の經驗にある事でございます、所がもうこの節は廢物の料理法はないか／＼といふ事を始終皆樣から伺ひます事でございますが、どうも皆樣の仰有る廢物は廢物ぢやなくつてそれは殘物を仰有るのぢやないかと思ひますのでございます、馬齢薯が二つ出た、人參が一つ、肉が一切なんていふのは廢物ぢやございません、殘物です、殘物といふものは巳むを得ますもので、慥かにだすまいと思へば出ないものにちがひありません。

積り法

もう料理は何が上手だと申しましても、あらに殘物を殘す程手際のわるい事はありません、これ丈のお魚には何が幾何要る、野菜はどれ程、何はどれと、ちやんと分量の極つたものでございまして、これが一寸多くてもそれ丈味が惡くなります、着物一枚裁

つからとて、分厘のやかましい積りかたがあるのでございます、これと同樣お料理にも積りかたが第一番に大事なんで、積りかたを疎かにして、殘り物が出來たり、足りないものが出來たり、致します樣では、一向どうも不經濟な話で、食物がよいから贅澤だなどゝ皆樣が仰有いますが、それより積りもなしに無暗な買方をなすつて、あらにゴロ／＼殘ります方が餘程不經濟なんでございます、一体料理の秘訣は分量にありますので、いかに甘いのがすきでも、まづ栗を煮ますには砂糖は一升について五十匁より多くても、少くてもいけません、けふもそのちらしずしの所で厭味を並べて來たのですが、私は二十人前のつもりですべての材料をちやんと用意して持つて參つたのでございますが、ちやんとお料理が出來上りまして、私へといふて下さいました、試みのお皿が面白いぢやございませんか、殆ど十人分位のお肴がコテ／＼と並べて、奇麗に／＼並べてあるぢやございませんか、私は大變惜らしい云分ですが、こ

のお試みは折角のお骨折りですが、只拜見いたしますにとゞめておきましやうねと申しました、と申しますのは、それその分量が一向不平均だからで、二十人前に分つ筈のお肴を、半分を一人におつけ下さつたのですから、皆樣のお考へでは屹度澤山つけて上げさへすれば甘がつて下さるだらふといふ思召しがあつたかもしれませんが、一人前は一人前とちやんと分量は極まつたものですから、多くても少くとも屹度味ないに極まつてをります、こゝを私は始終申し上ますので、料理は分量が極つて始めて食べられますのでございます。

何でも詰加減

少しのものは何ですが、大勢のお客などの時は、なる丈、分量は詰め加減にしておいた方がよろしうございます、大抵三十人位のお客ならば二十五人前位用意すれば澤山です、きつしり三十人前手當いたしますと屹度その殘物が出ます樣です、詰め加減にしておく方が得な樣でございます。

經濟で美味なのは、その分量をきつしりする事です、料理法はもうだん〱と、馴れさへすれば氣易く出來る樣になるものですから、どうか廢物利用の前に廢物でも殘物でも、出ない樣一つお稽古をなすつた方がよいと存じます、經濟にもなり甘くもなり、どれ丈得策かしれません・成るべく殘物の出でないやうにしたいのであります。



吾實家の下女使ひ方

法學士夫人　木下須磨子

私はやつと學校生活を脱して一家の主婦と云ふ大責任を負ふたばかりですし小人數のことですゆゑ別に下女を使用すると云ふ迄には參りません、學校にゐた時分から常に女子の缺點である虚

衆を捨てゝ、實際的に家庭を整理なさいとの教師の誨へが耳底に深く刻み附られ、亦自分も家庭の人となつた曉にはア、もしたい、かうもやつて見たいと云ふ考へを持つてゐましたが、いざ夫れならと云ふ段になると兎角理想とは一致し難いもので心の若かつた時代の事を種々に覺るのです。

使ひ方の下手な場合

私の家は關西で父は官吏ですが、却々家族も多くございますので下女は使つて居ります、此下女を使用すると云ふ事は何でもない樣ですけれど、非常に骨が折れるもので、同じ使はれる身にしても、唯譯もなく牛馬の樣に働かされて、何の慰籍もなく、箸の上げ下しにまで叱り通され、影日向になつてゐる程つらい事はありませんでせう、隨つて主人との折合は惡く、自分も不愉快で日を送りますゆゑ、長い月日の中には自然主家の秘密は井戸側會議に持出されたり、器具や三度の物にまで、粗末になりますから、一家の波瀾を引起さない迄も、一割も二割も損です。

使ひ方の上手な場合

それを上手に使ひ廻して行くと、下女は喜んで働きますし臺所に洗ひ流した米の一粒でも、主人の爲を思うて拾ふ樣になりますから、一家の經濟の上から見ると非常の得になります、其でこの弊害を未然に防ぐ一策として、私の實家では次のやうな方法を設けて、多年實行して居りますが家庭も至極圓滿で下女の出代りと云ふ事がなく、本人が未婚者なら一家を組織する迄は使つて貰ひたいと云ふ形で、大變萬事にかけて利益になります。

屑物代は下女の得

何も構はぬ家では下女までが紙屑糸屑等は一固めに圓め込で隅の方へ投やつたり、往還や庭先へ殊更に掃き出して平氣でゐますが、這麽事は自然主家の物を粗末にすると云ふ念を増す計りでなく、衛生上並に外觀上の不体裁ともなりますので、私の家では一々嚴重に拾ひ集させて紙屑籠に入させる、そして

一杯になつた時屑屋にやつて代金は下女の所得とするのです、一擧兩得ではありませんか。

主人の物を大事にする

ビールなどの空瓶もその通りで、拂下げた代金を下女の利に收めさせますので、要は物を大切に保存すると云ふ事になり、其結果一皿一枚の上にまで及ぼして、滅多に破損すると云ふ事がなくなる。

下女の不注意は自分持

洋燈のホヤは常用一個に就き、一ケ月平均一本と定めて置く、最も寒氣や、其他避く可からざる災害で破る場合は仕方がありませんが、下女自身の不注意から破損した場合は一本以上下女の損とし、若し一本にて一ケ月を無事に保存し得たら、其代金四錢なり三錢なりを下女に與へるのです、ツマリ洋燈のホヤの様な破損し易いもの丶取扱ひを丁寧にせさる一策です。

髮結賃は如何する

髮結賃の如きは月々の給金の中に組み込む方もありますが、是は矢張別にやることに極めて置く方がよいと思ひます、夏向などは別して婦人の髮が臭ひますし、半崩れなども餘り体裁がよくありませんし、それに本人の持とすると、なるべく髮結賃を節約せんとする結果、勢ひ汚なくなる事もありますから、いゝゝめんどうでも毎月五回六回なりに極めて置いて、其代金を手渡しする、それで本人が寢行儀が惡く髷の持が豫定の日限と代金を保たない時は本人自身の損とする、萬一無事に過ごすことが出來たら本人の得となる譯です、

奥樣と下女の髮

何處の家ででもあることですが、奥樣が當世流行のハイカラ髷で、下女も同樣手輕から思ひ附きのハイカラは什うかすると初對面の來客が誤つて下女と主婦とを見違へて挨拶する事がある、ですから私の家では、母が『丸髷』なら下女が『銀杏返し』と云ふ風に極めて置くので、奥樣も『銀杏返し』下女も『銀杏返し』と云ふ樣な區別のないやり方を避けて居り

ます。

風呂賃は惜まぬ

其他風呂賃も髮結賃と同じく主家の自辨とする方が衞生上から考へた得策で、風呂賃だけは惜しまず本人に渡して夏向なら毎日でも、經濟上許す限り這入らせた方が宜しいです、此方法は二ッとも下女使用上有利のことゝ考へます。

洗濯と裁縫の日

それから家々によつて違ひますが、下女自身の衣服の裁縫、洗濯は日中の暇々を見てやらせるのもよろしいです、がなるべく土曜日洗濯、日曜日裁縫と云ふ樣なことに略極めて置いて、當日は家事の用向は出來得る丈控へてやり、餘分の用事は翌日に廻すと云ふことにしたら、どうかとも思ひます、最も實家などは土曜日は午後から來客が多く〱、日曜も可成賑ひますから下女に取つては安息日と云ふより寧ろ平常より忙しい位ですが、マア出來る丈恁うやつて居ります、そして使用中は殘酷に涉る樣にことを避け、努めて自由を與へる樣にと心懸けて居ります。

休め〱使ふ

假令へば一ッ用事を命じて本人が行ひつゝある際には、其仕事の終るのを待つて跡の用事を命ずるとも、それか濟んだら是、是が濟んだら其れと云ふ樣に立續けにやると自然本人も疲勞が加はつて、何事も粗末になり易いですから、然る可き時に然る可き休養を與へる必要があると信じてゐます。(文責記者)

玉川の水

醫學博士　三浦守治

我業を尙し磨かむ玉川の
　水のなかれの息むことなく
雲ならで通はじと思ふ足曳の
　山の高根のにはとりの聲
まこと此胸たちわりて見すべくば
　見せばやと思ふ我こゝろかな

女の力

加藤咄堂

このお話をするに先だちて、力といふもの〻見やうに二つの方面があるといふ事を記臆して居て貰ひたい、即ち

精神の力と身体の力

とである、そこで先づ身体の力に就て、女子と男子とを比べて見ると、中には例外もあるけれども、女子の身体の目方は平均十二貫八百目で、男子も角力取などは別物として、之は平均の体量が十四貫五百匁であると云ふことが調べられてある、して見れば女子の体量は男子よりも、平均一貫七百匁少ないのであるから、殘念ながら此點に於て、女子は男子に打勝つことは出來ない、

また身の長は如何かといふに、之は男子が平均五尺二寸、女子は概して四尺八寸といふ事が統計の上で調べられてあるので、差引女子は四寸低いのであつて見れば、これまた口惜しながらも男子に優ることは出來ないのである。

去れば筋肉の點に於ては如何であるかと云ふに、男子の筋肉は總て引締つて居るが、之に反して、女子の筋肉は大率滑かで、そして弱々しい、として見れば、此點に於ても亦女子は男子に一歩を讓らなければならぬ。

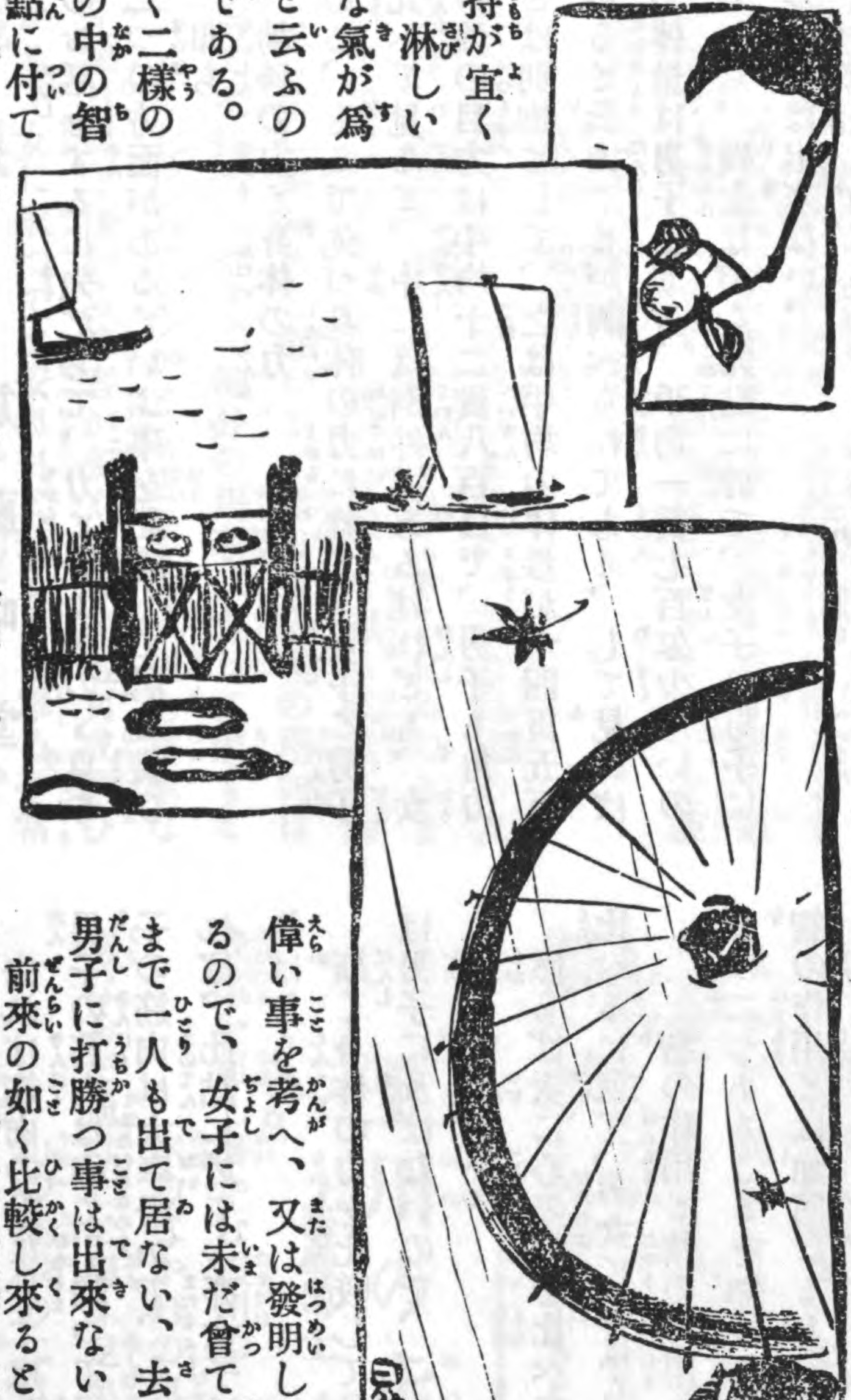
斯く身体の力を比較して見ると、何れも是も女子は男子に及ばないので、これ以て生れ付きであるから致し方が無い。

然らば次に心の力を比べて見やう、この心の力を比べるに就て、男女に關はらず、凡てその作用には、

智の作用と情の作用

との二つあることを知つて居らねばならぬ、そこで智の作用とは如何なるものかと云ふに、之は白いとか又は黒いとか見分けをする作用で、この作用は同じ精神の力の中でも智恵の部分に屬するのであつて惜いとか慾しいとか、又は憎いとか可愛とか云ふの

は情の力の部分に入るのである、喩へば、學問の力で幽靈といふものは無いものであると、見極めの附いたのは智惠であるが、何うも何所其所の墓場の側を夜中に通ると、何だか心持が宜くない、淋しいやうな氣が爲る、と云ふのは情である。斯く二樣の作用の中の智力の點に付て男女は果して如何であるかと云ふに、女子は何うも物の大體を摑むといふ事は不得手であるが、小さい



事には能く氣が附く、之に反して、男子は誠に小さな事には無頓着である代り、物の大體の主眼を見て取ると云ふ事は優つて居るのである、それゆゑに昔から、世界中を尋ねても、中以下の學者には女子も少なくないが、カント、プラトン、孔子、釋迦、基督といふやうな、宇宙の大原理、人生の道理といふやうな偉い事を考へ、又は發明した者は、孰れも男子に限るので、女子には未だ曾て其樣いふ豪い人物は今日まで一人も出て居ない、去れば此點に於ても女子は男子に打勝つ事は出來ないのである。前來の如く比較し來ると、惡く云ひたくは無いが、如何しても女子は男子に對して拮抗することは出來ないのであるが。

特り情の力に至りては男子は迚も女子に及ばない、世の中は多く智で動くが、或は情で動くかと云へば、それは情で動く方が多いのである、その情に於て男子は如何しても女子に降参せざるを得ない、而して此情といふ中にも、チョット前に述べたやうに澤山あるが、

その情中の美なるものは同情である、同情とは平たく云へば、オモヒヤリ、之を一層通俗に云へば、吾身を爪捻ッて人の痛サを知るといふ事である、或人は、女は實に斯世の中の花であると云つたが、それは此同情の念の深い所を讃美したに外ならない、昔から道徳の宗教の倫理のと八ケ間敷く云ふけれども、その根本は此同情に在るので、即ち基督は之を愛といひ、孔子は之を恕といひ、釋迦は之を大慈悲と云つたが、約する所は同情、このオモヒヤリに外ならぬのである、云ふまでも無く、此同情さへあれば、決して一家の内に波風の立つと云ふことも無く、友達同志は勿論、他人とでも喧嘩口論の起るといふ事も無い、啻に一家や一國の裡のみでは無い、世界十五億の人々の間にも決して爭論等の起るべき筈のものでは無い。

これはマア人間だけだが、一つ之を擴めて禽獸の類にまで之を及ぼさねばならぬ、それが即ち人の人たる道であると同時に、人が萬物の靈長たる價値も備はるといふものである、鬼貫の句でありましたが、

行水の捨所なし虫の聲

といふのがありますが、最早自分は行水を了へたれば、何所か其邊の草原へ其を捨てやうと思ふが、それでは餘念なく愉快に草原の中で鳴いて居る虫共を驚かすは勿論、場合に依りては彼等の生命をも損傷する事であらうと思ふと、如何しても其行水の捨所が無い、と云ふ其眞心の底に同情の念の深い事は言外に溢れて居ることが察せられる、また名高い加賀の千代の句に

朝顔に釣瓶取られて貰ひ水

といふのがあるが、ホンの一晩の中に朝顔の蔓が延

びて、それが釣瓶の竿に絡まり附いて居るのを見ては、如何にも其を無情に取り離すことが出來ないと云ふので、どう〳〵隣りで貰ひ水をしたといふ、斯く同情が鳥や獸ばかりでは無くして、野に生ふ草、巖に生ふ一本の松までも同情を注がねば不可と云ふものである。

以上は一般の同情といふ事に就て述べ來つたものであるが、更に之を吾等の手近に切込んで見ると、

　去られても闇に見にゆく幟かな

といふ句がある、此所が女子に於て同情の念の充ち滿ちて居る頂點を露はして居る、何故なれば、一たび去られたる妻であつて見れば、晝間はその近所の人に顏を見らるゝも辛し、且つは表向晴て行つて見ることは出來ない、が、併し彼の後に遺して來た小兒は、繼母の手に掛つて如何に過しつゝあるであらう、若や疾病ひでもしては居るまいか、それとも達者で何事もなく、この五月には幟を建てゝ初節句を祝つて居らうか、それにしても幟は幾本建つたであらうかと、最早別段その家には用も無いにも拘はらず、わざ〳〵夜の闇に紛れて其を見に行く、斯様な同情は男子では容易に見るとは出來ないが、女子には斯くまで深厚なる同情を有つて居る、去れば或人は、

　女は弱し、されど母は強し

と云はれたが、實に克く女子の美質を發揮した言である、女子といふものは前來述べたやうに、体力や智力といふやうな點に於ては、到底女子は男子の敵で無い、實に女子は弱きものである、併し母としての女子は、闇に紛れてまでも幟を見に行くと云ふ程の勇氣があるのである。

斯くまで母としての女子は強いのであるから、何とか之を善い方に用ゐて貰ひたいのであるが、古來歷史を見ると、兎角表面世の中には出ないけれども、奥に居てチョイ〳〵惡いことを男子に勸めた例は、歷史を繙いて見れば直ぐ判かるが、それは昔の事として、今より後の女子は家庭的は云ふに及ばず、何うか社會的にも亦働いて貰はなければならないので

あるが、茲に一つ困つた事には、男子と女子とを比べて見ると、如何しても女子の方は表面を飾ることが好きでならぬ、例へば、百圓の月給取りの奥様が縮緬の羽織を被て、そして金の指輪を箝めて居らるゝからと云つて、二十圓の月給取りの奥様までが其を眞似しやうとする、否、眞似を爲しつゝある實例は決して少なく無いのであるが、それは何が爲かと云ふに、畢竟虚榮心に驅らるゝに過ぎないのであるが、それが爲に非常に家庭の經濟に影響を及ぼすことは豫想外である、男子の勞力を犧牲に供する事が決して少ないとは云へぬ、元祿時代の園女が、

衣更みづから織らぬ罪深し

といふ句がある、女子たる者は素より自ら織りて着るべきが當然であるに、自分は斯く安逸にして居つて、そして他人の織つた物を被ると思へば、如何にも冥加を知らないやうで、その罪の程が恐ろしいと深く心の裡で世間の衣服を織る人々の勞を思ひ遣つて居ることを言ひ顯はしたものであるが、人としては斯うなくてはならぬ、昔から奢る平家は久しからずとやら、彼の如くに亡びたが、北條氏の如きは能く九代を持續けたといふものは、代々の者は泰時の遺訓なる、アルベキヤウ、今の詞にすれば、ラシクせよと云はれた事を守つたからである、また德川氏が十五代も續いたのも、代々の人達が能く家康の遺訓、身の程を知れといふ事を遵奉し來つたからである、即ち奥樣は奥樣らしく、娘は娘らしく、百圓の月給取りは百圓、二十圓の月給取りは二十圓と、各その身の程を知りさへすれば決して過ちは無いのであるが、兎角人といふ中にも殊に女子といふものは上を見たがるものだが、之に就て蔡中郎といふ人の云つた事がある、女子たる者は毎朝鏡臺に向つてお化粧をする、そのお化粧をする時に、衣服の襟に垢の附いたのは能く氣が附いて、時々濯ぎ洗濯もするけれども、兎角心の垢を落すに氣が附かないで困るそれでは幾らお化粧をしても、喩へば、錦の袋の中に名も無き石塊を裹んだやうなものであつて、少し

も人たる價値が無い、木偶も同じである、依つて眞の女子たらんとする者は、毎朝鏡に向つてお化粧をすると共に、衣服の垢を取去るやうに、一々心の垢をも取去ることを努めて忘れないやうにしなければならぬと云はれたが、何うか世の女子たる方々は、是非この心掛けを持つて居て貰ひたい、而して益々同情の念を發揮せられん事を希望するのである。

わが袖

大塚楠緒子

雨の日の物靜けさ、小切ひき散らし幼兒に縫ひて與へしお手玉くゝり猿も早いくつか、脱ぎ捨てゆきし人のほころびも繕ろひはてゝ、針山の針も數へあきしつれ〴〵書讀むには頭重し、まろうども來まさずいでやと箪笥の中とりかたづけて見る、數もあらぬかつは古びたる小袖ながら、女の生涯に又なく秘藏せらるゝは是れなるを、我身に添ひてなつかしき過

去を語るも又これなりと、さながら古き日記くりひろぐる樣なる心地して、かさなりたるを一つ〳〵取り出だせば、さま〴〵の思ひ出多き袖こそ出で來れこの袖には花摘み溜めし、この袖には露を散らしゝ琴彈きし袖、歌よみし袖、繪を書きしも、ふみ見しも。

いとも望を多くかけつるは矢がすりの此袖よ、この袖めでにし頃は、春の野に舞ひ舞ふ胡蝶のあるかなきかの身をも思はず、黄金なす大空の夕雲を慕ひて高き理想に驕るが如き樣にや似たりし、藤色の蔦の袖、こを肌に添へては知る人の家の歌がるたに霜寒き夜をいかに興じ深しけん、その程は此袖にげに夢はも乘せし、思はもつゝみし、今は無下に褪めはてつる色のあまりに懐しくもあらずなりにしことよ。

櫻鼠のひとへの袖、これにこそ我深き思しみて今も猶ほ忘られぬものゝ一つなれ、運命の手にもてあそばれしその頃、か弱き身の苦しく煩はしくうたてくて、幾夜を寢ねがてに明かしけん、礒うつ浪に濡れ

そぼちたる二つの袖うれひある胸に抱きて、晝のやうなりし彼の松原、鷗の羽根のやうなりし彼の白帆、ながめやり眺めつくしゝその夕、みだれつる我思はさはれさすがに若く輝きたるものなりつるを、あゝそれ將た幻より果敢なく月日と共に、かなたへ葬り去られ、我春はとこしへに逝きしかな

牡丹に鳳凰の友禪の袖、山城大和めづらしき旅路にさすらひしはこれ。祇園淸水眞如堂、御室の花も見て來しものを、移り香は今や何處。牡丹の花びらいづれ鳳凰の翅破れゆくこそ口惜しけれ。浪に千鳥の袖、これ見れば別れつる船の上のさまこそ思ひ出さるれ。小さき船に歸りぢの忘れ物したるやうに本意なかりし時、此袖いかに潮風にやもまれし。

思へば過ぎし世のかの時かの折かの君かの友、見しこと聽きしこと思ひしこと行なひしこと、變り變る人の樣世の樣わが身の樣をも知るは我袖、詫びし袖戀ひし袖、嬉しかりしも悲しかりしも、袖にとひ袖に答ふる思ひ出の多きことよ。古びしもうべなるよ、時の力に朽ちにたる。塵にさはりて汚れたる、さざま斯う樣に古びたることよ。さては誰れにも秘めし、とある折の涙、人知れず袖にのみかけたりし、さればや色の變りたるもありなむ。

猶もひき出しの底に紙のやうに押しひしがれたるがあり、何なりけんと掻いひろぐれば、水色の絽の振袖鴛鴦を浮べて蘆の葉に雪をあしらひたる、さても華美やかなるわが十七の物好みなりしよと、思へば踈てくも古りにし身にあまりに似つかはしくもなくなりにけるが悲しく、そゞろ心に糸引拔き引きほごけば、緋の襟うらこぼれかゝり、縫目より鴛鴦のつがひのわかれしにひき別けらるゝ、我振袖のをはりこそあはれなりけれ、あゝわが春は去りけり夏は逝きけり。斯くても猶思ひ思ひ思ひ盡きせぬは、かの時かの折かの人かの君。



裁縫の話

裁縫高等學院長　小出新次郎

前號までの所で、小裁中の小裁物ともいふべき一ツ身や三ツ身の事は大畧話し了りましたからして、今度は四ツ身本裁といふ順序に行くべきでありますけれども、それは後廻しにすると致して、今回は其一ツ身や三ツ身等に附屬する事をお話して皆様の御參考に供する事と致しませう。

同じ小裁服に關する附屬具としても、儀式服と平常服と、それから普通他所行服とは、自から異なる所があるので、例へば、脊守を一つ飾り附けると云ふ事に就ても、平常服や普通他所行服としては、桃とか柿とか、或は奴の類とか云ふ風に、押繪や摘細工やうのものを取附けて、そして脊守飾りとするのであるが、儀式服となると、其樣いふ一寸思附といふやうな洒落を爲るやうには行かない、それには自から一定の極めがある、それは獨り脊守ばかりでは無い附紐の附方、および附紐飾りの如きに至るまで皆同一精神なるものである。

去れば其方法は如何なるものであるかと云ふに、假りに一ツ身として、產着の脊守としては、五色の糸で皆樣が知れる通り、縫飾りするのであるが、その方法が、男の子のものは左へ縫下げべきものであつて、女の子のものは其反對で、乃ち右の方へ縫下げるのである。

また附紐の附方の如きは、三ツ身裁として祝服に用うる服裝の如きは、男の子のものは紐の絎目を下に向け、女子はその反對で、上に向けると云ふやうに、昔から一定の定めになつて居る、併しそれは如何いふ意味から出たものであるかと云ふに、凡そ社會の事物といふものは、一切陰陽合体の作用に成れるといふ事を標榜して、自然儀式服の如きは斯る一定の定めを爲したものである、縱ひ之は其樣で無いにしても、最早これまで永い間の習慣となつて居る

から、それを誤つて頓珍漢な仕方を爲された時には、大に人の笑を招く本であらうかと考へるので、婆心ながら一寸記して參考に供へるのである。

儀式服としては、前述の如く極めて窮屈なる範圍内で飾りをして出なければならぬのであるが、前にも掲げたる通り、平常服や常の他所行服となつては、脊守や附紐飾りの如きは心任せであるか、唯此所に最も注意を要するのは、例へば、脊守にせよ、又は附紐の如きにしても、衣服の地合と飾りにすべき脊守、又は附紐材料の色合とが、餘り飛離れては突飛であるのみか、何となく野卑に見えるものである、去迚また餘り色合が似過ぎても、子供の物として、質素過ぎるといふ觀がある、こゝへらが謂ゆる美學の方から云ふ、色彩の配合配置といふものである、この色彩の配合配置の工合が好く行かないと、折角の苦心が人の物嗤となつて、そして水泡に皈して仕舞ふものであるからして、この點は能く注意に注意をせられたきものである。



それから之は飾りといふものとは自ら異るけれども、兎に角縁の近い事であるから、茲に附加へてお話をして置かう、それは外でも無い、

即ち小裁物の肩揚

の事であるが、この肩揚といふものが、餘り袖附の方へ寄過ぎると、何うも肩から滑り落ちさうで、甚だ見苦しいものである、去迚また餘り襟の方へ寄過ぎると、如何にも窮屈なやうな感じを起すものである、是非とも之はその中間に居らねばならぬものであるが、然らばそれは如何なる方法にしたならば、肩揚の大層多い時でも、又は少ない時でも、それを一定の位置を守らしむる事が出來るかと云ふに、それは左程六ケ敷い事は無いので、畢竟、肩巾を二分して、そして其を定めの行に約め得らるゝまで折込みて、それを摘み縫ひすれば、如何ほど肩揚が深い時でも又は淺い時でも、必らず一定の位置を守り得らるゝのである。

一体斯ういふ方法は御存じなくとも、既に己に澤山の小兒衆を持たれた細君や奥様方は、實地經驗の上から却々巧みな遣方を爲さるのも往々御見受けするが、未だ世の中に經驗の乏しい所の若い細君方が、初めてお子さん持つて着せられたる服裝などになると、隨分滑稽な遣方を爲されたものを御見掛けする事があるから、これから良妻となり賢母とならるゝ本誌購讀の諸孃の爲に、特に此言を終りに附加へて置く次第である。

輕便日用料理

中島鎮子

サテ今回とても、別に目新らしい調理法といふのでは御座いませんが、併し時季の品を少し取揃へましたのと、それに聊か風異りの調理を致します所が御景物かと存じます、そこで最初は會席に擬したる献立でありまして、

◎霜月料理

といふ、月並に因んだもので、椀の物には

△初霜　と申しまして、之は魚の肉にても又は蒲鉾でも宜しいのでありますが、もし蒲鉾なれば細く短冊に斷つのであります、而して魚肉なり蒲鉾なりを鍋の中へ程よく並べ置き、卵の黄身を去りたる白身だけを其上にかけて、半熟以上に煮あげたるものを更に別鍋に旨き煮汁を煮立てたる中に放ち、忽ちにして椀の中へ取りて出すのであります。

　次に向附の深皿盛には如何なる物を撰ぶべきかと云ふに、それは

△初時雨　といふので、之は魚の肉の赤き色あるものゝ類、例へば、生鮭の肉の如きものが良い、これを薄く切る、その心持は、木の葉が紅葉して、それが落葉したるものに擬するのであります、そこで之を程好き味に煮揚げたるものを深皿の中へ盛り置き更に前に初霜を拵へる時に取除き置きたる卵の黄身を、鍋にて良く蒸し、之を裏漉にかけて細かく朧の如くになしたるものを、その上に掛けて出來上りとなすのであります。

　次に猪口には如何なる物を用ゐ、如何なる名稱が附せらるゝやと云ふに

△枯野草　といふ名前で、その調理法は、初め糸蒟蒻を目笊の上にバラリと並べ、少しく日に乾かしたる後、一寸五分ばかりの長さに切りたるものを薄鍋に入れ、之に醬油と水とか加減し、砂糖は極めて多量に投れ、而して照の打つまで能く攪拌せて煮上げたるものを、猪口の中へ取りて附るのであります。

　これは以上のものとは違つて、單に時季の椀物としての調理法でありますが、それは

△生鮭　の肉を程よく皮附のまゝ切りたるものに、

△柚子の輪　これは柚子を輪切りになし、中の身を去り、青味に適宜の菜の類を入れ、そして之を薄煮汁にて煮あげて食するものにて、頗る風味の宜敷きものであります。

◎菊花の料理

△餡かけ　最初魚の肉を程よく切り、又はハンペン

にても能き加減に薄煮汁にて煮あげ、餡は普通のものを煮る通りにて、煮たてます際に料理の菊の花を散して中に入れ、餡に煮上げたるものを、その上にかけて出すのであります。

△菊花の卵燒　普通の卵燒を拵へる通りに、卵の煎りたるものを能く攪きまぜ、少し味を加減したる中へ料理菊を散し、よくかきまぜたるものを、卵燒器にて燒あげ、程よく切りて出すのであります。

△菊花鮨　普通の海苔卷を拵へるやうに、其中へ干瓢の味よく煮たるものと、それに菊花のザット煮上げたるものとを一纒めとなし、そして海苔卷の如く卷き、程よき長さに切りて出すのであります。

△菊花揚　之は普通の精進揚を作る樣に、料理菊の散したる者を揚る者にして、敢て別段に菊花のみを改めて揚ると云には非ずして、精進揚をする際に、揚て食すれば可なり風味のよきものであります。

因に前號の紙上に初宇のうま煮させしは八ツ頭のうま煮の誤なれば、チヨツと兹にお斷りまで。

薙刀術より得たる教訓

武甲舘主　小松崎　古登子

薙刀の使ひ方も昔は實際的で、斬る、突くと云ふのが重で、敵味方肉薄して切り結ぶと云ふ戰爭のない今日では何等の効果がない樣に思つてゐられる人も多いですが、單に薙刀を水車のやうに振廻したとて、鎖鎌の分銅を遣ひ分けたばかりでは何の役にも立たないのです、私が師範の要義を云へば武術は從にして、先づ精神修養と體力整等を主とするのです如何に武術に達したとて肝腎の精神が不堅固で體力が脆弱であつたら何の甲斐も無いのでは有ませんか。

仕上るまで八九年

如何にせば所期の目的を達するか、私の授ける武術の形は都合七十六本受方を合せて百五十二本になります、表が三十六本で内太刀合五本、薙刀合十一本鎗合五本、鎖鎌合五本、鍵付薙刀太刀合五本、同鎗合五本、裏は三十本で内棒合十本、同太刀合五本

拔打太刀合五本、薙刀合五本、鎖鎌太刀合五本、奥が十本で內小太刀太刀合居合五本、同立合五本で以上悉皆修業したものに心得書、口傳等を卷物にせしものに許狀を添て本人に遣る事になつてゐます、先づ此處まで仕事るには八九年懸ると見れば宜しい。

下腹の力

右の內で鏈附の薙刀と云ふのは一刀流の鼻祖戶田淸眼が戰場に於て始めて試みた結果、掌中の秘事としたる方法にして、通常薙刀の乃下に橫一文字を加へたもので、敵の兜などに引掛けて倒す樣な具に用ゐたものですが、是と太刀と合せた形です、鎖鎌を使ふのでも鎖を振つて分銅を相手の眉間、胸、足其他急所に打込む機會などは電光石火の手業は勿論ですが、この鎖鎌にしろ、薙刀にしろ唯手先の業ばかりでは駄目です、ウンと下腹に力を入れて、臆せず動せず、氣合を飲み込んでかゝらねばいけません、呼氣と吸氣の塲合によつて敵の動作が違ひますから此機會に乘じて一擧に倒さなければなりません。

名人の遣り方は氣合

それを誤るが最後敵の太刀を捲き込む筈の鎖を相手の手に押へられたり、薙刀の柄を切り折られて了ふのです、最も棒合と云つて此柄棒を石突とを利用して立派に敵に對する術もありますが、これとて精神修養の足らぬアワテ者では到底勝を制することは出來ません、武器を持扱ふ上に極めて大切な氣合と云ふのは禪學にもある其れで、心を丹田に落附け、突差相手の準備なき缺陷を突くので、あながち武術計りの專有物とは限りませぬ、三味線を彈のでも義太夫を語のでも、夫々下腹にウーンとこたへて氣合の心組で懸らねば到底名人の遣方には及ません。

四十餘年の經驗

體力の健全になる事は勿論です、私の道場に入門なさる方々の中には妙に腦が惡いとか、胃に故障があるとか云ふ方ばかりですが、其人の健康狀態を見て夫々適宜の術を授けますと、大底三月位で不思議に快くなるそうで、永らく通つてゐた醫者の手を離

れたと云て態々門人の親御が禮に參る事もございます、殊に當時の學校は課目も多く、從て運動の方法も緻密に渉らねばならぬ樣ですが、私が今日迄四十何年と云ふ間の實驗上、此道には別て女子には相應しい運動法で、敢て仕合迄を遣ずとも形丈で澤山です。

薙刀術の一手

近頃は『出齒龜』とか云ふ一種のたわけ者が往來して、盛んに女子を悩ますとの事ですが、私は此話を聞く每になぜ女子が那麼に意氣地がないのだらう、如何に相手が五尺の大男とは云へ、他愛もなく命まで取れるなんて餘りの腑甲斐なさに腹が立た事もあります、たとへ負る迄も男の急所にでも一當あてたらよからうにと、他人の事ですが爾う思ひます、薙刀術の一手でも覺え込だら滅多にむざ〳〵と恥を末代に殘す樣なことは斷じてございません。

足駄履で五斗俵

私は最も子供の時分から多少腕力もありましたが遠州相良在に居ましたとき、穀類を陸揚する人足共に交つて、いたづら半分足駄ばきで五斗俵を兩手に差上た事もあります十六歳の時斯道八代の師範強矢良輔氏(字名は武行、武甲齋と號す)の門人となり唯今十代の師範となつて、六十三歳の此歳ですから以前程の元氣はありませんが、たとへどんな强敵でも充分に用心をして斯術の奥の手を出したら、決して負ける樣な事はあるもんですか、ですから何時も學校で生徒達に恁う云ふのです、『貴孃方は家で、ハタキや箒なぞをお持になるでせう、それにも一々持方があるのです、況んや相手は薙刀ではありませんか』。

曲者と睨み合

昔話ですが明治十三年の頃でした、私の一家が深川西六軒堀にゐた時分の事で、船乗の人々に金圓を渡す必要があつて、私唯一人、其役を命ぜられた歸り道です、兩國橋へかゝつたのが夜の一時で、人一人に逢ひませんでした、淺草の藏前通りの裏町から大H横町を曲つて、やつて來ますと、突然一人の大男が私の行手に立塞つたので、星明りに透すと縞の

羽織を着た男で、物をも云はず私を睨み附けてゐるのです、私も曲者と思ひましたからそのまゝ屹と立止まつて、矢張相手の顔を睨み附けた、自分の考へでは男の手の出工合によつて日頃の手並を現はしてくれんものと内心面白半分機會を覗つてゐると、其男は二歩三歩づゝ跡すざりを始めるのです。

追剝に會た人

私の心持では、二十分間も睨みくらをしてゐた樣に覺えてゐますが、曲者も不氣味に思つたか、道を開いたので、私は眞中を歩いて家に歸つてくると、其男は跡を跟けて來るのです、丁度玄關まで歸り附いて家族の者に話しますと、氣早な男共はソラと云ふので棒なぞを持ち出す騷ぎに、曲者は逃げて了ひました、同夜柳川町の質屋の細君さんが、大日横町で追剝に出會ひ、湯褌一枚になつたとの話を翌朝差配人の女房から聽きましたので男共はあのとき追駈けて取押へて了へばよかつたにと口惜しがりました。



大福御前の事

先づ那麼話は後にして私の流義の起りは武藏國秩父鉢形城主北條氏邦の夫人大福御前から出たものです、氏邦は當時關八州に名を轟かした北條氏政の甥で、天正十八年三月秀吉のため小田原城を屠られ、次で鉢形城も危くなつた時、氏邦は出陣に臨んで夫人の大福御前を戒めて云ふやう、お前は薙刀の技に長じて居るけれど生憎姙娠、殊更臨月だから、遁れる丈のがれよ、そして若し産んだ兒が男子なら强矢彈正と云へ、女兒なら勝手にお前が育てよと云ひ殘して戰死しました、後生れた兒は男子だから遺言の如く名乘らせて、武術百般を敎へ、尙薙刀術をも授けたのです、仝人は一生武甲山の麓に隱れ住んで武術を磨いてゐたが、時到らず、代々世を繼いで遂に强矢村と云ふ村落を造るに至りました。

七代にして出づ

ですから巴流の巴御前も偉いには違ひませんが、巴御前は戰塲で名を揚げたのです、それに反して大福御前は其子孫代々山奥に住んで、武術の師範役を

なし七代の良輔氏に及んで、始めて紀州家家老紀伊新宮城主水野大炊守の爲め江戸へ召出されたのです嘉永六年の米國水師提督のペルリが來朝した時分ですから、ツイ近世の事で、それまで名を求めず、出世を企てず、多くの志士勇士を養うては武士道に悠々一身を任せてゐたのは餘程偉い人と思ひます。

私の皆傳門人

私の父は舊幕臣で小松崎儀廣と云ひます、又良輔氏沒して其夫人の佐登夫女史が第八代を繼ぎ、嗣子武之助が第九代を、私が十代となつた次第です、今日迄私の敎へた皆傳門人は次の通りです
本多子爵夫人延枝子、元京都法科大學敎頭巖谷滿枝子、寺田芳枝子、海軍機關中佐江連一子、明治女學校卒業生岩坪文子、皆川歌子、佐藤よし子、近藤廉平氏令孃貴子、小松房子、
の諸子で、本年許狀を渡す筈の方々は
高等師範体操科卒業山根壽々榮子、女子女學塾卒業望月啓子、小宮光子、東洋女學校卒業生瀧村信子

宮殿下の上覽

終りに臨んで申上げたいのは本年五月十五日紀尾井阪町伏見大將宮殿下の御上覽に入れ奉つた事で、此時の形を行つた門人は佐藤よし子、山根壽々榮子、瀧村信子、田中とく子、飯塚ふく子、高藤いえ子、大鹿田すみ子、石渡幸之助氏等で、私と幸之助氏とは仕合を行ふて御令旨を頂戴いたした事です、曩に英人ミス、ヒユーズ氏や元の滋賀縣知事の故籠手田安定氏を始め、元老院議官の故河田景與氏が心易くして下すつて、斯道の發展を致したことの喜びも忘れませんが、殊更御令旨を賜るなんぞ、實に感佩に堪へない次第です。

（談話筆記）

失敗したる私の結婚

北川米子

京都麩屋町の生れで當年廿六歳になります、無論此歳まで會社の事務員なぞをして、淋しい獨身生活を續けて居ります位ですから、今更改めて私がお話し申上げずとも大概御推察が出來るだらうと思ひます、世の中は種々で、私の小學校時代の同窓生の中には樂しい家庭のお人となつて、三人の子供の親となつてゐる者もあり、又女學校を卒業なすつて未だに良縁もなくお一人居られる方もムいます、他人の事は兎も角凡そ私ほど不幸な身の上はないと思ひます

女學校へ入學

私の家柄は京都の公卿士族、維新後父は色々商法に手を出したそうですが結局面白くなく、一時彼地の區役所に書記をして居ましたが三年前に亡くなりました、母は私の十四の時沒して、今は兄と二人切です、小學校卒業後は近江の草津と云ふ土地の叔母の許に追ひやられ、間もなく一家が膳所町に引移つてから大坂の高等女學校へ入れて貰ひました、在學中は僅か二年間でしたが、お友達も出來、代議士の嬢さん方やら土地のもの持の方々とも御交際を願ひました、その叔母の家も餘り生計向が豐でありませ

んし、時々私の事から風波が起りますので、私も學校へやつて戴くのは結構です、けれど御夫婦仲がお睦しいのなら何ですが、心から居辛いので父に願つて京都へ歸りました。

嫁入先は會社員

夫から父の側で針仕事の稽古に通ひ、一年餘り他の二階坐敷を賃借してゐます内、父の同僚とかの木村さんと云つて、時々遊びに來る方ですが、私が年頃ゆゑ嫁入口を世話してあげやうといつも父に話してゐた樣子でしたが、何でも此人の友達の知合で東京某保險會社の出張員京都詰である某（姓名は態と秘す）が月々の給料の外に手當なぞを合せて四五十圓、多い月には百圓以上にもなるし、歲は三十だが、その年齡まで餘り花柳社會にも出入せず、貯金も二三百はあると云ふ觸込み、夫ならとあつて父は乘氣になり、その木村さん、友達とか云ふ人と立會で、私に是非嫁に行けと云ふ言葉なのです、私も歲は若し、相手が什麼な性質な人か分らなかつたのですが、父がたつて、、、と云ふので、仕方がなく某に會つて見る約束をいたしました。

愈々本人と會ふ

別に『見合ひ』と云つて胸を騷るかせてゐた程の事もなく、或日其某と云ふのが、木村さん同道で私の宅へ遊びに來られたのです、父は恰で面識ある人の樣に氣輕に話せば、某も親しくするのです、私はモウ恥かしさが一抔ですから、下へをりて此家の家族と話してゐる中、父が私の名を呼んだので、恐る〳〵上つて行くと、突然、某に挨拶なさいと云ふのです、私も前々から色々聽いてゐたので、モウ恥かしくつて〳〵仕方がありませぬゆゑ、何とも云はず頭を下げて、其儘下座敷へ駈をりて來ましたのです。

結婚の成立

それ切りで話が纏つたのですつてね、私は跡から聽いて眞實に驚いてしまいました、どうせこの話は誰でも知つてゐますし、臆面もなく申上げられる譯ですが、二三日と云ふもの、父を怨んで口數も碌々

申しませんでした、さて無理遣りに私が輿入をすることになりまして、生計向の困難でした際でしたが、夫れでも簞笥一棹、夜の物一重、衣類など悉皆先方へ持つて行つたのです、私の心配してゐたのは私の嫁入後、父の世話をする者が無くなる事でしたが、四ッ上の兄が東京に一家を構へる筈になつてゐたのでした。

二三日も歸宅しない

先方へ嫁入つて二十日ばかりの間は良人の心も分りませず、人の出入で氣も落附ず、唯夢のやうに暮してゐました、良人は毎日家にぶら〳〵遊んでゐるかと思ふと不意に二三日も歸らない様な事がありますので、私も保險會社の出張員などと云ふものは恁う云ふものかしらん



それにしても私が嫁入して一ケ月も立つか立たぬにこの始末では、行末も心細いと思ひましたが、是は自分のヒガミに違ひない、良人に訊

くと郡部を募集するので、自分は唯監督に出るばかりだと云つて、何事も他に打明けない。

見知らぬ女

その月の末になり、諸拂をすませと云つて、十圓紙幣を二枚くれましたが始めの話とは少し違ひますので、これでは家賃の月割を拂つて幾何にもなりませんと、云へば、今月は色々金圓が出たので、跡は茲五六日の間に何とかするとのことでした、私も最な話と思ひまして、その儘預つて置きましたが、或日良人の留守に見知らぬ女が尋ねて參つたのです、用向を尋ねると良人に逢ひたいと云ふ、何用でと云へば、逢へば分ると云ふのです、實に妙なことがあると思つてゐましたが、夜になつて良人は少し酒を飲んだ氣味で歸つて參りました、此日は良人が何時にない興醒顔で、私に少し家を留守にしてくれと云ふのです。

女の姙娠と良人

私は變だと思ひましたが、良人の氣分を損ねるの

も何ですから、別に用事もありませんが、わざと京極邊を散歩して約半時間ばかり立つて歸つて參りました、私は門口まで來て立聽きをするでもなく戸口に寄りますと、女の啜り泣く樣な聲がするぢやァありませんか、それ故私も這入り兼ねて立つてゐましたが、前後の樣子から考へて慥かに其女は姙娠してゐるのです、まア身の二ッになるのを什してくれるとでも云ふのでせう、私は其時ばかりは悚然しました、其晩は女も歸つて行つた樣でしたが其翌日も翌日も來るのです、終には私にまで良人の薄情を訴へる樣になりましたが、五六日と云ふもの良人は家に歸りませんでした。

破談‖獨身

私はこんな事を一寸父に話したので父は大變立腹してトウ〳〵破談になつて了つたのです、何でも其女は紡績の工女だそうで、什麼して良人と一所になつたものか分りません、それから私は父に亡くなられ、唯今では兄の許へ身を寄せて日々通勤してゐま

すが、もう／＼世の中の男と云ふものゝ氣が知れませんので一生獨身と定めましたのです。

青年の母となり得る母ありや

日本女子大學豐明幼稚園主任　甲賀藤子

手に適はぬ子

私共の子供はもう母親の手なんかに適ひや致しません、と仰有るお母樣が澤山世間には御座いますがこれはほんとにお子達の罪でしやうが、お母樣の罪でしやうか、もつと／＼大きくなつて青年時代になりますと、お母樣も何ですか、わが子ながらも一段と崇め奉まつてゐらつしやいまして、そうして御自分でも、もうあれはお父樣の子ですからと一切關係しないものゝ樣に思召してゐらつしやいますが、あれもこれも一切ほんとは誰の罪でしやうか、余程研究すべきことゝ思ひます、私共はもう久しく子供を扱かひまして、ことに多く亞米利加のお母樣達にもお遇ひいたしましたが、世の中に手に適はぬ子の罪はたゞ事實母親一人の負ふてよいものゝ樣に思ひます事が度々ございました、只今では母が子を御する事の出來る出來ないの問題は、只母親が一言諾否といふ事を重んずるによつて出來るのだといふ事を信じて居ります。

母の諾否

世の中に母のハイとイゝへほど重んずべきものはありません、これが唯一の子供を御する手綱で御座います、例へますれば、お母樣が小供にしてはいけないとお命じになつた事は、どんな事があつてもそれをお許しになつてはなりません、一体小供と申しますものは感じの強いもので御座いますから或時は又よく母樣の弱點に附け込む事をも致します、只今の話がこれはしてはならないと仰有りつけてお置きになりましても、大變にお母樣のお忙がしい時とか何だかクシャ／＼してお出での時にやかましく子供のお强請をいたしますと母樣がおうるさいもので御

座いますからつゐお許しが出る樣な事があるものでございます、これが至極危險なんでございます、一つ事でもお母樣の御都合によつて許されたり止められたりなど致しましては子供は何れをしてよいかわかりません、お母樣がたの御經驗を伺ひますと、この時否へといふ程困難な事はありませんと仰有いますが、この時の辛抱が何より彼よりも大切でつい忙がし紛れにお許しなどが出ますと最後、それからは母親の信用といふものが地に墜ちてしまいます、其時小供の頭に、ナアニ母樣は無理な事でもいけないと仰有つた事でも、お忙がしい時だの何のクシャ／＼してお居での時にさへお頼みすれば許して下さるといふ樣な橫着な心の芽を出させまして漸々强請になり、すねたり泣いたりして母樣をまかせてしまいます、それから母を信用しなくなりまして漸々に母の許諾は重んじなくなり、遂には手に適はない子になつてしまふので御座います。

小供に勝て

手に適はない子の元は母樣の罪にあります要するに小供には決して負けてはいけません、約束を正しく守つてどんな塲合が來ても母樣が子供を御する樣になさいまして決して負ける樣な事がない樣にちやんと決心して居らねばなりませぬ、泣くからとか、すねるからとかいふ塲合に只恐ろしがつてお母樣の諾否を動がす樣な事があつては、それはお母樣御自分で小供に惡い性質を作る樣おすゝめになる樣なもので御座いますから、母樣からその約束を破つて、子供が手に適はぬとお口說きになるのは、一寸御一考下さる必要が御座いましやうかと存じます、それですからどうかお母樣の諾否といふ事はお約束なさいます前にお母樣がよく／＼御熟考なさいまして無暗にかへられない樣になされ度と存じます、只感情のまゝにいけないといつたりよいと諾したりなさいましては、お母樣の信用といふものはちつとも無くなりますこれではどんなに子供が手に卒へなくとも、不平を小供にかぶせることは出來ません。

小供に信ぜられよ

小供に信じられるといふ事は、小供を御する上に非常に大切な事で、ナンダ家の母樣なんかといふ樣になつては、到底母親の鞭によつて動くといふ樣な美しい事にはなりません、十才十五六といふ時分にどうも母親の事は馬鹿にした樣になつて、手にあはぬ子となりますのは、初めにそんな信用のない事を母親がしたからで御座います、私は若子供を御する術はと聞れましたら只、母の諾否を嚴肅にする事とだと申しましやう。

小供の自由とは

小供が自由に育ちますと申します事は、決して放任



主義な、やりつぱなしを意味するのではありません學校ででも、家庭ででも長上の命令によく服從して喜こんでものをすることの出來る樣にするのが、眞實の自由でございます、小供自身も決してそんな放任を喜こぶものでは御座いません、命令が代る樣では子供は一つ道にはすゝまれません、どうかお母樣は小供に對する態度を嚴重になさいまして、喜こんで命令に從がひます樣に致させ度いと存じます、お母樣の機嫌次第で、今日は東、明日は西と命令が變ります樣では一向小供は母親の命令を喜こぶことが出來

ませんから却つて不自由になるので御座います、眞の自由主義とは放任でなく、よく母親の命令に從がはせます事でございますから、この様にしてだん〳〵子供が大きくなりますと、お母様を信ずる力が出來まして、親しい愛敬の念を生じます。

母の鞭下にある子

私の經驗上どうも一般にお母様は子供の中丈けのお母様の様なお考へがある様に存じますが、決してそうではありません、一身を修める事の出來る青年に達する迄も尙母様は母様でなければなりません、私がアメリカに居りました時、ある家庭の晩餐に招かれました事が御座いましたが、其所のお母様が子供に對せられます態度がいかにも嚴肅であつて、其時もはや一廉の青年になつて居られました息子さんをまるで小供でも扱かふ様に、キツと命令を下して居られました、息子さんの方からもそれは〳〵丁寧に命令に對しておうけをしてをられましたが、その間の様子は日本のお母様の愚痴の種になります、手に適はぬ子だなどゝいふ様な姿が少しも見えませずに眞から母様に服從して居られる様に見えました、それで私は始終そんなに考へるので御座います、どうか日本の母様でも子供の時分から嚴格にその諾否といふ事をお考へになり十分に、自由に、子供に信用さるゝ様になつてさへお置きになれば、お母様もその子供が立派な青年になつてもなほその鞭の下に御することが出來様かと存じます。

青年と母

ことに子供も十五六になりますと、漸々我れと申すものが明瞭となりかけまして、考へが獨立して參りますから、どうかすると親の鞭の下を滑り出様といたします、ですけれどもこの時お母様の鞭の下が放るゝ事の出來ない程、溫かで、柔和でなつかしかしかつたら決して邪道に踏み入るものではございません、ことに二十才以上の青年になりますと、漸々と事繁き社會に觸れて參ります故、人には明かされぬ心の秘密、申さば眞の叫びとも申すものが出來ます

ものでございます、そうしてその叫びを誰れかに語り度い、明かし度いので御座いますが、實の所たゞ今ではほんとに明かすによい人が青年にございません全體ならばお母様に聞いて頂きますのが普通なんでございますが、悲しい哉まだ／＼青年の惱みを聞いて下さる様な母が少ないものですから、もう大半の青年はひそかに悶々として人生の寂寞を感じて居るのでございます、御覽なさいまし、世間ではいつも五六人の青年の母となつて種々な慰藉を語てゐらつしやいます御婦人の多ございます事を、こんな惱みの爲め、青年が身を害なふといふ例は決て／＼珍らしくはない事でございまして、私はもうそんな事に出會します度に天下に青年の母となり得る母は幾人あるだらうかと、深く／＼感ずるのでございます。

青年の要求

少し青年に御注意なさいます方には直ぐお判りになる事ではございますが、むかし私どもが育てました幼稚園の生徒がもうたゞ今では立派な紳士になつて居る人も少なくはございません、その內の人達が如何ですか始終私の所へ參つては種々な事を打ちあけて話して行きます、勿論お母様にも仰有れるでしやうが、それが出來ない様な事迄も話して行かれます、經濟上のこともあれは、お嫁さんを貰ふといふ話もあります、どうしてそれがお母様には打ち明けられないだらふと不思議に思ひます事も度々でございます、私はアメリカのお母様が恒に青年の母となる事が出來て、大きくなつた息子さんのお友達の事から、遊びに行くお家の娘さんの話、また今日は何所で何をして遊んだとか、何所の誰さんが何といふたとかもう／＼青年の心にある丈の秘密を知り拔いて居られますのを見て非常に愉快に感じますので御座います、そんな風に子供の心が明瞭に母様にわかりますから、母様も注意する所は注意します、禁ずる所は禁じ、許す所は許します、それですから、青年も自分が確かに獨立したします迄は母の鞭下に安んじて保護せられます事が出來ます、ですから母様も安心な

り、子供も安心なんでございます、從がつて、つまらぬ所に人生の寂寞なんぞと贅澤な眞似をいたします暇がありません、ことに青年は非常に母樣の愛を要求して已まないものでございますから、母樣はどうか青年のお母樣におなりになる丈けのお心懸が肝要かと存じます。

下宿住居と母の愛

私は先達て本鄕邊の下宿やに用事があつて參りましたが、その殺風景な一般の樣子を見まして、ほんとに青年の心中を深く察しましたのでございます、病氣だといつても誰れが心切に介抱して吳れるではなし、勉强に疲かれたからとて誰れ一人慰め人もありません、この間にたつ青年がはるかに故鄕に心を寄せて、父母の案否を問ふ塲合にいつも〳〵固苦しいむつかしい父樣の訓誡にのみに接しましては滿足をいたします事が出來ましやうか、それよりは母が手製の布衣に熱い淚を流がすのでございます、私はかゝる都會に出でゝ日々温かきホームを慕ふ青年の爲めに故鄕の母は常に書を寄せて絶えず青年を慰籍せられん事を希望いたします、吳れ〳〵も母の務めは小供の時代丈けて終るものでは決してございません、小供の頃より母樣の諾否さへ確でしたならば別に大した苦勞もなく立派に青年の母樣となり得る事が出來ると信じます。

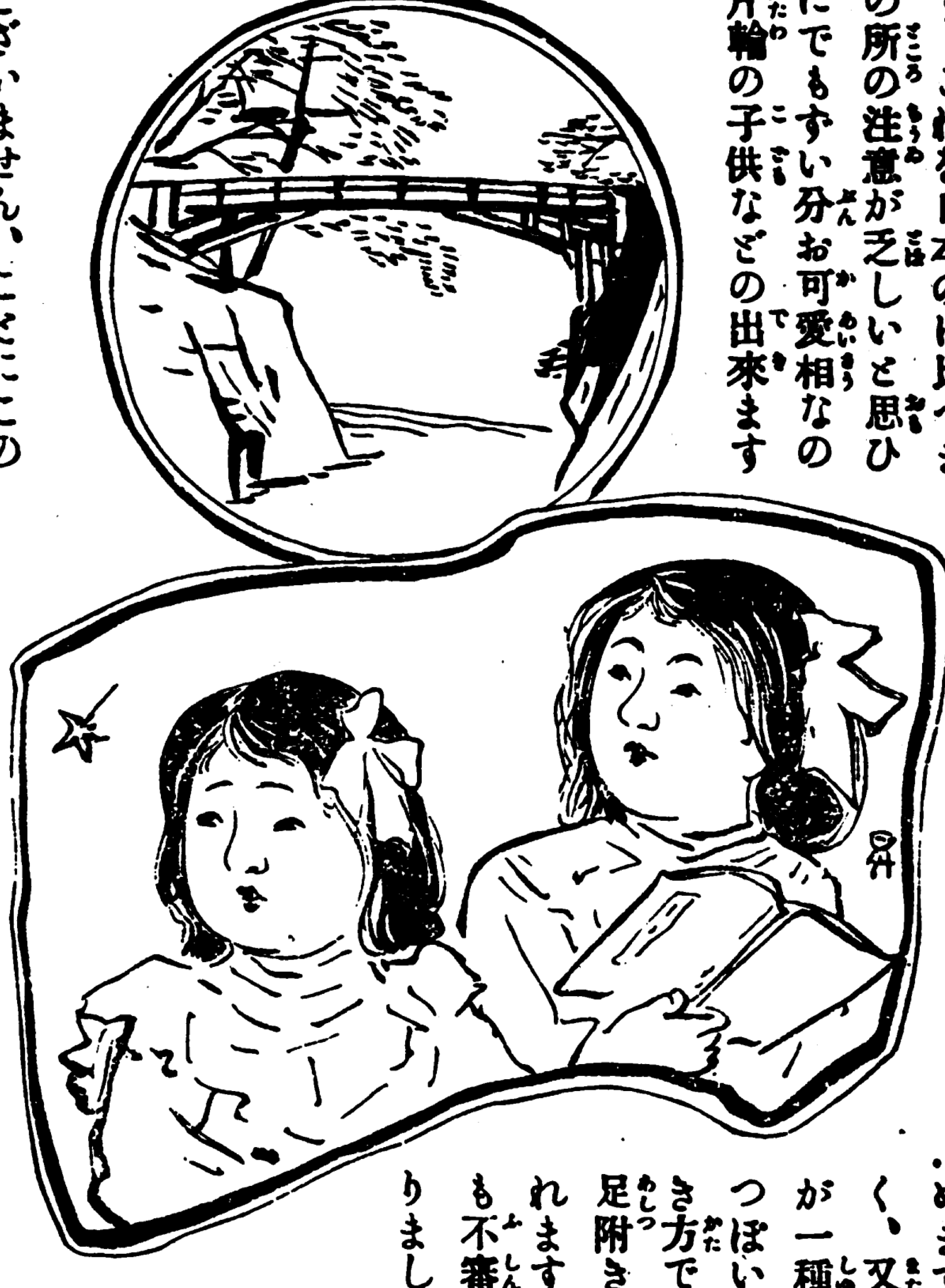
母親の心懸

大した知惠が要りますでもなく、難つかしい、理屈をごね廻しますまでもなく、立派な母となりますの要はこの諾否を嚴格にするといふ計りでございます、もーこれは只、母親の日々の心懸一つでございます、日本のお母樣も隨分種々な御心懸けをなさいますが、私がアメリカで見ました母樣などは姙娠中から身体を大事に保ちますのは勿論の事、ことに精神を練るといふ事には余程留意をいたします、尊き人の說に耳を傾けるといふ事や、よい繪畫音樂などに心を澄ますといふ事などは尤もよい方法として、姙娠中は家族のものもなる丈けむつかしい厭なことは聞

かさないといふ風にしてございます、私はこれはよほどよい習慣だと存じます、これを日本のに比べますと、どうも日本ではその所の注意が乏しいと思ひます、私が伺ひました中にでもずい分お可愛相なのがございます、もと／＼片輪の子供などの出來ますのは決して母親計りの罪ではないのでございますが、世間ではそうとはしらずに生んだ母の責められるといふ事を度々聞きます。

姙婦と母の準備

もう姙婦と極まれば母といふ名がつくのですから、母としての準備の大切なことは申す迄もございません、ことにこの準備中にあつた事柄は大變に生れまするに影響いたしますもので、私がある方から承りましお話に幼稚園へ參ります一人の子供の中に、どうかして泣き初めますと切りがなく、又その泣き方が一種特別に哀れつぽい悲し氣な泣き方でしかも妙な足附きをしてあばれます、先生がたも不審にお思になりまして、早速そのお母樣に就いて御姙娠中の模樣をきかれました、所が不思議な事にはそのお母樣はそのお子樣の御姙娠中にお父樣を失はれました、それで大變悲しがつて居られました



が、その頃家計も十分でおありなさいませんでしたので、お母様は毎日々々泣きながらミシンを履んで賃仕事をなさいましたと申す事がわかりました、所がそのお子様の足附きがほんとにミシンを履む足つきと一所なんですから實に爭へないものだと感心したと談して居られましたが、も一こんな實例は實に夥しい事でございます、で、妊娠中の母の心や身體や態度は生れた子に直ぐに表はれますので、母様の感化は妊娠の當時から、獨立を致します青年の時までも及ぼさるゝ事を思ひますと、只その偉大に驚かるゝ計りでございます。

ナポレオンの母

ナポレオンの母親は戰爭の模様のある薄團を敷いてお産をなさいましたといふ事で御座います、よしやそれ迄でございません迄も少し小供が生長いたしますれば、決して小供の前で愚痴をいつたり、忿怒したり、悲んだりなどいたします事は小供は聞えは致しませんが、心身に感じまして、聲にこそ、出しませんが矢張りともにその通りの表情をするものでございますから、お母様は例へ小供がものは云はなくとも、足は立たなくとも、決してお母様としての態度をお壞しになつてはなりません。

これは實話だ相でございますが、私の知人の妻君が妊娠中に或時野に出て大きな蛇に出逢つた相でございます、もうその時は身に染みる程恐かつたのだ相でございますが、すると今度生れました子の顔がまるで蛇の様で、其の時、お母様の目に恐ろしかつたと記憶されたのを其のまゝであつたと申すことでございます、これは又廣島のかたの御話ですが、多勢兄弟がおありの中に一人どうもまことに變な顔のお子があつた相でございます、どうも格好がまるで馬鹿の様ですから、あまりの不思議さに種々調べて見られました所が、實はそのお母様が御妊娠中に、少し都合があつてある家の同居をしてをられました、所が其所に一人白痴の子がございましていつも妙な事をばかりして居つたのを見てをられました事があ

つたといふ事がわかりました。

母の責任

右の様な次第で、母の責任の重大な事は、すべて小供の行末にまで及ぼさるゝものでございますから、其の嬰兒の時は勿論、姙娠の時、進んでは青年になる迄も、よく子の母となる心懸が第一番に必要だと存じます、もうそれは前々も申します樣、お母様の正當な判斷で、諾否を嚴重にして、子供が信をもつて、母の鞭下に來る樣に致し度いものでございます今もしこゝに青年の訴へがたき惱みの爲め、墮落す、ると申します樣なことがございましたらば、それはもうたしかにお母樣の責任だと私は考へますのでございます。

日光の紅葉（去年の秋）

實踐女學校々長　下田歌子

玉篋二荒の山には、高輪なるふた所の、姫君達が假宮しつらはせ給ひつれば、御けしき承はらんとて夏ごとの御避暑中には、必ずまうのぼるを習ひにてかしこの山水は、あだかも舊知己の思ひあるに至りぬ。

をかしき岩のたゝずまひ、面白き瀧のけしきも、始めこそあれ、遂には目馴れて、御供の外には、ふりはへて訪らふことせずなりて、事はつればまかんづるか常なりき、斯くまう登る毎に、秋の紅葉を見ぬことやあるなど云はれつれど、公私のことしげき身には、げに一度はと思ひわたりながら、序なくて年頃になりぬ、ことしはいとよき日和なれば、いざかの紅葉のかげにこそゝのかさるゝまゝに。

十一月三日、午前五時といふに出でたつ。

村からす塒はなるゝ聲はして
　まだあけやらぬ霧の中みち

牛乳くばり、新聞配達、さては巡査のちまたに立てる外には、物も見えず、いと靜かなる都大路、萬代橋渡るほどより少し明そめて、人顔しげく成ゆく。

紅の雲は匂ひて朝日まだ
のぼらぬ軒にけぶりたつ見ゆ

上野の停車場にいたりつきぬるは、五時五十分ばかりなり、契りつる人々此所に集ひて、同じ六時三十分といふに發車す、空少し曇りたれば、雨にやならんなど危みて、携へ來る新聞とうでゝ天氣豫報を見れば、晴後曇とあるに、心おちゐたれど、山路は雨多きが習ひなるを、花ならねば陰にかくれんとも云はれしなど、いひしらふに、鳥山ぬし。

うしろめた時雨としもやなりなまし
もみぢの色のにほふあさくも

早稲は大方刈り盡して、晩稲の稲穂重げに置きあまる露ぞ、げに玉の價なりける。

ひえ鳥の聲かしかまし柿の實の
赤らみわたる山もとの里

汽車は十時ばかりに日光に着きぬ、小西といふが家の支店に憩ひて、先づ案内人傭ひ、割籠やうのもの移擔はしめんとするに、とみの事なれば、こゝに人

なし、しばらく待たせ給へといふに、人々心いられして、あたら時を移さんよりは、などか自らしても持たれぬ事やはあるとて、急ぎ立つ、停車場にそひたる道を傳ひてゆくほど、小西が家の老媼、やゝと呼びて追ひすがり來、何かと問へば、辛うじて事うまつらすべき老媼ともないまゐれりと云ふ、さらばとて、人々の手にしたるをになはせんとすれば、荷、思ひの外におほくて、いと重げなり、わが供なる侍女の、殘れるは、己れもてまゐるべしと、かしこう云へど、彼れは、都にのみ人となりぬるにて、え、はか〴〵しうは爲あへじと危む、秋山ぬしこれを見て、汝が常に負ひて、山路行通ふといふ籠もて來かしと云はるゝに、老媼打ちゑみて、げにさぞ侍る、ぬしこそ能く荷作りは心得給ひつれといふに、みなさと笑ふ。

山にかゝれば、霜枯たる艸の中に、龍膽の、ひとり我れは顔に、濃き紫の色して、莖長うさし出でたるにぞ、先づ眼はとまる、人々根ながら堀り取らん

とて絹傘の柄のさきして堀る、傘は上に塗れて穢なげになりにたれど、根は切れて、はかなげなる花のみ、手に殘りたるいと口



惜し。

斯くて、山深く分入るまゝに、紅葉の色霧のたゝずまひ浮世の外のこゝちして、えも云はずをかし、大方の草葉は霜枯れになれど、例の龍膽は今を盛りと我れは顔に咲き誇りたるに、われもかう、松蟲草等の、折々交りてはかなげ匂ひたる、一きはあはれなり、登り果てたる所に、さゝやかなる茶店あり、頭に霜をいたゞける嫗の、憩ひ給へ〳〵と、云ふ〳〵、しぶ茶汲みもて來たるに、人々も、足やう〳〵勞れつれば、いざとて、簀に腰打ちかく、少し物欲しう成りたれば、先づ此所にてをとて、くだものやうの物とらでまゐる程、今日は霧降にやせん、裏見にや行かんと、人々心惑ひて、いづこと云ひしろひつれど、なほ霧降の景色床しうする人多くて勝たれにけり。

瀧を見る所には、怪しの小屋しつらひて、守る人

あり、谷を隔てたる、向ひの尾より漲り落つる瀧のしぶきは、げに霧降の名に背かず、晴れたる空の光も曇らはして見ゆるに、千歳の松の綠のひまよりかゞやき出でたる紅葉の錦、しくもの無しとは、是れをぞ云ふべきと覺えて、濃き薄き紅ゐ、黄、ゐび色朽葉などは、更なり、名も知らぬ色の限りして、造化の神の心のまに〳〵染めつくしたる、此世のものとしも覺えず、少し移ろひかたなるが見ゆるしもこそをかしけれ、來ざらましかば口惜しからましと思ふにつけて、我れは、幼け無きより、自然を愛する心深くて、やう〳〵物思ひわく頃より、いかで山水の隈に一人住して、花紅葉の蔭に世をつくしてし哉と願ひしに、大方はみな、心と違ひて、人やりならぬ事わざのしげみに身を圍はるゝ事よ『名利に使はれて、靜かなるいと間も無く』と云はれたりけん、某の法師に笑はれぬべきをなど、思ひくしてたゝずみ居たり、眞晝は早う過ぎにけるを、いざ割籠開きてなど、人々の云はるゝに、さはとて、おの〳〵携

へたるどもをとう出て物する程、鳥山ぬし。

いゝけしき歌の一句も出でばこそ
　あきれて口の開いたきりふり

と例の口とくざれ云はれたれど、さしつぎてまた、

先づこそは思ひよらるれ云ひふりし
　紅葉の錦たきのしらいと

晝飯果つれば、皆人、こゝにてのみ見んはいと〳〵口惜し、いざ瀧のもとにと云ふに、我れも〳〵後れじとあえぎ下る、鳥山ぬしは、足の搬び覺束なければ、此所にとゞまらんとある、げにとて、こゞしき岩角踏みさくみて下るゝ程、時々、石のころ〳〵と轉び落つるいと危し、瀧川のほとりに下り立ちて見れば、近増りして、やう〳〵傾きもてゆく入日に映えたる色、たとしへ無しや、散りがたなる蔭にさし寄りて。

唐錦おりめ亂れて見ゆるかな
　縫ひとゞめてよ瀧のしらいと

岸の巖は、苔の席厚う敷かれたるに、人々腰打ちか

け、うつぶし臥しなどして、たゞあゝとのみさし仰ぎゐたり。

瀧川の末より見れば山姫の
　錦は空のものにぞありける

斯くながら、世をも遁れてばやと思ふまゝに、

ことあらば苔の衣をしきたへの
　枕にからん岸のいはがね

岩がねに落葉衣やきせてまし
　苔の袂のひまの見ゆるに

ふと足もとをのぞき見たるに、何人のしわざにや笹折、竹の皮やらの物穢げに取り散らしたり、など漲る水のたゞなかには、打ち込みて往なざりけんいと憎し。

ともすれば浮世のちりのまじるこそ
　この山水のにごりなりけり

おのれも、人まねに斯く思ひつゞけはべる、とり直させ給へとて藤波愛子ぬしのうたひ出でられたる、

摘みいでん言葉もしらぬ紅葉かな
　いかなる露の染めつくしけん

霧降の瀧のしぶきや染めつらん
　あたりの紅葉色のことなる

たゝまく惜しき木蔭なれど、日は早う、西の山の端近うなりて、風さへ少し身にしむ心地すれば、せん方無くて、もと來し道をたどり歸る、若き人の足とくのぼるが憎ければ、負けじ魂に後れじと追ひすがる程、いかにしたりけん、眼くるめきて、胸さへ苦しう成りにたれば、道のほとりの草むらに臥して侍婢しておささへさす、心地はいかにと人々の心もとながらるゝがいとほしくて。

後れじの心の駒ははやれども
　老いにけらしな身のつかれたる

とこそ云はまほしかりしが、されど、束の間にしてよろしう成りぬ、歸りつきたれば、鳥山ぬし。

むら紅葉てらす岩垣霧はれて
　夕日をあらふ瀧のしらなみ

瀧の音ひゞくみたにのかげろひて

夕日さやけし岸の紅葉

など許多ありしかど、えも書きとゞめあへず、火ともし頃に日光町まで歸り來つ、大谷川の橋渡るほど、かなたの橋を越えて歸り行く人の、手毎に紅葉かざしたるが、辛うじて、我が折らせつるよりは、色ことによかりければ、塚原律子ぬしの彼れ見給へ紅葉は、西山の方こそ増りためれ、公けのとがめ蒙るとも、いかで、今一夜をこゝに明かして、倘山深くこそ尋ね入らめ、いかに許し給ひつべくやと云はるゝ、げに我れもさこそ思ゆれなど云ひ〳〵て、町にかゝる、と見れば、今見つるよりも、一きは愛たき紅葉折りはへたる人の、我が名を呼ぶに、誰ぞと問へば、瓜生ぬしなり、先づこと〳〵も無くて、うるはしの枝やと打ち歎きつれば、げに持たまへるは劣りにけり、これまゐらせんとて、殊に色濃きを分ち與へられたる、嬉しさ物にも似ず。

立ち歸りまたも來て見ん二荒の
　山の紅葉われをわするな

午後六時十分の發車に後れじとまどひ乘る。

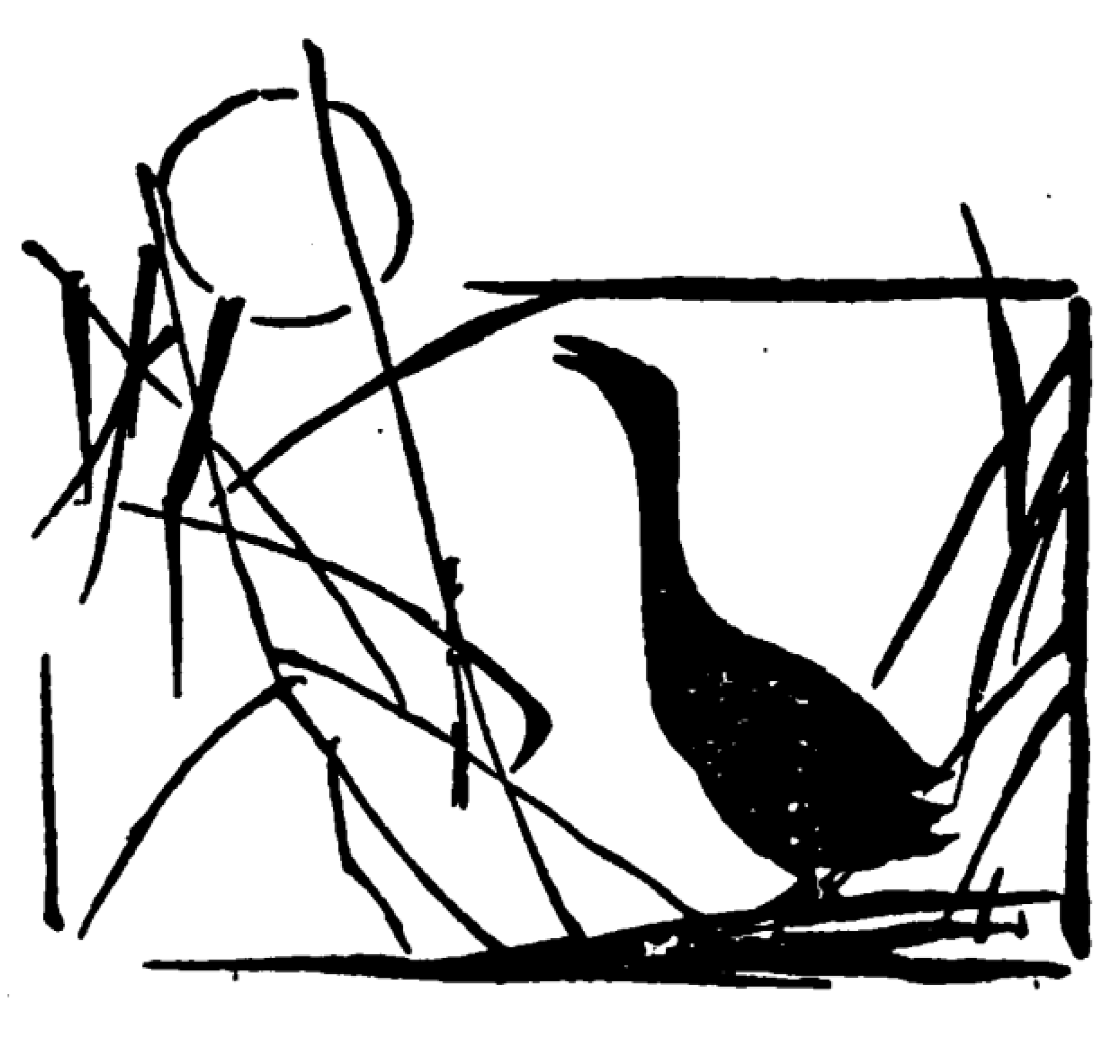
紅葉がり山路くらしてかへるさの
　田面は月の影に成りたる

置く露やふかく成るらし寄せかへる
　稻葉の波に月やどるなり

とひとりごちたれば、鳥山ぬし、己れも斯くとて。

とくはしる車の窓の月見れば
　山の端にぐるこゝちこそすれ

心も置かぬどちして、物語りつゞくる程に、つれ〴〵も無くて、車は、上野停車場に逹しぬ。





上

こゆるぎの磯邊に近く、新に建てられし小庵あり、是もまた金屋玉樓に住飽たる人の別莊にやあらんと思はるゝに、柴の戸堅く鎖固めて、絕て出入る者もなく、浪靜かに松風の吹きたらん折々は看經の音いと哀に聞ゆるを、避暑客の心なしども、屢々無遠慮に音訪れて、座敷借申入るれば、四十餘りなる女、玄關に式臺して、遊ばせ言葉の辯舌滔々、行儀おろそかなる今樣紳士は、返すべき言葉も知らず、是は失敬と逃げ出せど、追へばまた更に來りて、飯の上の蠅よりも蒼蠅きに、此程より柴の戸に、貸家貸席にあらずと斷り、貼付し筆も淸く優しく、色紙に書かせてぞ見まほしき、此の庵の主や誰とは、久しく解かれぬ疑問にて、さる幸福好き座借の客が、微かに見しと云ふを聞けば、年二十の上を三つ四つも越つらん、世に又となき美人こそ、彼の庵の主なるべけれ、さるにても怪しきは、綠の髮を惜げなく切下にして在はしますと、是より肝腎の海水浴をこの次

にしていでや我眞魁に、美人の生體洗出して、人々に誇らんと日夜庵の外に立つ好事好色の輩多ければいよ〳〵深く姿を收めて、美人の影だに見えざりけり、試みに學習院に至り、創立以來最も秀才淑德の女子を問はゞ、松風子爵第三の姫と答ふべし、姫はおん名を琴子と申しき、才學の優れたるのみならず、孝悌仁慈の性質、斯る姫はまたあらじ、天晴女子の好標本よと、知るも知らぬも賞稱しゝが、惜しや花も蕾なる二八の頃より、兎角病身に見えたまへば、おん父子爵深く憂ひて、大磯なる別莊に伴ひたまひぬ、お附の女中は御幼少より、護侍きし時と言へる者外に下婢一人從ひ、家扶も家從も召連れられず、折節使走りなど、男氣欲しき事あれば、鵜之と言へるを呼ばしめられぬ、鵜之は農家の悴にて、歲は十九なりと言へど、智惠の廻らぬ大男、打見は二十八九とも見え、愚なる心根は七つ八つの小兒に似たり、鵜之は百姓の家に生れながら、鋤鍬持つ事を嫌ひて、終日濱邊に遊び、物欲しう覺ゆる時は、海底に潜魚を抱き貝を探りて食ひ、飽けば巖の上に、同じ色の肌を付て、心地好氣に眠るなり、初め子爵は姫を伴ひて、浪打際を漫歩き、鵜之が泳ぎの面白きを見て、僅か許りの錢を得させ、泳ぎて見せよとありければ鵜之喜んで飛入り、蠑螺鮑の類取來りて上つるに、其數甚だ多くして、商人の手に購ふより、幾倍といふ事を知らず、斯くては今少し價を增さんと、更に相當の價賜はれど、鵜之は錢の使途なきにや、さ程喜ぶ狀もなく、却つて菓子の一つ二つも取らせらるれば、此の上もなく嬉しげに、錢は忘れて歸る事あり、子爵も姫も鵜之が愚かなる心を憫れみ、絕えず東京より取寄せ置かるゝ菓子など少しづゝ賜はれば、鵜之魚を釣り貝を拾て持來り、侍女下婢に翫弄れて己れも面白き事に思ひ、後には寒暑となく晴雨と分たず、此別莊に音訪れて、使走り內外の掃除、何くれと立働くに、媚諂なき天眞爛熳、嬉しければ團栗眼をかしく笑ひ、悲しければ歔欷て泣くと雖も、惡しき心は露程もなし。

中

子爵が用事ありて東京に歸られし留守は、何となく淋びしきに、侍女下婢は鵜之を呼び入れ、さまざまの問答をして、姫の徒然を慰めまゐらせ、兼ねては其身の樂みとせり。

侍『鵜之さん今日はなぜ遲かつたかえ』

鵜之は俄に涙ぐみ、小兒が友達と爭ひして、父母に告げるが如く故意聲を曇らせて、

鵜『父親が田草取りに行くから、來いと言つた』

侍『オヤマア可愛さうに』

鵜『言ふ事を聞かないと學校に上げると言つた』

と說き終つてワツと泣く

侍『ヤレ〳〵大變だねへ』

姫は菓子を持ち來りて、鵜之が手の上に載せたまひ、

姫『もう〳〵泣くではないよ』

と優しき聲にて宥めらるれば、鵜之兩手を眼に當てつゝ、幾度となく首肯けり、

侍『お姫樣から御菓子を頂いて、忽ち機嫌が直りました、鵜之さん、お前はお父さんとお姫樣と孰らが好きかへ』

鵜『そりやお姫樣が好いや』

侍『お母さんとお姫樣は』

鵜『自家の阿母は、見つともないぜ、色が黒くて痘痕面で、お姫樣と比べものにやアならない』

侍『お姫樣はお美しいかえ』

鵜之は姫のおん顏じろ〳〵と見て、涎啜りつ、

鵜『お姫樣は別嬪だ』

侍『オホヽ、汝の目にでも、お美しう見えるかえ』

鵜『そりやア誰だつて奇麗に見える』

侍『汝も好いお妻をお貰ひなさい』

鵜『二十五になると、阿母が嫁を貰つて遣ると言た』

侍『左樣お樂しみだねえ』

鵜『お姫樣も嫁に行くのか』

侍『アヽお嫁入遊ばすんだよ』

鵜之はじつと俯向て其儘口を噤みけり、

侍『鵜之さん、汝の名は鵜之吉と言ふのかへ、夫と

も鵜之作と言ふのかへ』

鵜『鵜之と言ふんだ』

侍『鵜之ッきりでは可笑しい』

鵜『左樣か、それなら鵜之さんと言ふんだ』

侍『オホ鵜之さん、好名だねえ、今日はお姫樣が氷を取れと仰せ遊ばす、鵜之さん停車塲まで行て貰ひたいねえ』

鵜『お姫樣が食ふのか、それなら行つて來る』

侍『汝にも頂かして上ます、お使は鵜之さんに限る何も足が早いから』

煽動られて、其儘一散に駈出す、

侍『鵜之さん、お代を持て行かないと買はれません、と、呼べど叫べど耳にも入れず、賞られたいが一杯に、宙を飛で馳行きしが、頓てまた走歸り、

鵜『叔母さんお錢を持つて行かなかつたから、氷を賣つてくれないよ』

侍『お錢を取らずに商賣する者はありません』

鵜『左樣か、そんならも一度行つて來る』

更に代受取つて氷購ひ來れば、琴姫は立出でゝしほらしう、

姫『毎度御苦勞だッたねへ、お禮に御菓子を上げませう』

御褒美のお菓子よりも何よりも、姫が一言の慰勞嬉しく姫のおん爲であれば火の中にも飛入らん心なるを、侍女下婢は好く知りて、折ふしは戯れに、姫にも汝は愛でたまへど、百姓の子に華族の姫君、釣合はぬ口惜しきなど言へば、鵜之べそかきて打悄る、斯て一年餘り睦みしが、鵜之は唯愚かなるのみ、塵程の惡氣なければ、姫も鵜之を普通の男とは見たまはず手飼の猫か洋犬とも思ひて、愛でいつくしみたまひしが、或時不圖姫に向ひて、鵜之は怪しき言葉を掛けたり、姫は柳葉の眉を上げて、きつと鵜之を睨みたまひしが、是よりは以前の如く親しくも待遇したまはず、侍女下婢も漸く疎めば、鵜之是を悲しみて、愚なる心にも姫の心を柔げんと、稀からぬ貝など夥多拾ひ來りて上る心根のいぢらしさに、

折節は種々の物を取らせ、慰めたまふ事ありけり。

下

翌年の夏に至り、琴姫は健康大いに復し、今は疾く東京に立歸らんとありしを、おん父子爵は此秋まで、保養したまふこそよけれ、淋しくは吾も來らんと、七月の初より別荘に赴き、一葉の小舟を購ひて朝夕姫と之に乘り、鵜之に漕せて、網を打ち、釣を垂れて樂まれしが、果は自身に櫓櫂操つる事を覺え是は一段の慰みと、浪靜かなる時は晝夜となく、舟遊びして、居たまひぬ、

子「今日も釣に出かけたいが汝は否か」

琴「お供致したうございますが、昨晩餘り涼み過ました故か、少し頭痛がいたしまして」

子「ハヽア風邪を感たのであらう、成程昨夜は涼し過た、早く歸れば好かつたのに、餘り月が奇麗だから、ツイ歸る事を忘れてしまつた、

琴「今日も貴方お一人ではお淋しく入らつしやいませう、時をお連れ遊ばしまして」

子「ナニ私しは鵜之を連れて行く、汝が何かある處に時を連れて行くに及ばん、釣を致しながら、鵜之が話を聞いて居ると、是程面白い事はない」

姫「オホヽ何許でも見境なくお朋友に致します」

子「彼が至つて面白い、何に致せ正直な者ぢや」

子爵釣道具取出さるゝに、侍女時は心得て、莨盆呉蓙フランケットを舟に運び、艤粧整へし時立歸て、

侍「御前に申上ます、今日は何う致しましたか、鵜之が又參りません、

子「來て居らん筈はない、亦例の巖の上に、晝寢をして居るのであらう、最う櫓も擢も餘程熟練致した十町や二十町の處は一人で漕廻る事が容易出來る、況して今日の樣に穩かな時は、池を乘るより樂なものぢや」

子爵が別荘を出られて後、凡そ三時間許りは、風凪ぎ波靜かにして、いと穩かなる天氣なりしが、忽ち空搔曇り、大粒の雨ぼつり／＼降出、疾風さつと吹き起りぬ、姫は父君の上を案じ、椽先の簾揭げて

海原を望みたまへば、此時風雨次第に募り、荒浪高く磯邊を洗ふて、凄じき暴風となり、咫尺をも辨へ難きに、姫は心も心ならず、侍女の時にも告げて、風雨の中をひた走り、汀渚に近う驅付けられし時、鵜之は例の赤裸、唇の色を失ひ、兩手に數個の蠑螺を捧げ、がた〳〵と慄ひつゝ、

鵜『お姫樣、此暴風雨に何處へ行くのだ』

姫『オヽ鵜之、汝お父樣にお逢ひ申さないか』

鵜『お父樣とは、殿樣の事か、己は逢はない』

姫『殿樣は、お一人で舟にお乘り遊ばした』

鵜『嘘だよ、斯んな暴風に舟が乘れるもんか』

姫『夫だのにお乘り遊ばしたから、案じられる、早く助け舟を出して欲しい』

鵜『駄目だ、助舟だつて乘れるもんぢやアない』

琴姫が胸の浪は巖を洗ふ浪より高く、兩眼に漲る涙は車軸を流す雨よりも繁し、

鵜『お姫樣、もう泣くではない、此蠑螺やるから』

平生己が宥めらるゝ時、姫の口より聞き馴れし優しき聲して、肩の邊に手を加ふれば、

姫『是れはマア何うしたら好からう』

鵜『ヤア誰か流れて居る、アレ〳〵彼處に可笑しいな〳〵』

と指さす方に目を放てば、打碎けたる板子に縋りて浮きつ沈みつ流れ寄る、姿は正しく父君なりけり、

姫『お父樣……』と我を忘れて海中に躍らんとしたまひけるを、鵜之慌しく引留め、

鵜『エヽ危なへ』

姫『鵜之お父樣をお救ひ申して、彼の巖に當り遊ばすと、夫つきりお生命がない』

鵜『彼處に飛び込めと云ふのか、己等は否だ、死ぬかも知れん』

姫『これ鵜之や、私を助けると思つて、早く〳〵』

鵜之は涎を垂らしつゝ、

鵜『お姫樣、己のお妻さんになるか』

姫『アヽ成るとも〳〵、お父樣さへお救ひ申せば』

姫が答へを聞きも果てず、鵜之は巖に攀登り、き

よろきよろ見廻したる後、反身打つて飛入りぬ、
姫は岸邊に立ちながら、己れ海底に身を潜らして父君を探すが如く、心も焦ち氣もあせりしが、凡そ十分程の後、赤黒き鵜之が腕は、白く疲せたる子爵を擁きて、白砂の上に泳ぎ着きたり、姫は先づ父君を引上げ、次に鵜之を引上げて、聲を限りに呼びたまへど、何れも早や呼吸は絶えたり、姫が絶叫の聲聞きつけて馳來りし侍女時は、斯くと見るより喫驚仰天、急に醫師を迎へ來り、介抱手を盡せしに、子爵は忽ち甦へられぬ、姫は嬉しさ譬へん方なく、醫師に向ひて禮を述べ、
姫『而して此の男の方は如何でせうか』
醫『所詮養生は叶ひませんな、此の人は溺死と云ふより、寧ろ負傷が原因です』
姫は鵜之が死骸に寄添ひ、其の手を執て稍暫し暗涙に咽ばれしが、別莊に入去るや否や、光澤なる緑の黑髪、髻より弗りと切て、鵜之が死骸と共に葬り頓て佛のお弟子となりて、菩提を弔ひ給へり。

磯うつ波の終に

折柴園主人

半井桃水氏のこの作、もとより架空小說たるに過ぎざれど、やさしき婦人の心情を描出して餘す所なく、いさゝか時代じみたる所なきにあらざるも、婦人としての操行は正にかくの如くあらまほしきものなり。

然るに世にはこの小說に記せる如き愚物にあらずして、立派なる海軍士官の妻として、その夫は遠洋航海に行衞不明となり、幾夜を泣明すも涙の乾く暇あるべからざる身が、俄に化粧に、一しほのうき身をやつし、假にその夫の死せりとするも、魂魄未だ家の棟を去らざる時、ある時めける老顯官に再縁し、交際社會に出づるさへ後めたく思はれはせずやと氣遣はるゝに、高等の女學校をさへ建て、其校長となりすまして、他も咎ず、自らも耻ざる世の中には、せめて小說にても、かゝるものをこそ讀せまほしけれ。

磯めぐり

石榑千亦

村夫人

總の國海上の磯めぐりて來むと、兩國停車場に來りしは、月は八月、日は十四日の朝なりき、
師の君は雪子の君、文子の君、綱子の君、三人を伴ひませり、此他には横山の君と三浦の君とありしを、三浦の君は障ることありて、後よりとぞ、
稻田の風馳せ行く汽車を追ひて、開放したる窓を訪づれ、心地いはむ方なくすが／＼しきに、龜井戸過ぎ、小岩井ゆき、市川來り、中山迎ふ、行くと來るとます／＼興の湧くに、暑さゝへ忘れにけり。
津田沼なりけむ、がや／＼と姦しく囀り入來る女、一人ならず三人までなるに、先づ暑くるしさを覺えぬ、入るやがてそこら睨めまはし、乘れりし人の手荷物片付けよがしに、狹や／＼と顧みいふなり、膝ゆづろひ席を與ふれば、それには會釋もせずて寛ぎすはり、荒々しう扇子づかひする、見るから憎げなり、女らしうやさしう作られたる扇子、散らしたる金砂子も爲に剝げ、白とはぎあはせたるその紺青の色さへあせぬべき不幸をかこち、鬼をひじく丈夫もかばかりむごうは扱ふまじ、骨も肉もはなるゝ苦しびを物とも思はざらむに、かゝる人の子とならむ人よ、いかなる憂き目にか逢ふべきなどかこちぞすらむ。
暑くるしくぬりたる白きもの、あまり黒からぬ縮れたる髮に映ひたり、年には似合はしからぬ花の簪、これは都の流行なりとぞ、さても今日を晴と卷上げたる髮に滴れるは、何の油にかあらむ、鳥なき里の蝙蝠傘はあせたる綠の地色に草花のはで／＼しきをぬひとりたり、嫁ぎの折のねだり物にやあらむ、房つけたる帶揚げの端ふさ／＼とおしたれ、透綾の衣の袖、これ見よとか絶えず回はし振るよ、さてもそのもたる絹糸の嚢の中には何物か潛むらむ、知らず佛か、そも／＼また鬼か。
茲にわれ等はひそかに議りて、尊號奉らむと誰な

りしかの云出したる村夫人と稱へいはむといふ、あまりに新熟語ならずやといふに、村夫子といふこともあればその對語にとて爭ひもやみにしなりけり稻毛にて去ぬ、海氣館あたりいかなる祟がおこらむと恐し、さるにても一滊車おくれし三浦の君は、かねてこの災をや知り居られけむと、俄に羨しうなりぬるもをかし。



二本榧

枝を連ねて生たてる榧の二本、塵のうき世の外にたちて、風はふくとも雨はふるとも、その二葉を合せなむか、いかに強き手力男も、打破りえぬが如く、二本ならびたゝば、いかに烈しき雨風の力も何條ことかあらむと、其陰立、ならす人々の、常に談ふ事なりき。幾年か早う生出し一本は、まことに然くさかえて、何の災もなくて久方の空蔽ふまでになりにけり、さるを園の中より分たれて、異庭に移されし一本よ、いかなる障かありけむ、枝葉の茂もとの如くならぬを、いたく口をしきことに思ひわづらふなる。

朝な夕な清き渚に打よする波の如く、いつも〳〵新

しき濁なき雨にあはゞ、自からその養ひとなりて、本の如くいや増にさかえなむと、數多の年を安房國なる鏡の浦に移されしを、去年の春もとの庭に復りて事なくて、一夏一秋を過ぎこの冬は暖かなる山懷になどいひおきてたりしを、世は鮮き風雨にとざゝれて思ふに任せざりき、梅雨の頃より暑さ烈しく、火焔の中にあるが如くなりしに、つゝがありとて俄に小田原の濱邊もとめて、今日の今頃しも汽車にてものせられむとぞ、小田原なる山祇海神の靈よ、希くはこのたゞ二本の一本なる若き梛をしも、わが子わが孫神かしづかむやうに、淸き暖き息徐にふきかけ生したゝしめ、もとつ園なる一本の梛の樹と榮えを爭はしめ給へ、それしもなほ得ずとならば、永久に今よりもあしうなし給ひそなど、繰返し〱思へば、汽車の中物靜かに八街わたり軋りゆく車の音のみぞ耳にひゞく。

江月樓

松林、萩生など、木草のよきほどに植られたる庭を

見こして、漕々と夜晝をわかたぬ、大刀根の河、帆船棹舟の上り下り、川口に起伏す岩も碎とよせかへる波濤さては、川をちなる常陸の波崎、自らこれ畫、人もし他所より眺なむには我ら亦畫の中の人なるべし海の上の涼しさを集めて、河の水に潮けを洗ひ、淸めに淸めて惜しげもなく、樓上に運ぶ風の心地よさ、稲田ふきしもなほこゝのには劣れりけり、まして都の眞晝時よいかならむ、納れむ嚢と送らむ車にてもあらば殘れる友にわかたましをなどいひあふ。

浴をへて坐に復れば、江に釣し鱸の洗ひ、鰕のふらい氷よりつめたく冷えたる麥酒、四時間半の滊車の疲勞いづこにか去りて跡なし。

佐倉わたりより、今幾つ停車場あらば銚子ぞ、今何時間たゝばと、頻りに問はれし文綱の君、膝を枕にしての夢よりさめ、飯岡猿田わたりにては、やゝ飽の色を面に見せて、母君こまらせられし綱子の君も、まづ來ませり、兄君に迎へられ、俄に勇ましうけなげになり、列よく並びて、箸とり給へり。

藤島夫人來ませり、三浦の君遂に來まさゞりき。

家庭舞踏

家庭舞踏の由來

中川愛氷

一家力を協せてよく働き、心を同うしてよく樂む、人生の快事これに如くものはない、然るに世の中には僞善の事多く、表面を飾ることにのみ汲々として、愚にもつかぬことに世間を憚り、家庭を砂を嚙む如き無趣味のものとし、子は親の苦虫をつぶせる顏によつて、養育さるゝといふ如き不自然のことを敢てするが、百家庭中の九十九と見て差支ない、家庭改良に就ては、先づいづれに着眼すべきか。

よく樂む家庭でなければ、決してよく働いて居らぬもので、よく働ける家庭には、何うしてもそれに酬ゆる樂みがなければならぬ、而して家庭は老若男女によつて組織さるゝ如く、家庭の樂みも老若男女共通のものでなければならぬ、茲に於て予は家庭に老若男女の共に樂しまるべき舞踏を推薦しやうと思ふ、單に舞踏と云へば、バタ臭いあれか抔と早合點する人もあらんが、決して左樣なものではない。
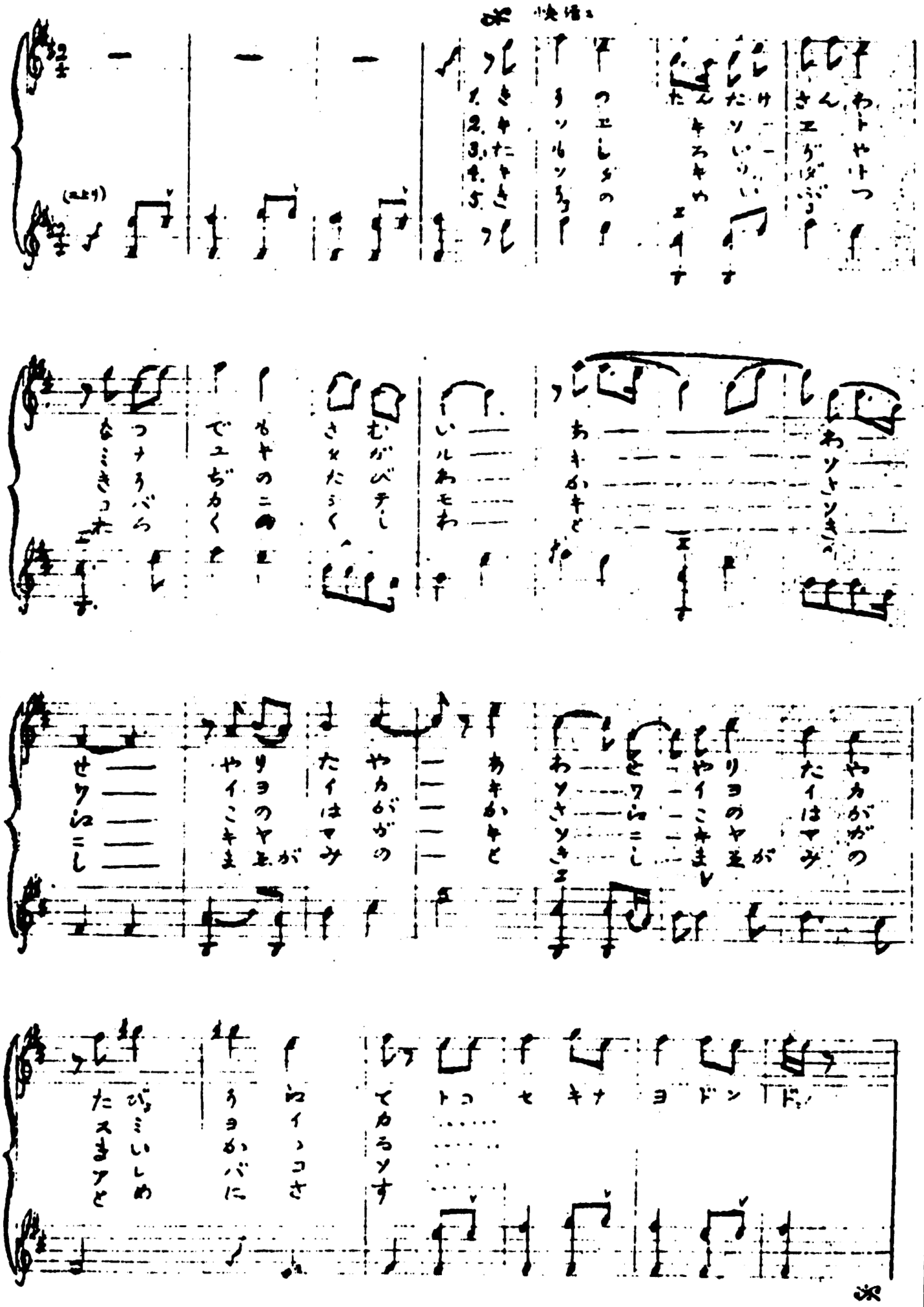
こゝに家庭舞踏と稱するものゝ由來を記さんに、今年の四月十九日、向島に於て美音會有志の花見があつた、その花見の餘興に仕組まれた惣踊が、家庭の娯樂として、最も面白き遊戲であるといふ評判をとつて、爾來上流の家庭にも歡迎せらるゝことになつた、さてこの惣踊の起りは、田中博士、和田垣博士、福島行信氏、その他所謂美音會有志の人々が會合して、この春は趣味のある花見を催さうではないか、と云ふのでその趣向の一としては、花見幕打廻らし、昔風に竹筒割籠持參で、各所に宴席を設け、其間に徘徊演藝などあ

りて、歡興湧く時、飛入隨意の惣踊を演らう、その惣踊は品のよき、而して野趣ある盆踊の如きものにて、尤も手振の容易にして嫌味のなきものを撰ばう、そこで田中博士が大漁船といふ房總邊の踊を紹介する、和田垣博士は木曾節といふのを推薦する、その外津の國、秋の野、松山音頭などいふ數番の踊が紹介された、いづれも盆踊風の廻り踊で、多少在來の樂譜と手振とに朱を加へて、その幾番かゞ美音會の有志によつて、右花見の席に演じられたのである、爾來美音會に聯絡して、美音倶樂部といふものが創つた、この倶樂部に於ては各種の歌舞音曲の研究部會があつて、惣踊もその一部となつた、然るに惣踊は稱呼が野鄙など云ふ所より國風舞踏と改稱され、更に幾番かの國風舞踏が出來た、その中には元祿踊と稱する花柳的淫靡なのもあり豐年踊と稱する乞食的野鄙なのもある、されどそは比較研究に、資する爲で、悉く家庭に出品して差支なきものゝみでなく、隨つてそれ等二三の舞踏は倶樂部限りの研究に止めて置くので、こゝに家庭舞踏と稱するは、その中に就て、如何なる家庭に採用さるゝも、いさゝか不都合なきものゝみを撰んだのである。

農人は豐年を祝し、漁人は大漁を祝す、喜び窮まつて舞踏する如きは、もとより當然の事にて、人としてそれ程の樂みは必ずほしきものである、然るに正々堂々と舞踏せず、燈影暗き所、たゞ若き男女の異態變裝して、醜事を演ずる媒介となすもの多きを以て、東京に於ても、佃島などにては未だ盆踊の殘れるも、風俗の上より警官に制止せられて僅に隱れて樂むに過ぎぬのである、世の中に隱れて樂むなど云ふ不條理なことはない筈であるから、天下晴れて心のまゝに樂まるゝほどに、樂みといふことも正しからねばならぬ。

予の云ふ家庭舞踏は、純日本式舞踏で、上品にして野趣ある、即ち上中下いづれの階級を通じての家庭に於ても、老若男女共に樂まるゝ舞踏である、されど申分のある、缺點の多い家庭にては、到底この舞踏を迎入れる事は出來ぬ、貧富は問はず、立派な家庭でなければ、決して團欒舞踏し得らるゝ筈がないから。

木曾ぶし



家庭舞踏に就ての所感

伯爵　柳原義光

從來日本の家庭ほど平凡で、無趣味なものはない、されど家族打寄つて賑やかに運動遊戲をするといふやうなことはない、たま〳〵一月に歌骨牌を取るといふ遊びがあつても、多くは若い人のみの樂みになり、老人は漸く讀役に廻る位で、この團欒の中には加はらぬのである、此の如き有樣であつて、室内に於て家族打集ひ、品よく遊び興ずるといふことは、まづ絶無というてよい。

尤も日本人は性情をためる慣習があつて、喜怒色にあらはさず、などいふことを口にして、手の舞ひ足の踏む所を知らずといふ極度の喜びがあつても、それを表情することを知らない、自然舞踏する場合が少い所以である。

昔はいざ知らず、風俗の上からいつても、家庭親睦の上からいつても、賑やかな家庭的運動が必要である、然る所に今年の春、田中博士、和田垣博士その他の諸氏によつて、惣踊りといふものが始まつたのは、如上の要求を充たされたものであつて、甚愉快に感じて居る、その惣踊りたるや、まことに無邪氣で、統一したる手ぶりで、然も厭氣を催す如き身ぶりは少しもない、この惣踊りは後に國風舞踏と改稱し、更に茲に家庭舞踏として、その樂譜その手振等を詳述し、江湖の家庭に推薦することは、最も愉快のことである、去ながら世の中には往々誤解があつて、一の踊を圖まで加へて披露するとは、怪しからぬことであるなどゝ、民間で盛んに發行されて居る、彼のかつぽれや、春雨などの、おどり獨稽古の類と同一視されては困る。

この惣踊り、即ち家庭舞踏は、まづ三絃を伴うて世に出でたのであるが、舞踏そのものが主で、三絃は從

である、三絃は唯拍子をとる爲にのみ必要である、されば太皷でも、拍子木でも、張扇でも、この舞蹈の拍子をとり得らるゝのである、人さへ揃へば張扇一本でも云ひしられぬ樂しき運動が出來るのである。

よくある家庭にては、この兒どもは身体が虚弱であるから、少し踊でも習はせたらばなどゝ云ふのが始まりで、踊の師匠を賴むといふのがある、そんなのは猶更高潔な快活な舞踏を學ぶべきで、玆に家庭舞踏の雛形を世に示して、各家庭に流行せしめんとすることは、予の大に賛成する所である。

家庭舞踏の一　木曾節

木曾節推薦の理由

法學博士　和田垣謙三

音樂にも鄭聲ある如く、踊にも隨分いかゞはしいのがある、家庭に於て老若男女共に踊つて樂むといふのは、無邪氣で、而もあまり今樣に流れぬのがよい。

然るに木曾は所が所であるから、土地がまづ以て太古的、而して無邪氣的といふことに當る、木曾節はこの土地に於て發生したのであるから、何となく古風で雅味があり、その歌にその振に、少しの嫌味がない、これ等盆踊に屬するものは津々浦々にない所はないが、右の點に於て木曾を最も面白く感じた。

美音會に於て總踊の催ある由を聞いて、日本趣味のものとして、最も上乘なるものとして推薦した譯である、然るに大分賛成者があつて、總踊運動の第一期に屬されたのは甚だ愉快に感じて居る。

舞踏木曾節

木曾節は木曾及び信濃路にて行はるゝ盆踊にて、六つの手振を覺ゆれば卒業となる。

其の文句

木曾の御嶽さんは夏でも寒い、袷衣やりたや、袷衣やりたや足袋そへて、トコセ、キナヨ、ドン／＼。

木曾へ木曾へと皆行たがる、木曾は居よいか、木曾は居よいか、住よいか、トコセ、キナヨ、ドン／＼。

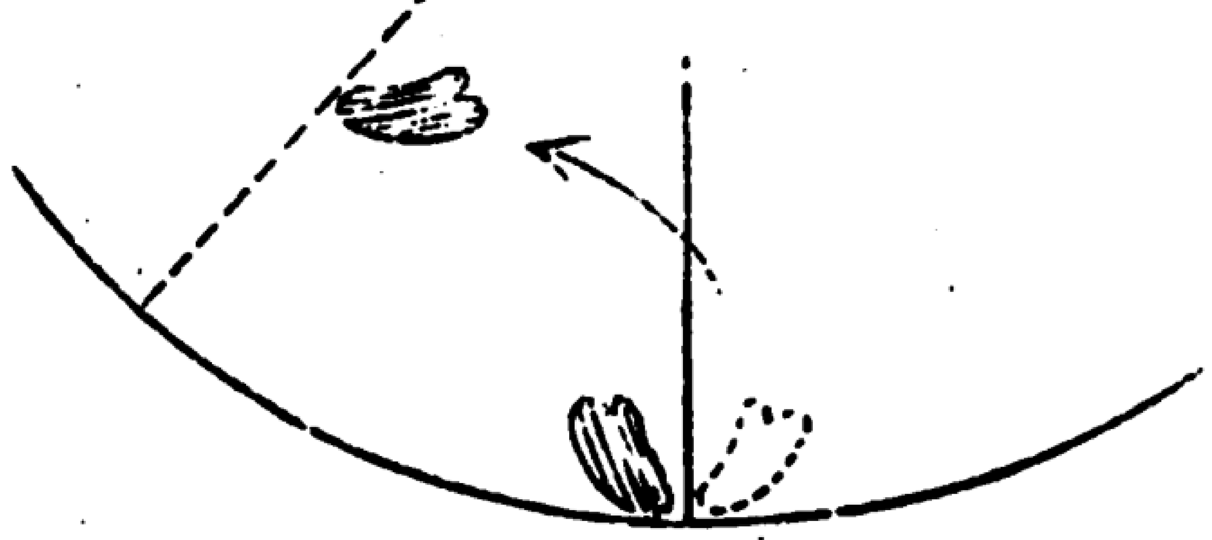
おもしろいぞや木曾路の旅は、笠へ木の葉が、笠へ木の葉が、舞ひかゝる、トコセ、キナヨ、ドン／＼。

木曾だ木曾だと小馬鹿にしても、木曾に木山が、木曾に木山が、有ばこそ、トコセ、キナヨ、ドン／＼。

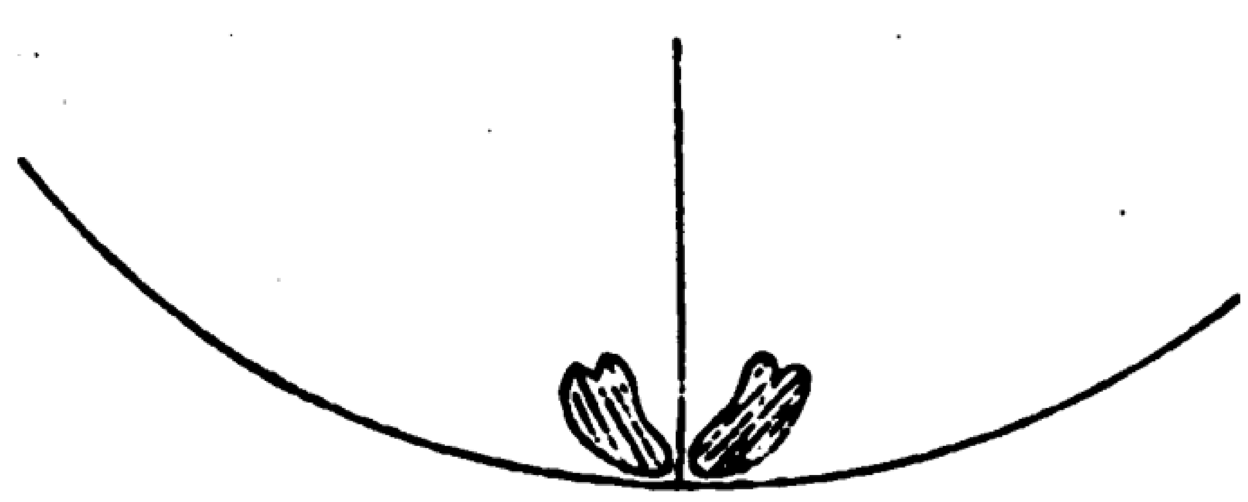
木曾の名物おろくの櫛は、梳きしまへがみの、梳きし前髪の、さめにさす、トコセ、キナヨ、ドン／＼。



◎其の一　左の手を掌を内にして、顏に並行する位置にかゞめ、同時に、右の手を體と並行して、やゝ前方に伸し、顏をその右の手先を眺むる程にふり向く、同時に右足は少しかゞみて、圖の位置に進む



この舞踏は、木曾節といへど、樂譜及び手振に少し改竄を加へたる所あれば、原作とはやゝ趣を異にすれど、その特徴を失うては居らぬ。



木曾節舞踏原位置

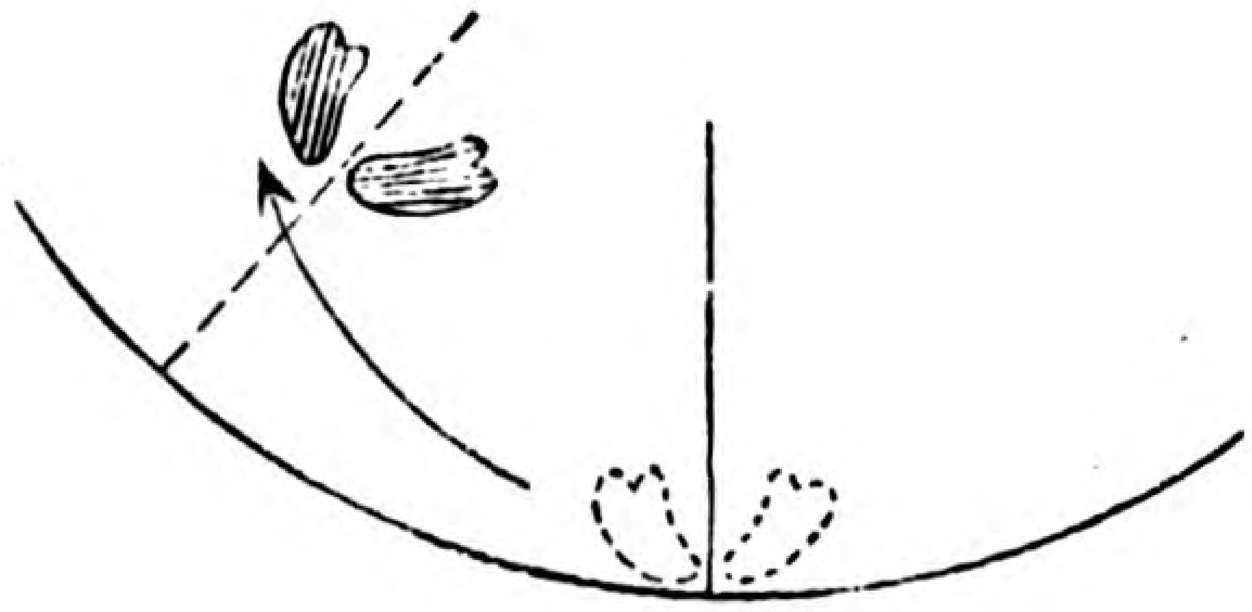
◎その二　今度は前の反對に、右の手を掌を内にして顔と並行するやうかゞめ、左手も亦體と並行してやゝ前方に少し下げて伸し、左足は右足と踵を合す

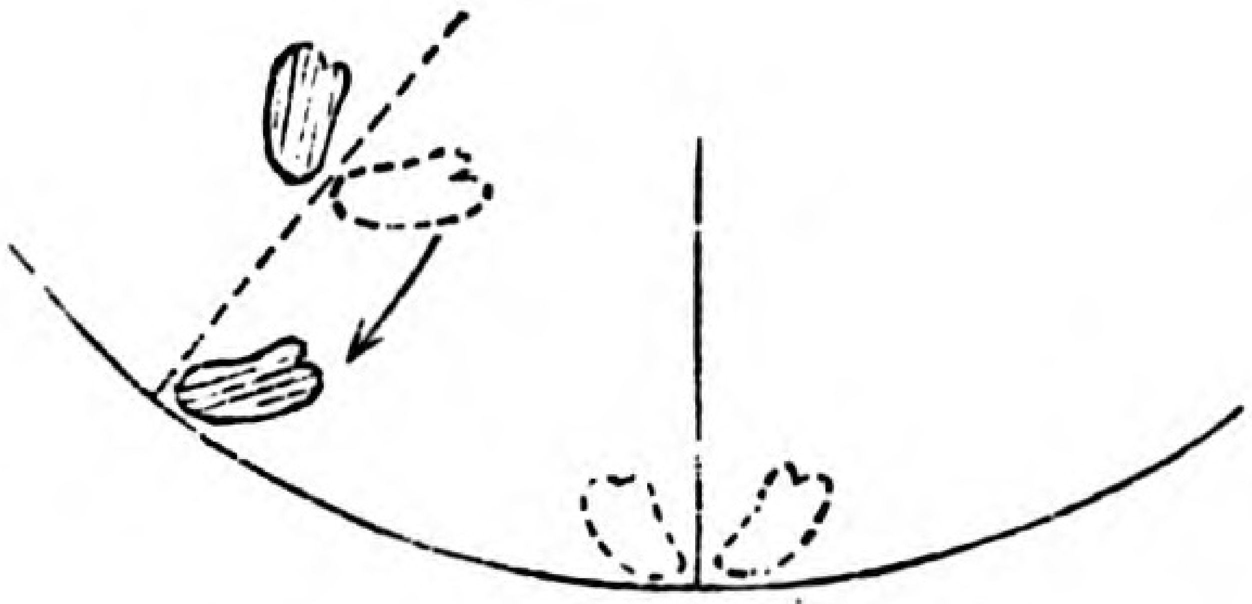


◎その三　兩手を同時に右の脇の下に向つて下げ、同時に右の足を圖の如く後に引く、



この手を引いて次の手に移る所に趣がある、





木曾節の拍子

この拍子は、一つの歌を四回に繰返して舞踏する故四段につくりたれど、手ぶりはいづれの段も同じく、たゞ四段目の終は一手少く、舞踏の五は省略す即四段目五の位置は六の手振である。

1	2	3	4	5	6
○— キソノ	○— オンタケ	○— サンハ	○— ーナツー	○— デモ	打 ○— サム
○— イー	○— ーア	○— ーー	○— ーリー	○— セー	打 ○— ーヤリ
○— タヤ	○— ーア	○— ワセ	○— ーヤリ	○— タヤ	打 ○— ーダピ
○— ソエ	○— テトコ	○— セキナ	○— ヨンド	打 ○— ドン	

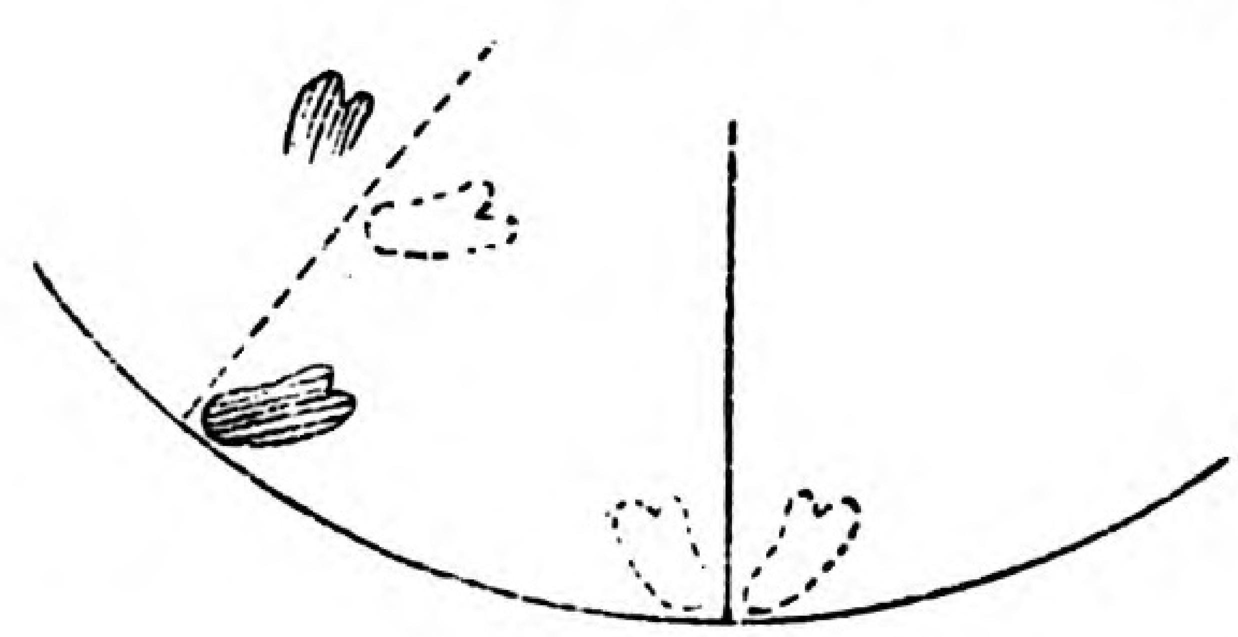
◎その四　足をもとのまゝにして、右脇に下げし兩手を輕く握りて、胸より左足の膝頭に向つて伸す、此時左足も輕く上下し、圖の如く足跡僅に地につく、

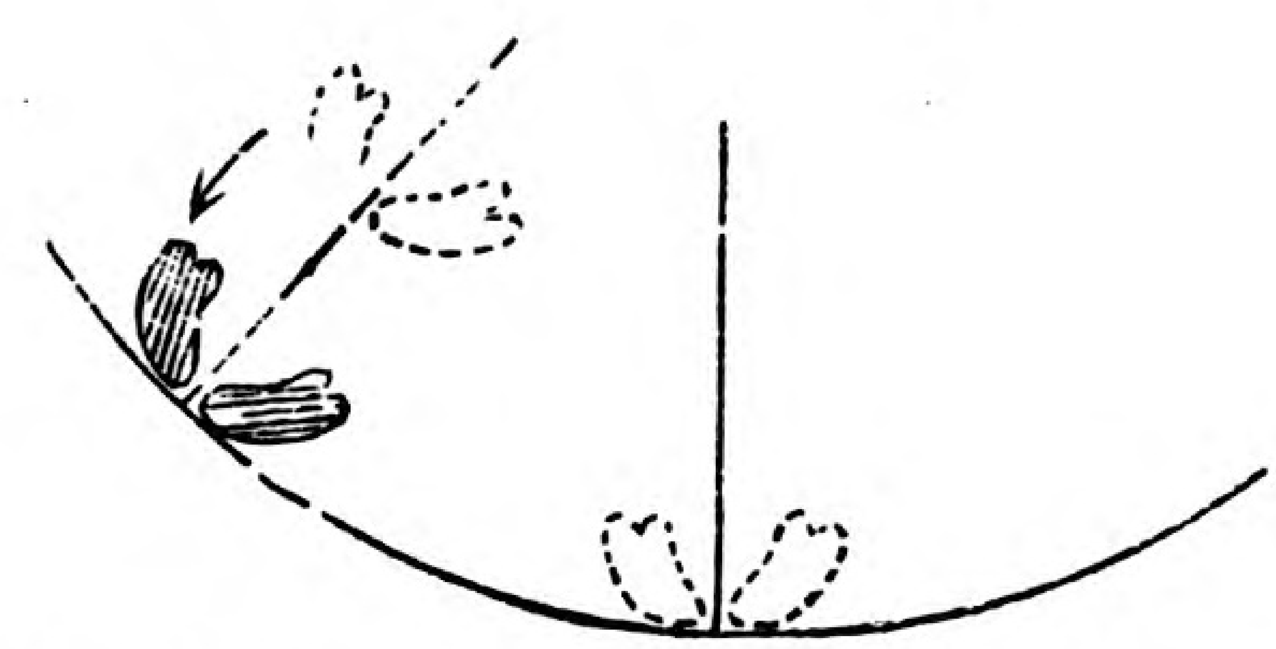
◎その五　膝頭に向つて下げたる兩手を前の如く輕く握りて、同じく膝頭に向つて下ぐる、即ち同じ手を繰返す譯である、





◎その六　左足を右足と踵を合すやう引き、同時に手を拍つ、これにて終る、





木曾節の本場にては、二十三の拍子を六つ宛四回に繰返す爲、終は一つ拍子不足となる、故に踊る時は、終の一手は初の手ぶりにかへり、歌をつゞける時は、次の歌は二手目より始まる、所謂手あたり次第ともいふべく、そこに亦趣のなきにもあらねど、歌一つ宛手を極めて行く方キマリよくもあり、亦四五の手ぶりは同じことを繰返すのなれば、その一手を省くも差支なく、美音倶樂部にては、和田垣博士は、終の一手を省くことにしたり、某所に於てその拍子を合す爲に、ドン〳〵につゞけてアバヨといふ所ある由に語られたが、アバヨも妙であるまいと思ふ、但し博士も同感である、

猶此舞踏に色々の注文をせらるゝ方もあれど、凝つては却つて思案に價はぬ。

七五三の祝着と肩掛

三越呉服店注文係主任　飯野三一

女の兒の七歳、男の兒の五歳といふ工合に、昔からこの十一月には七五三の御祝といふ事があつて、この御祝をするに方り、お兒さん達に召させらるゝ衣服の傾向は如何かといふに、これは年一年に華美になる一方で、殊に本年などは其華美といふても、單に之が色ざしばかりでは無く、遠方から見て見附きの宜いものが歡迎せらるゝのでありますから、從つて其模樣の如きも、以前と異つて少々大き目で、それも配色と能く組合せたるものが好かるゝのであつて、本年の注文は如何かといふに、まづ一般から云ひますれば、裾模樣それも光琳風のもの、即ち菊とか桐とかいふものが多いのでありますけれども、それも裾だけでは不可ない、肩の邊から掛けて總模樣のものが多く好まれて、その中には種々なるものがありますが、孰方と云へますれば、まづ光琳風の菊の模樣が一番多い、尤も地を褪紅色にして、それに白菊や黄菊などを扱しらつたものもあり、又は地を萌黄にして紅葉の老木をあひしらつたり、或は寒菊をあひしらつたものもあり、間々上の方から花桐を柳の如く垂れて、裾の方には破れ籬をしつらひ、そして其内外に亂菊をあしらつたものなども却々少なくないのでありますが、何故斯ういふ風な祝着が流行るかといふに、この祝着なるものを被せて、多くは宮參りといふ事をさせる、その時には少し遠方からでも其衣服の模樣が見えるやうにといふ心持から、斯くは少し大き目なる、さうして華美なるものが迎へらるゝものであらうと思ひます。

それから下着は如何かと云ふに、多くは緋の無地でありますが、併し地紋のあるもの、即ち紋縮緬とか、又は紋綸子とかいふものであります、從來は三枚襲ねと云つたものでありますが、近年は此下着は多く二枚しか用ゐないやうになりましたと云ふものは、ツマリ小兒の身体の小さいのに、澤山衣服を被

せては窮屈でもあり、又可愛想でもあるといふやうな事から、斯くは二枚になつたのではあるまいかと考へるのであります。

次に帯は如何といふに、錦地や繻珍の類で、それも成るべく金の這入つたものでありますが、色さしは金に草色といふやうな工合に、すべて衣服と照映の好いといふ見立てからして、如何しても白地が多い、之には金と白とで模様を出す位のものでありますが、鹽瀬の帯となりますと、地に菊や紅葉や桐などを染めて、それに繡を施したものが好かれますが、同じ鹽瀬でも、これに古代の有職風のものを繡つたものも喜ばれます。

扱帯は欝金が最も多く本年は流行するもので地質は紋縮緬に、先端へ薄などを顯はしたものや、又は其他の模様を兩端へ出したものや、その他金銀の箔を置いたものを注文せらるゝ向もあります。

以上は極上等の部に屬する、女のお兒さんの祝着に就てのお咄でありますが、是より下りましては友禪などが最も多いので、その友禪も光琳風の模様が多い、それに繡を施したるものも喜ばれますが、點數から云ひますれ



光琳式明治模様長襦袢

圖題　錦の秋

褪紅色地に、紅葉を緑、白、茶、朱鷺色などに染出し、菊を紅白に置き、水に銀の筋がきを入れたり。

ば、金糸入の友禪が首位を占て居ります。
次は縞物でありますが、之は單に祝着といふよりは、寧ろ實用向を兼ての御注文でありますから、別段取立てお咄する程の事も御座いません、是までは重に七歳の女のお子さんの祝着に就て、お話したのでありますが、

五歳の男のお子さん

の祝着の事を述べて見ますれば、地質は多く羽二重でありまして、衣服の方は熨斗目と紋附で、その華美にするものは熨斗目で、翁格子にするとか、又は眞中を鍔などの武器好みにすると致しますけれども、その他は腰に光琳風のものを染出したものを好まるゝが、



光琳式明治模樣長襦袢
圖題　花籠

淡白茶地に、籠を紺、茶、鼠にて染出し、籠に盛れる四季の花は、淡白なる配色にて、乾山の筆情の面影をうつしたるもの

色合は大人と異つて衣服の方は空色か紫紺、羽織は黒といふ風に一致して居つて袴は多く仙臺平を用ゐられます、が、縞目の粗いものや、又は格子縞の交つたもので無ければ向かないのであります。
帶は矢張り女のお子さんと同樣に、衣服と照映の宜いものを撰ばれ、地質は金襴、繻珍、つゞれ縮緬といふやうな物を用ゐられますが、まづ一般には博多が多いので御座います。

日一日と秋風が身に泌むやうになりましたに就ては、今年は如何なるショールが流行するかといふに昨年までは短冊形、蛤形、山形、羽衣形などでありましたが、その中短冊形は全く廢れて、今年は濃御納戸、または鶉縮緬地に縫取模樣をしたのが、新たに流行して來ましたが、これは最も秋口に適當なショールかと存じます、昨年まで冬ショールの地としては、先づブラシが九分でありましたが、今年の全盛は繻子羽二重地の三笠ショールであらうと思ひます、この形は繻子羽二重の地にて、三段に大きく襞を取りて、其間を横に細かく又襞を取つたもので、盛裝の貴婦人方には最も映りの宜い品で、之に次ぐものは同じ繻子羽二重地で花形ショールで、之は繻子地てまはりのみに襞を取りて、中身は色糸や又は共糸で、花模樣或は其他色々のハイカラ模樣の縫取りを致したもので、手當りがよく、形も變つて居て慥かに今年流行品の一つであらうと存じます。

併し以上は重に舊形でありますが、今年の流行で

ブラシ製の雁金型といふのがあります、之は中はブラシで、內緣に繻子羽二重の襞を取りて、外緣は横糸拔の織模樣にしたる奇拔なる柄で御座います、今一つブラシ製で、今年流行の兆を示して居るのは、內緣に極柔らかな兎又は狸の毛などを扱らつたもので、之は昨年少し流行しかけて、今年はます／＼流行の傾向を持つて居ります。

濃茶、鼠、御納戸、白、赤および黑などいふ色は大抵毎年ある程度までは流行する色で、今年も相變らず續いて喜ばれるやうであります、併しこゝに一つ昨年ついに現れずして、今年特に現はれました色合は何かといふに、鼠色から變化して來た消炭色、又は藤色から變化して來た消炭色などでありましてこれらは質素にも見え、又は華美にも見えまして、極めて上品な色合で御座います。

村役場

チエホフ作

夏葉女史譯

正午の頃で在た。大地主のワルヂイリヨフと云ふ脊の高い、髪を短く刈込んで、眼の剝出た、でッぷりした一人の男。村役場の前に立つて、外套を脱ぎ、些と絹の手巾で鼻を拭いて、畏まつた形で、旋で其の役場の内に入つて行く。其處にはすッ〳〵とペンの音が切にしてゐる。

『何處で取調を願ふ事が出來ませうか？』と、彼の男は、今しも役場のズツト奥の方から、コツプを並べた臺を持ち來つた受付の男に向つてさう云つた。

『あ、私は此方で、少々取調を願ひたい事が有るので。其の、雜誌條例の寫しが取りたいのですがな。』

『彼方へお出下さい！　あのそれ、彼處の窓の側に居ります人の許に。』

と、受付は臺で一番端の窓を指す。

ワルヂイリヨフは咳拂ひをして、窓の方に向つた。見れば其處には、綠色の布に痘痕のやうに汚點の附いたデスクが有る。其に向つて、頭に毛の四本計り突立つてゐる、長い尖つた鼻の、色の褪めた官服を着てゐる若い男が、大きい鼻で紙を突かぬ計りになつて、書物をしてゐるので有つた。右の鼻の孔の傍を一匹の蠅が舞つてゐるので彼は切りなしに下唇を突出しては鼻の下を吹く。で、顏が自然顰蹙られてゐた。

『えゝ如何でせう、私は此處で……此方で少々自分の事務に付いて、取調を致して頂きたいのですが？』と、ワルヂイリヨフは役人に向つて云ふた。『私はワルヂイリヨフと申します者で、而して序に三月二日附の雜誌條例の謄本も取りたいので……』

役人は更に答はなく、ペンをインキ壺につと差入れたが、浸し過ぎはせぬか、如何かと、些と氣遣ひながら見て、さて又、大丈夫と認めたと云ふ風で、すッ〳〵と書き初める。で、其唇は猶且突出してゐる。

然しもう吹く必用はないので、蠅は其時には耳の上に止つてゐたのであるから。

『え〻此方で取調を致します事が出來ませうか？私はワルヂイリヨフと申します、地主です……』

ワルヂイリヨフは一分程經て又云ふた。

『イワン、アレキセエヰチ！』と役人は全然ワルヂイリヨフを認めぬもの〆やうに、在らぬ方に向つて叫んで云ふ。『商人のヤリコフが來たらばね、警察で届書の謄本へ證明を取るやうに云つて呉れ給へ、もう百度や千度さう云つたのぢやないのだけれど。』

『え〻もし、あ、私はグ〻リン公爵夫人の後繼者等に對する、其の、手前の其の、訴訟に關はることで……此の事件はもう著いことでして、是非何卒、貴方に其の、私の用務を取扱つて頂きたいので御座いますが………』

と、ワルヂイリヨフは又も繰返す。

愡ても役人は未だワルヂイリヨフには氣の注かぬもの〻やうに、唇の上で蠅を捉へる、而して其れを

凝と視て投棄てた。ワルヂイリヨフは詮方なさに咳拂して、格子の手巾を取出しさま、聞えよがしの音させて鼻を拭む。其れでも役人は未だ平氣。ワルヂイリヨフは二分間計り默つてゐたが、旋て隱から壹圓紙幣を取出し、そッと其れを役人の前の開いてある帳簿の上に載せたのである。役人は額を顰める。首を傾ける、而して手早く帳簿を引寄せて、ぱッと其れを閉ぢて了ふ。

『え〻些の取調なのですが、唯其の、私の知りたいのは、何を根據としてグ〻リン公爵夫人の後繼者等が……もし、如何で御座いませう、貴方にお願ひ申すことが出來ませうかな？』

其時役人は何やら思案しつ〻、行成立上つた。臂を掻きながら戸棚の方に向つて行くかと思へば、間もなく又自分のデスクの前に戻つて來て、更に又帳簿を引寄せるのであつた。

と、帳簿の上には何時しか又も一枚の壹圓紙幣。

『私はた〻本の暫時、貴方に願へば宜しいのですが、

たゞ些の取調計りで、本の……』
役人は未だ聞付ぬ。而して何やら寫物を初めるのであつた。ワルチイリヨフは根氣も盡きて、顔を顰たまゝ、取付く島もなく、すツ〳〵とペンを走らしてゐる彼方、此方の人達を見廻した。



『皆書いてゐるなあ』
と、彼は殘念さうに溜息を吐きながら口の中
『皆書いてゐやがるわ、此の畜生奴等！』
彼は机の傍から離れて、困つたらしく兩手を下げ、室の眞中につくねんとしてゐた。と、丁度受付の男か又コップを並べた臺を持て、其處を通り過ぎるので有つたが、ワルチイリヨフの困り極つた顔をそれと認めてか、近く身を寄せて窃と尋ねた。
『如何なさいました、取調はもう御濟で？』
『いゝや、取調を賴んでゐるのですが如何いふ譯か役人は私に口も聞かんのでね。』
『それぢや貴方、彼の役人に三圓もお遣りなさい……』
と、受付は小聲で。
『もう遣るには二圓遣つたのだがね。』

『もう少しお乘勢なさい。』
ワルヂイリヨフは再びデスクの側に寄つて、又も開いてある帳簿の上に、綠色の紙幣(三圓紙幣)を置いたのである。
役人は何氣なく、礑と帳簿を閉ぢて了たが、旋て又一枚々々に開いては見るのであつた。恁くて彼は俄に眼を上げる、而して鼻の先を光らして、莞爾してワルヂイリヨフを見たのである。
『あゝ貴方……那云ふ御用でお出なのですか?』と、役人は頗る叮嚀な語調で、大地主に向つて言掛けた。
『少々手前のある事件に付きまして取調を願ひたいのです……私はワルヂイリヨフと申します。』
『はッ、宜しう御座います！　えゝグ、リンの事件に付きましてで御座いますか?　御尤な事で御座います。それで貴方は一體如何なさるのをお望みなので?』
乃でワルヂイリヨフは其の願意を述べ立てた。

役人は全で別人に生れ變つた樣。大地主の爲に取調を爲て遣るのみならず、謄本を書くやうに命じて呉れる、椅子を與へる、何も恁も皆即時に用を便じて呉れるので有つた。其上天氣の挨拶やら、農作物のことまでも問ひ、歸る時には階段の下にまで叮嚀に見送つて、にこ〳〵と如才なく、何處までも願人を尊敬して、其前には平伏しても差支は無いやうな樣子。ワルヂイリヨフは何やら却つて極が惡くなり、或る一種の勢に驅られて、つひ隱から又々壹圓紙幣を取出し、其れを役人に與へたのである。役人は頭を下げる、微笑する、而して手品師のやうに、紙幣を唯僅に、一瞬間、空中に瞥見せた計りで有つた。
『ふゝむ、人間……』と、大地主は街に出てさう思ひながら立止り、手巾で額の汗を拭くのである。(完)



自然の教訓

幹子女史

口へこそは、さても心にては思ふまゝ大谷川の水にて涙洗はん覺悟にて出でたち候旅にて候ひしが、姉上、一夜日光に假寢の夢を結びて候ひしより、今はかゝる文かく身と相成候ひしこそ、深き自然の惠みとやは申し候べきか、と申せばとて姉上には早速の御承知もなるまじき事ながら、初めて知りし蹉跌と飛躍、幹が涙、涙と申せども畢竟ずれば卑怯と無知の形見にて候ひし。

きのふ朝疾く含滿が淵へ參り候、含滿とは御存じの巖と水、常ならば紺瑠璃に綠沈めし淵にはあれど、折しも嵐のあした、濁水滿々と漲りて、汚れし羊毛の樣に無數の渦紋を浮かべては、巖を動けとばかり激流となつて流るゝにて候ひき、滑かなる鉄の如き巖頭にわらはの跪き候時、思はずも五體戰慄して、滔々の音轟々の響は耳にあれど、ぢつと見入り候水底に奇しき力のひそむとも覺えて、破止とばかり砕くる水の、白沫を飛ばして急湍となり、奔流となり、急流なるのみか、夢の樣に眼底にのこり候、空は未だ暗膽として、兩涯の綠、打沈みて深綠なり、姉上あゝ今に何の戰慄とは申し候はねど、瞑ぢし眼よりは熱涙の只ハラ〳〵と溢れて、思はず肌寒きを覺え候、おゝ清き自然は一點汚れ果てにしこの涙の交らふを許すまじくも見えて、流れは一層聲高く、急ぎに急ぎ、巖を越え、岩を飛ばし、狂へる如くにも流れ行き候よ、あゝ流れ行き候よ、片時も瞬時も止まず止まらず、嗚呼、姉上、もしおはせば狂ひたりとや思召させ玉ひはむ、巖の上にわらははまこと深かき悶えを覺え候よ、苦みしとて人生の蹉跌、遂に行かねばならぬ、人生の旅路を、蹉き倒れ傷き伏して、それにても遂には行かねばならぬものを、あゝこの激流よ、奔湍よ、狂へるにもあらず、急げるにもあらず、汝れはなすべき道に向はんが爲、しかくは巖に砕け、岸を嚙みさてこそ流れも行くかや、さるに

さるに心弱きこの幹は、徒らに、あゝ、たゆたひてたゆみて巖頭に汚れし涙を灌ぎつるや、
かくまで悔ひを覺え候こと今迄にありとも覺えず候、靜かに〳〵わが心に深かき私語の覺えてふらりと立ち上り候へば、友は遙かに彼方の巖を攀ち、泡だつ流れに向かひて靜かに〳〵優さしきテニソンがMan may Come mem meiy go を歌ひ申候、あゝ、姉上、御情溢れし御教訓の今更嬉しく、さもあらばあれ、たゞ永遠にたゞひた行きに進み候はんのみ、御心安う思召させ玉へかし、かしこ

夢

蘆風

姉上凧を買ひてたべ
となりの友も買ひたるに
かしこの店の美しき
繪凧を我に買ひてたべ

姉ははじめは否みしも
終にやさしくほゝゑみて
いたづらなせそ今日よりは
さらば弟よかひやらむ

家をたちいでいそ〳〵と
おくるゝ姉をうながして
勇みゆきしと思ひしが
夢はたちまち破れけり

さすれば寒き床の上に
病みてふしたる我身なり
やせたる頬のぬれたるは
夢にて我は泣きにしか

はかなき事をよろこびて
外にうれひも知らざりし
をさなき時を夢見つゝ
まことに我は泣きしなり



東京帝國大學講師 佐々木信綱先生選

古寺霜

天

相模横須賀中里三一四　藤原下枝子

荒寺や留守居の翁朝月に葱ひく畠の霜白きかな

（評）野趣あるを以て採る。

地

岩代國伊達郡小手川村　岸野せい子

蜘蛛の巣にかゝれる木の葉ゆらぐ見えておく霜さむし古寺の庭

（評）結句にのみ古寺あれば、題の意やゝうすきやうなれど、荒れたる寺のおもふき、よく寫し出されたるをもて選びいでぬ。



人

埼玉縣川越町　横田やな子

山寺のあか井のもとのしきみ原朝しもわけて行人やたれ

（評）二三句、けしき見ゐやう也。

秀逸

千葉　吉松亀子

◎巡禮の親子憩へる古寺に小鳥むれゐる霜白き朝

河内　竹内久子

◎山門をさゝせるまゝに冬の來てけさめづらしき庭の初霜

伯耆　錦織さち子

◎ものふりし御堂の軒の枯しのぶくち目〳〵にしもをかざして

岩代　岸野つれ子

◎古寺や霜さけかゝる日あたりに物食みてゐぬ猿の子のむれ

◎

たふれたる卒塔婆の上に霜さえて
やれ寺すごき冬の月かな　東京　平塚いさ子

◎

有明の月の光もうすらぎて
霜おき渡す古寺の庭　神戸　宇野夏惠子

◎

村がらすねぐらまだ出ぬあかつきに
おくしもしろし古てらの庭　美濃　傍島みゆき子

◎

月さえて置く霜白き古寺の
うしろの峯にむささびのなく　品川　繁子

◎

阿閼くむさ氷わる夜の霜寒み
ましらなくなり峰の古寺　岩代　岸野常子

◎

枯れたてるいてふに高き月ふけて
おく霜さむし古寺の庭　岩代　岸野なか子

◎

夜を寒みさけぶましらの聲すなり
峰の古寺霜やおくらん　岩代　岸野登代子

◎

鐘の音も遠く聞えてしもふかき
寺田の畔にさゆる月かな　茨城　脇坂須磨子

◎

霜こほる野寺の道のしもさ原
ふた聲三聲きつれなくなり　埼玉　横田秋子

◎

山寺にかりねをすれば破れまもろ
霜夜の風にゆめも冷めたき　臺灣　浮洲德子

◎

朝きよめする人もなきふる寺の
落葉にしろしけさの初しも　名古屋　土屋たま枝

◎

狐なくこゑものすごき古寺に
おく霜しろく月は冴にき　須磨　有村栄芳子

◎

鐘の音に峯の嵐も吹き止みて
おく霜白き古寺の庭　東京　紀・藤榮子

◎

佛はあらず御堂の軒は朽ちはてゝ
月もる床に霜ぞおきける　東京　佐々木かず子

◎

古寺の廏の草葉に霜おきて
ふむ影さむき朝ぼらけかな　上野　小野里鶴子

◎

倒れたる奥津城ごころ霜おきて
あした寒けく山鳩のなく　在清國　福田つる子

◎傾むきし鐘樓くだる雛僧の
いきさむげなる霜の朝かな　東京　牧千春子

◎きのふみし尾花がそでもやれはてゝ
霜こそさゆれふるてらの庭　新潟　岩本芳子

◎山かつがたき火のあさかもえさしに
霜白う置く古寺の庭　名古屋　山根しげ子

◎のら犬のふみあらしたるあさ見えて
置くしもしろし古寺の庭　東京　高橋珍子

◎寺はあらず只殘りたる峯の鐘
霜さゆる夜をおのづから鳴る　秋田　長谷川薫子

◎小夜更けて古りし御寺のあらゝぎに
おく霜白く月ぞかゞやく　東京　倉重喜代子

◎古寺やあかくむ尼のさむげなり
南天あかし霜がれのあさ　美濃　傍島小枝子

◎ひがし山古りしてら〳〵朝めぐり
おばさふみゆく霜のほそみち　美濃　芳翠敏子

◎山深くふみにし寺の庭あれて
いくとせつかぬ鐘に置く霜　東京　岡本雪江子

◎ましらなく聲もきこえて古寺の
庭の落葉に霜ましろなる　岐阜　中西よし子

◎あかつきのかれもひゞかぬ古寺の
おくつき白う霜おきにけり　東京　津ノ浦豐子

◎おきそはる霜をたよりにひゞくかな
鐘のねさむし夜半の古寺　東京　青木たま子

甲

○冬の夜や森閑さぜる古寺の破れし芭蕉に霜うすく見ゆ　千葉　吉松龜子

○小きつれの啼く音は庫裡にしづまりて寒月白う霜おきわたる　神戸　今西操子

○旅僧の夢やいづこにさゆるらんおく霜しろし古寺の軒　神戸　山鹿菊野子

○法の師のきようよむこゑは聞ゆれどつきにさむけくしもぞおきける　横濱　鈴木まつ子

○山もんのふるすあらそふすゝめらのこゑもつめたきけさのしもかな　北海道　佐藤央子

讀者文藝

○ 東京 平塚白百合子
茶の花のかをりつめたく霜見えてやれしみ堂に殘月のさす

○ 對馬 畑島郁子
月影のいたくも凄く見ゆるかなくちし伽藍に霜のさえつゝ

○ 岐阜 傍島曉子
古寺や尼君二人庭きよめはゝ木目しろき霜のあさかな

○ 岐阜 長濱闌子
古寺に亡き母こひてまうでこし子等もあるらし霜のあしあと

○ 東京 家壽子
あれはてゝ狐すむべきふる寺のいらかましろに霜のおきたる

○ 岩代 岸野菊子
ましらなく閼伽くむ夜半の風寒み峰の古寺霜さえわたる

○ 遠江 疋田伸子
さふ人も絕えてわびしき古寺のみあかしきえて霜の花さく

○ 兵庫 梶原玉子
來て見れば其名も高き初瀬寺庭の芝生に霜ぞおきける

○ 神戸 小山波枝子
明けの鐘さえて聞ゆる古寺に雪と見るまで霜白くおく

○ 東京 西村直子
みあかしの光りは消て古てらのにはしろたへにしものはなさく

○ 遠江 中村志賀子
ふるてらはみのりの光りうすらぎて月にみがけるしものさむけき

○ 須磨 有村繁子
霜がれの梢もさむく成にけりやぶれはてたる古寺の庭

○ 同 有村さみ子
鬼も住むと云ひておの〳〵く古寺の木枯さむく霜白うおく

○ 同 有村菫子
法のこゑかすかにきこゆ古寺のかれの音さびし霜白き夜は

○ 兵庫 湖東靜子
なかば朽ち中ばかたむく古寺の庭の面ましろにおく霜さむき

○ 橫須賀 小野ゆき子
僧老いて掃除届かぬ古寺の庭の芒に置ける霜哉

○ 上野 小野里佐久眞子
澄み渡る月影見れば小夜更けて鐘の音ほそし古寺の霜

○ 東京 平塚つゆ子
きづた這ふさびらもくちて古ローマや鐘樓しろき朝の霜かな

○ 伊豫 金田春子
人もなき小寺の垣根くちはてゝふりし木の葉に霜ぞおきける

○ 東京 原三幸子
やさしくも見ゆるみてらの鬼かはらけさおくしもにうすけはひして

○ 磐城 木幡きよ子
鐘の音や見ゆる影もなき古寺の月哀れなる霜寒き朝

○ 東京 よ れ子
かたむきし古寺の軒に月さえて見るさへ寒く霜置きにけり

○ 美濃 中村たま子
夜まわりのひやうし木のおとさむき夜に霜こほるなり大寺の庭

○ 美濃 文野さかへ子
霜さむし古りしみ寺に僧たちのはなさきあかく經よみおはす

○ 美濃 西村うめ子
さくもきてたれまゐりけん朝まだきしもにあとあるてらのぬけみち

○ 美濃 傍島敏子
ふるてらの燈明の石にこぼれたる油まだひずしもさむき朝

○ 美濃 平岡かん子
かなしさの涙々のこほりても霜さなりけんふりしみ寺の

○ 岐阜 中村はな子
古寺や住む尼絕えておく霜に狐狸なく峯のいさゝも喚けき

山里や月影すみて古寺の松に霜おく有明の庭 ○ 飛驒 南 みれ子

鬼瓦天平のむかし忍ばれて朝霜白し山寺の庭 ○ 岩代 木内よし子

霜よけて培かひやれば古寺のまがきのきくも色やそふらん ○ 東京 諏訪ゆり子

初霜もこゝろや惑む古寺に法のかたりを殘す白菊 ○ 神戸 足立あさ子

乙

傾きて苔ひた生ふる鐘樓の上にしらろゝけさの霜かな ○ 東京 神田けい子

中庭の老木の松に霜見えて白衣の僧のひとり經よむ ○ 河内 竹内敬子

古寺のこけむす軒はくちはてゝ鳩がねぐらに霜ぞおきける ○ 大阪 磯 俊子

初瀬寺明けぬと告ぐるあかつきの鐘のひゞきも霜けぶるなり ○ 兵庫 梶原玉子

小夜ふけて松の木影に月さむく昔しのぶる古寺の霜 ○ 兵庫 まつゑ子

茂りにし青葉は霜に散り果てゝ破れしみ寺の屋根あらはなる ○ 京都 堤せい子

茂り合ひし木の葉の霜に散りてより一きは淋し古寺の朝 ○ 京都 堤 德子

物の怪の出るてふ村の古寺は一きははけし夜半の置霜 ○ 横須賀 高橋つれ子

みちびきの鐘もくづれし破寺のあかつき寒く匂ふはつしも ○ 大阪 木村春江子

木魚の音かつ絶えて霜のあさ抹香つめたき古寺の庭 ○ 伯耆 錦織千代子

朝寒の鉦の音細く霜高し古刹の屋根の落葉が上に ○ 伯耆 錦織よし子

あれなれど詣づる人のたえざらん霜にあさある古寺のみち ○ 松山 甦 秀子

いにしへの名士を祭る山寺の碑石の上にけさは見る霜 ○ 美濃 各務照子

その昔うなり響きく古寺の庭の蘇鐵における初霜 ○ 美濃 各務濱子

名工の繪筆の跡をとゞめたる御寺の屋振にけさは置く霜 ○ 美濃 各務不美子

森陰の御墓に祖母のたまさへば朝霜白き古寺の庭 ○ 福岡 高瀬たけ子

霜むすぶ夜半をましらのこゑすごく峰の古寺冬の月さゆ ○ 東京 平塚いさ子

み經千卷ならび讀むなる法の師の大本山のあさしもさむき ○ 岐阜 目島まさ子

訪ふものは夜半の狐よ法の水の霜さこほりし古寺の庭 ○ 下總 秋月廣江

古寺の朽にし緣に霜白う七歳少女の尼姿見ゆ ○ 北總 晶野初野子

軒かたぎ柱朽ちたる古寺に霜白うして香焚くが見ゆ ○ 下總 月沖百合枝

苔むして寺の古さも知られけり松の梢に霜ぞ殘れる ○ 兵庫 梶原玉子

○ 神戸　富士幸子
今朝見れば人里遠き古寺の枯れにし木々に霜こほるなり

○ 東京　吉岡亀子
ともしびの光りも見えぬ古寺のかはらの霜のよろはさやけき

○ 遠江　河合象子
やれかはらくつかたしろくおく霜によろはさやけき古寺のには

○ 兵庫　湖東澄子
おく霜にいとゝ寒さを覺えけり人里とほき古の御寺は

○ 兵庫　梶原玉子
朝まだき須磨の古寺來て見れば苔むす軒に霜ぞおきける

○ 東京　佐々木壽子
古寺や五百羅漢の居並べる苔むす壇に霜の花咲く

○ 福島　伊藤よし子
老僧の掃木とゝめて古寺を起さんといふ朝霜の道

○ 東京　小林春子
いにしへのおもかげもなくあれはてゝこちたうさむし霜のふるてら

○ 下野　井上尙子
苔のむす御堂の段におく霜のましろきあした山雀のなく

○ 横須賀　渡邊比佐子
ふる霜に鐘の音絶えて山寺の幾日淋しき槌の音かな

○ 名古屋　不破きみ子
墨染の袖にはつ霜おきてよりさびしさまさる古寺の道

○ 相模　服部八重子
住み馴れて都に古き山寺の鐘の音響く初霜の朝

○ 東京　中村千代子
苔むせるみ寺の屋根を白妙に染めてよそひし今朝の霜哉

○ 神奈川　飯田榮子
水洗は苔に青みて水かれぬおく霜さむき古寺の庭

○ 熊本　矢野夏子
心憂き身を霜野にさまよへば月影清く古寺ぞ見ゆ

○ 兵庫　登子
古寺のま垣に殘る白菊の霜にほこりて咲きにほひけり

○ 東京　倉重千惠子
ましらなく日枝の御山に月落ちて朝しも白し志賀の古寺

○ 美濃　渡邊ひろし子
京めぐりおばの供してまふでたるふりしみ寺やしもさむき朝

○ 岐阜　長濱ゆさみ子
二千年古りしみ寺や閑古鳥今朝こゑきかす霜こほるなり

○ 美濃　吳みせ子
おば君に古りし事々聞つゝも霜ふみめぐる京のてら〲

○ 美濃　遠山よしの子
かべは落ちたる木はくちし古寺やぬかづきさむし霜の朝や

○ 美濃　傍島眞佐子
いて瓦さしかへんとてしもの朝を工人屋根みぬ大寺の庭

○ 遠江　辻妙子
西山に月は殘れり曙におく霜寒し古寺の門

○ 兵庫　三宅久美子
世のちりをよそにわすれてわけ行かんしもふる寺の庭をたづれて

○ 兵庫　園子
つく〲と尋れも行かむ尾上寺霜ふる庭の紅葉たづれて

○ 神戸　足立ゑい子
名も高き世にふる寺の比叡の山霜夜の鐘の音ぞ冴えぬる

○ 同　神谷ひろ子
年を經しこの古寺の庭の面に霜の花のみ盛り成けり

○ 陸前　菊地さみゑ子
ふるてらにおばけと見しはそれならでしもふりかゝる佛なりけり

讀者文藝

貴族院議員 御歌所參侯 子爵入江爲守先生選

雨中落葉

天

染められし恵知りてか散る時も
　しぐれにまかす庭のもみぢ葉

東京府豊多摩郡西大久保四百四十七 原 三幸子

地

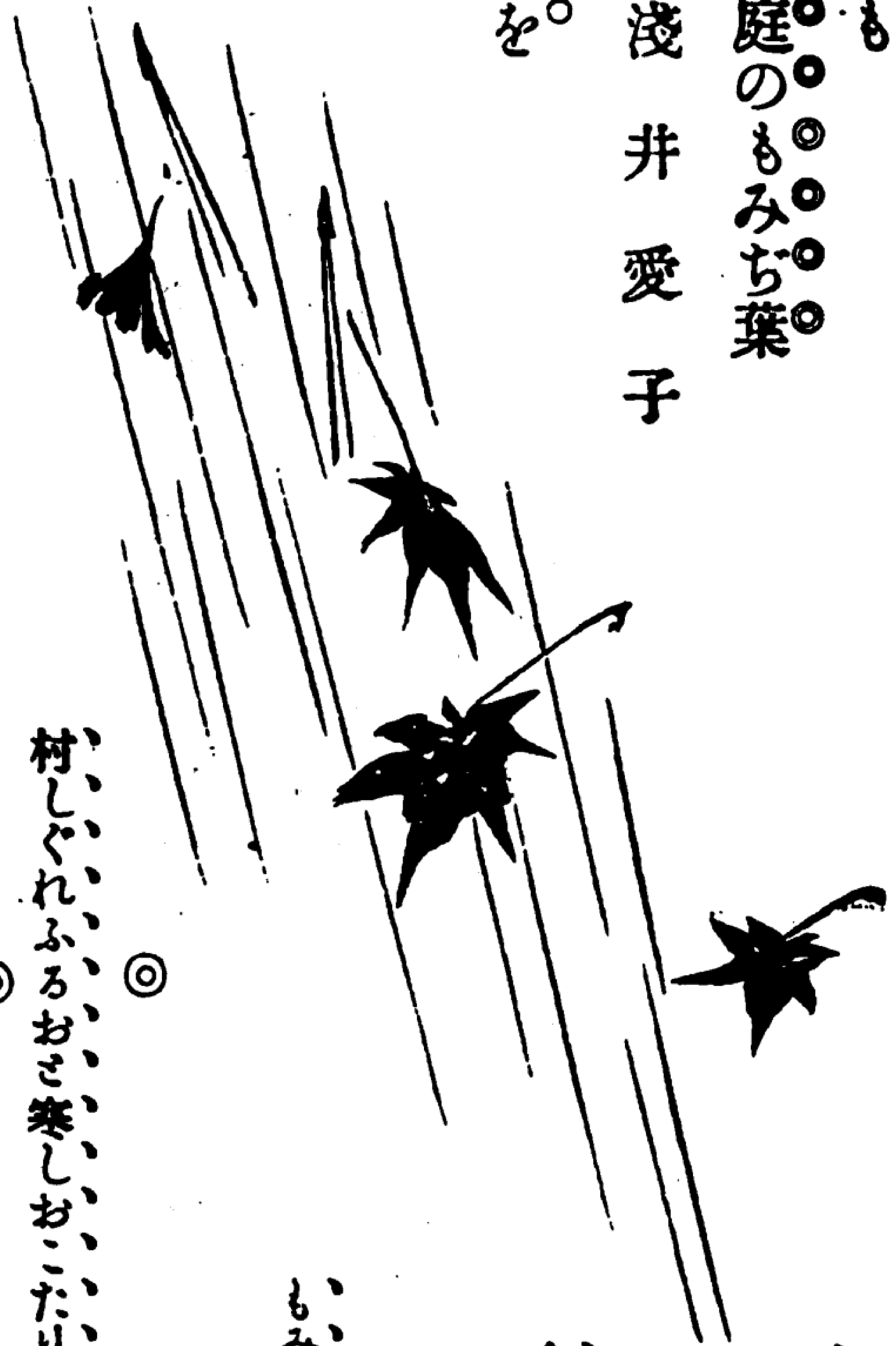
ちり殘る秋の形見のもみぢ葉を
　つれなく誘ふむら時雨かな

千葉縣千葉郡村二號官舍 淺井愛子

人

ふる雨にみだれて落る木々の葉の
　音もさびしき山陰の庵

東京芝區三田四國町二唯一館方 佐々木かず子



佳調

◎露けくもなほ晴れやらでふる雨にけさは落葉をかくよしもなし　名古屋 土屋たま枝

◎村しぐれ落葉さへもにおさたてゝいくたびゆめをおさろかすらむ　東京 吉岡龜子

◎ふくろ夜の雨にみだれて庭の面に
　おつる木の葉のおさぞさびしき　臺灣 浮洲德子

◎今朝もまた空さだめなき村雨に
　道わかぬまで散る木の葉かな　兵庫 藤田こう

◎もみぢ葉の雨にまじりてちるおさの
　よすがらさびし山かげの庵　美濃 傍島眞佐子

◎村しぐれふるおさ寒しおこたりてはらひもおかぬ庭のおちばに　美濃 西村うめ子

◎雨にきよめ色うるはしき紅葉ばのぬささちるなり神のひろ前　名古屋 山根しげ子

◎山鳩の翼もぬれて八幡山時雨さ共に散る紅葉哉　常陸 岡田萬子

◎一枝も折らでをしみし紅葉ばをさそふ時雨のうらめしき哉　東京 高橋珍子

夜もすがら落葉さそひて降雨に今朝あらたなる四方の山のは　神戸　足立ゑい子

◎

甲

○
人さらぬ園のいた戸をおさづるはしぐれにましる木のはなりけり　須磨　有村紫芳

○
山すみの淋しき賤がかくれ家を時雨まじりにさふ木の葉かな　神戸　今西白露子

○
雨にちる木の葉やうつむふるまゝにかけひの音のほそりゆくかな　東京　西村きよ子

○
神さびて玉敷庭に桐の葉のおつる夕を小雨ふるなり　東京　岡本霽江

○
時雨する木の下つゝみ行かさに木枯さむく紅葉ちるなり　須磨　有村紫子

○
古里をしのぶの軒におさづれてしぐれさもにちる木の葉哉　東京　青木たま

○
渡守しばしは舟をさゝめてよ雨の川瀬に紅葉ちれるを　對馬　古川辰子

○
落葉してねぐらに迷ふむら鳥にれたくも降りぬ黄昏の雨　神戸　足立あさ子

○
山里は木の葉にうつむこゝちしていさゝいぶせき夕ぐれのあめ　陸前　菊地さみゑ

○
何さなく淋しさそへぬ時雨ふるおちばの庭の秋の夕ぐれ　東京　よれ子

○
病む父の枕頭まもりて物思ふまどに音たてふる木の葉かな　河内　竹内敏子

○
たゆみなき時雨にまたも逢坂の關の清水にもみぢちるらん　神戸　山鹿菊野

○
男鹿なく春日の山の秋雨にもみぢかつ散る夕ぐれの空　大阪　木村春江

○
いさましきいくさ語りの雨の宵玉のこさうちぬまさのみだれ葉　伯耆　錦織千代子

○
ふる雨にかぜさへそひてはら〳〵とおつる木のはのわびしかりけり　横濱　鈴木まつ子

○
ふる雨に秋のあはれもさそはれて三つ四つ二つちる紅葉かな　東京　家藤子

○
つさにさて一枝をりし紅葉ばにつれなくかゝる村時雨かな　岩代　岸野豐子

○
昨日ちり今日ちり積るもみぢ葉に音もさびしく秋の雨降る　熊本　矢野夏子

○
猿曳の背にねぶりゆく猿の子にゆふ雨さむくもみぢ散るなり　岩代　岸野せい子

○
栗ひろふ子等は今日こずもみぢ葉のちりてさびしき雨の夕ぐれ　岐阜　彷島曉子

○
かきすてし熊手うづみて紅葉ばのちりしく庭にしぐれそぼふる　岐阜　長濱蘭子

○
時々に夜さむの風に音するはしぐれまじりに落葉するなり　兵庫　梶原玉子

○
風に降しぐれさもにおさたてゝさほりぬべくもちる木の葉かな　靜岡　河合象子

○
雨ふりてあたりさびしき我宿ののきばにしげく木のはちるなり　須磨　有村保子

○
山鳩の聲もしめりて山寺の時雨るゝ庭に散る落葉哉　東京　紀藤榮子

○　横須賀　小野あき子
永き夜の夢さめはてゝ園近く雨に落葉の音を聞く哉

○　東京　平野つゆ子
さらでだにさびしき秋の雨の夜をさりそへてうつ落葉雨かな

○　新潟　岩本芳子
小女子の汲める手桶の水の上に時雨とゝもにちるもみぢかな

○　埼玉　横田やな子
家鳩の聲もしぐれて夕山のふもとの里に木のはみだるゝ

○　東京　西村直子
木がらしに散つくしたる庭のおもの落ばのうへにあめそゝぐなり

○　岩代　岸野常子
ふる雨に峰のもみぢ葉ちりぬらんすゑまであかし谷川の水

○　東京　中村千代子
一むらのしぐれの雨にはら〳〵と散りてこぼるゝ滿紅葉哉

○　静岡　中村志賀子
まきのやに雨も木のはもおとたてゝあわたゝしくもふるさとのそら

○　福島　伊藤よし子
小夜時雨そゝぎて過ぎし槇の戸にふたゝび降るは木の葉なりけり

○　須磨　有村基子
ふるいほの時雨せぬ間も時雨してかされて落るのきの紅葉ば

○　播磨　三木郁子
桐の葉の落ちしひゞきか白露も花もこぼれぬ庭の萩むら

○　大阪　磯俊子
はだ寒き雨の夕べをおばしまにたゝずみ居れば桐の葉のちる

○　東京　佐々木壽子
音立つる時雨も知らで行く童の引く牛の背に紅葉こぼるゝ

○　下野　井上倫子
いそぎゆく旅人ひとりかさの上に紅葉かつちる雨の夕ぐれ

乙

○　東京　小林春子
きのふ見し紅葉ははやも梢吹く風にさそはれ雨とふるなり

○　磐城　木幡きよ子
木の葉散る雨に鳴子の音絶えていとも淋しきあきのやまざと

○　美濃　松田花子
夕づつの光も今はうすうして雨のみはかに落葉又する

○　横須賀　渡邊比佐子
落ちつもる木の葉を見れば時雨けり鐘の響に何を誘ふ

○　静岡　渡邊實子
さらぬだにかなしきものを降る雨に秋をわかれと桐の葉のちる

○　千葉　吉松龜子
また一つ桐の葉落つる音のして故郷戀し雨の夕暮

○　神戸　今西操子
蓑衣袖もしぐれて峯に尾の紅葉かつちる夕ぐれの空

○　兵庫　金子
秋雨に木の葉打たれて散りにけりいとも淋しき秋の夕ぐれ

○　秋田　長谷川薫
見てあれば庭の青梧一葉ちり一葉ちるなりしぐるゝゆふべ

○　東京　倉重喜代子
斧の音のかすかにひゞく我庵にまたもしぐれて紅葉ちるなり

○　東京　倉鹿千嘉子
しづの女が炭やく袖に淋しくも落葉かゝりて亦も時雨るゝ

○　美濃　吳みせ子
はきよせし落葉の山をのぼり下り雨にぬれつゝひな鳥あそぶ

○　美濃　松田時子
夜もすがら雨戸たゝけるものはなにこれや錦の紅葉なるらむ

○　美濃　傍島敏子
ちゃの葉のちりてこぼるゝ廣庭にをり〳〵そゝぐむら時雨かな
○　美濃　平岡かん子
入相の鐘にみだれて木の葉ちり雨しさゝふる山のしたいほ
○　美濃　傍島小枝子
もみぢ葉のちりかゝりたるくもの巣のやれたる軒にしぐれふりきぬ
○　岐阜　芳澤敏子
さすらひのわれにつれなく日はくれて落葉の道を雨にぬれゆく
○　横須賀　藤原下枝
たそがれの雨にさそはれ淋しげに落つる木の葉に物思ふかな
○　名古屋　不破きみ子
ふきまよふ雲のあらしにさそはれて時雨さゝもにふる木の葉かな
○　美濃　松田君子
世の中の波のたちゐもうち忘れしばしながめん雨の落葉を
○　相摸　服部八重子
あはれにも絶えず音する山しぐれ紅葉に誘ふ夕嵐かな
○　岐阜　中西よし子
雨寂しみ山にちかく伯母の凥住ます庵に紅葉ちるなり
○　岐阜　中村はな子
ふる雨に鐘の音おもき夕まぐれ紅葉ちるなり山寺の庭
○　東京　津浦豐子
やみし人のくす師がり行くみちのべの時雨るゝまゝにちる紅葉かな
○　飛彈　南みれ子
木枯にふきのこされし桐の葉のつれなき雨にちるぞ悲しき
○　美濃　松田萩子
馬に乗りて雨にみめぐる韓人の振分髪に紅葉ちりかゝる
○　美濃　松田濱子
しめやかに雨の東屋灯は見えつ落葉するなり夕暮の池

○　岩代　木内よし子
越えがてに降るものならじ關の戸に小雨まじりに落葉散るなり
○　近江　辻たへ子
雨そぼつ夕べ戸に凭り亡き君をこへば淋しく桐の葉散りぬ
○　千葉　土川千夏子
木の葉さへふりそふ森の雨やどりぬるゝたもとに夕月の影
○　兵庫　三宅久美子
深山より嵐もいまだ吹かなくに時雨の雨に散る紅葉かな
○　兵庫　圖子
つき山の紅葉いつしか散にけり嵐の先に小夜しぐれして
○　神戸　神谷ひろ子
千早振神は出雲に立まして雨に落葉のわきて淋しき
○　河内　竹内久子
時雨かと思ひまごひていたゞきし小笠の上に降る木の葉かな
○　美濃　松田秋子
紅葉散る山路しぐれて雛僧の影うすらぎぬ入相の鐘
○　伯耆　錦織さみ子
一しきりそゝぐ時雨に誘はれてはげしくちりぬ雨戸たゝきて
○　伯耆　錦織よし子
灯はきえぬ落葉はちりぬ鎮守の森解願の小笠あめおもき宵
○　横須賀　高橋つれ子
降る雨に訪ふ人もなき我庭を我もの顔にちる木の葉哉
○　東京　平塚白百合
をさな子の夢いまだるゝ雨の夜をあはたゞしくも落葉するかな
○　兵庫　まつゑ子
村雨のふけてしぐるゝあばらやに音づるものは落葉なりけり
○　美作　鈴木鐘子
急ぎ行く野路は時雨れて旅人の笠にそゝ散る柿のわくら葉

〇　美濃　各務不美子
ふる雨に窓の桐の葉落されて殘りすくなになりにけるかな

〇　東京　平塚いさ子
衣ぬふまどのともし火ふけゆきてあき雨さびし桐の葉のちる

〇　神戸　宇野夏嘉子
露霜のふかくも染し紅葉ばも雨にはもろく散うせにけり

〇　北海道　佐藤央子
かしましきまきのいたどにひまもなくしぐれまじりに落るもみぢば

〇　東京　紫子
さわがしき小鳥のむれはさびすぎて時雨とともにちる木の葉かな

〇　下總　秋月廣江
山陰を藥瓶もちていそぐ子の傘にみだるゝ若楓かな

〇　岩代　岸野なか子
いかならむ咲き匂ふ花にうづもれて此身このまゝ眠り果てなば

〇　岩代　岸野菊子
村雨にちり行く紅葉色まして谷のはやせは花ながれつゝ

〇　兵庫　小山波枝
村雨の降るも淋しき夕まぐれ草ぶき屋根に木の葉散りけり

〇　美濃　各務照子
雨だりの落ちて流るゝ池水にうける紅葉の色のよさかな

〇　對馬　畑島郁
時雨ふる山川堤風を荒みくだる筏に紅葉ちるなり

〇　美濃　傍島みゆき
千稻のつゞく垣ねにもみぢ葉のちりかゝりたり雨の夕ぐれ

〇　岐阜　目島まさ子
こぼれたる紅葉かきちらし庭鳥の雨にぬれあそぶ山寺のには

〇　埼玉　横田秋子
ほろ／＼と木のはおとする風先の草の戸ざしに時雨ふるなり

〇　下總　月沖すみ子
初時雨詩よむ窓に落葉ちれば故里にある父母の戀し

〇　遠州　疋田伸子
秋さめにぬれて色そふ唐にしきもみぢながるゝ谷川の水

〇　神戸　いし子
淋しさに一人小窓に立よれば庭の桐の葉雨に散るなり

〇　兵庫　梶原玉子
音たてゝ木の葉まじりにはら／＼と園の戸たゝく時雨をぞ聞く

〇　美濃　各務濱子
秋雨のふるたび／＼に青柳の糸をはなれて散る木の葉哉

〇　須磨　有村とみ子
立よらん木々は時雨に落葉してそでほしあへぬたびの夕ぐれ

〇　兵庫　湖東澄子
音もなく散りゆくもみぢも秋の雨も共に哀れをさそふなりけり

〇　兵庫　湖東靜子
友あらぬわびしやどりの雨の日をかすかに音して木の葉ちる哉

〇　茨城　脇坂すま子
時雨ふるささの林のぬかり道つもる紅葉をふみてこそゆけ

〇　在清國　稲田つる子
しきり鳴く虫の音たかき明けがたを紅葉しづかに秋雨のふる

〇　東京　田代貞子
ほろ／＼と時雨の後に音するは風のまに／＼木の葉散るらむ

〇　東京　牧千春
小夜しぐれ鎭守の森に訪づれて紅葉かさなる秋の朝かな

〇　伊豫　釜田春子
きのふまで梢そめにし村雨のきふは紅葉とともにふり行く

〇　美濃　松田星子
あすと云ふ友を待ちにしうらみ哉雨に散りくる立田もみぢ葉



日本女子大學教授 文學士鹽井雨江先生選

天

○程近き友の許へ

岩代國伊達郡小手川村 岸野常子

手づから培ひし朝顔の、今迄になく花も大きう色どりも美くしう咲き出で候を、獨り眺めんも口惜しう花の心も思ひやられ候へば、御妹様御同伴にて、柴のとぼそを叩かせ給はずや、釣瓶取らるゝ程の趣きは候はねど、花毎におきかはる露の色を眺めんも、亦をかしかるべくと存せられ候。まづは、露のひぬ間をと、取り急き御返事伺ひあげ候。かしこ

○

夕方里なる乳母より、落栗あまた送りこし候まゝ、今宵早速栗のまどゐを開き申すべく候。復習もすみたまはゞ、お湯あみがた〴〵お出で下され度、今晩の風呂はお白粉いらずに候。何となれば、私も手傳ひて汲みたる水に候故。弟共は只今ナイフとぎに餘念なく候。あか〳〵と障子にうつれる灯影に、はや煮え立つ音も聞え候。早く〳〵お出でなさるべく、御返事は取り急ぎ候へば、たゞ參、否、とのみ、御しるし下され度、まづは、取りいそぎお誘ひ迄、かしこ

○

夕飯後の運動にと、まきおきし枝豆の、折りからの月もろ共に、ふくらみ來り候まゝ、今宵名月の圓きをめづべく、より圓滿なるまどゐのむしろを開き申すべく候。庭の糸萩は今を盛りに咲き亂れ、門の薄も招き居り候へば、ぜひ〳〵夕方よりお出で下され度、お月様のお團子の外は、花にちなみしお餅も！此は私が拵へ申すべく候間、お味ひの上、是非御批評の程願はしく候。かしこ

咲きつゞく小萩糸萩、おのづから垣根となりし庵の朝明、なか〳〵に見捨てがたう覺え候まゝ、いそぎ此の文さしあげ申し候。九尺の庭を所せきまで咲きこぼれたる秋草の花を題といたし、書にせんも、歌にせんも面白かるべく、殊に、よべの雨にて、花毎に瑠璃金色の冠を捧げ、詩の高きほこりにほゝゑむさま一入の風情に候間、御妹様御同伴にて、こゝろなる草家へ辿らせ給はずや。時おくれては、露やこぼれん、花や亂れんと、取り急ぎ走り書きして御返事伺ひ上げ候。かしこ

（雨評）よく整ひたる中に、才華もかをりて、めでたき文さ申すべし。

地

月の宵

下野國今入町四九二　井上尚子

何と靜かな宵であらう、小さむい風が髮をなぶつて、床のコスモスが搖れる。燈火もない室の中に射こむ月の光を浴びて、なく虫の音に耳をすませば、シンミリと胸に透る。かぜにふす垣の小萩、鳴く鈴虫、光冷たい月、わが庭の秋を代表して、身にしむる寂しさは、これから迫りくるのである。迫りくる寂しき思ひに、今宵は思ふざま泣かうと、心靜かに目を閉づれば、空想、事實、交々みだれて止度もなく、末はしゞまの中に消えて入りたいやう。いつ迄もいつまでもかくばかり寂しい運命のたまきをめぐることであらうか。いつそ、この身、この思ひ、この世を渦の中に投じたならと、思はず洩るゝ冷笑。身はをのゝきて堪へがたく、横たへて、繰り返す己が半生のふみ。それよ、涙ににじみて讀みえぬ程。殘る半頁を光ある文字にて埋むることが出來るであらうか、と、思ふと、いつも失望の極に達するのである。たとへば、水や空空や水なる大洋にたゞよふ小舟のそれの如く、かすかにも希望の光を認めえない、さかまく浪にもまれもまれて、末は岩に舟腹をゑぐらるゝ悲しいさだめをそのまゝの姿の宿世か

庭に下りたてば、月は池水の底に澄んで、みづに沈める鏡のやう。みつむれば、池の面にやつれしわが影。思ひの胸に迫る折しも、垣の外に沈んだ聲の讃

美歌、つよく耳に響いて、思はず垣近く二三歩。うしろにジジジと虫のなく音。ふり返れば栗がおちた。吾影は長く〳〵地にさびしく引いてゐる。

（雨評）感深くこもりたるを愛す。

人

里の小川

東京牛込區左内坂町三七　平塚つゆ子

女神のお手からすべつた珠をといて水としたやうな岩間の流れが、晶簾をかけたり、雪をとばしたり、山を出で林を貫き、時には花の思ひをうつし、時には虫の涙をまじへ、藍となり紫となり果ては渺々たる平野を漂うて、ほの白ろくも流れてゆくそれが、やがて平野を出でゝ、静かなる五戸の村へとせゝらぎの音しづけく、流れて入る。

夢を見るやうな鳥のこゑが、森のあたりからして、炊煙ははれたう秋の空にのぼつてゆく。消えるあたりに、賤が山のひくい頂きが、朝日にてりかへされて、紅葉の色が、里にくれなゐのかげをなげてゐる。流れの曲り角から、三四羽の家鴨が、岸をつたうて、泳いでくる。

萩の花かげにかくれたり、魚をあさつたりして、ホロリと散つた萩の花は、忽ち二つにわかれて、川下へと流れるを、一羽の家鴨が、いそがしさうに水をきつて、あとを追つたが、いきなり呑み込んだ。と見るうちに、またはきだして、元の場所へと泳ぎもどつた。花は幾つにも別れて、一めぐりしたが、見えなくなつた。

両岸は、紅に紫に黄に白にとり〴〵の秋草が、水にひくゝたれて、をみなへしのたをやかなるのや、薄の物ぐるはしさうなのや、萩の露々しいのが、みな水にいだかれながら、朝の風によみがへつたといふやうに、ゆらいでゐる。

つい目の先の小橋に、里の子が二人あらはれたが、家鴨を見つけると、小石をバラ〳〵となげる、あひるはおどろいて、バツバと羽ばたきしながら、岸にとびあがつて、例のをかしい足どりで、野菊を二三本ふみしだいて、かれ柳の元へとにげのびた。安心したのか、羽を一ふりふると、細かい水が、朝日に映じて、七彩にかゞやく。橋の上にはもう里の子は

見えない。小川の流は花をいだき、秋の香を凝らして、虫の音に送られながら、ねり絹のやうに、遠くは銀線をのべたやうに黄金の田の中へとかくれて行く。

(雨評) 優美なるを愛す

秀逸

○◎天長節の小村

横須賀　渡邊ひさ子

満天は秋、満地は菊の日和!!

朝から、嬉しい風が、天長の佳節を奏でつゝ、二十有余戸の小村の藁屋根に、森に、林に、告げ渡る。

今しも櫻の頂から笑ひ上つた朝日、この平和な寒村の一小部落の露の原、草の戸を照して、一入嬉し氣に輝いて居る。

淨い、美しい、朝風はこの平和な小村の天地に漲り溢れて、舞ふ、踊る、唄ふ。

今日を晴衣さ、村に異彩を放つ日章旗の、チラチラ、白く、紅く、企望の色を放つて、藁屋根高く、草の戸低く、翻りつ、翻られつ、笑ひ崩れてゐる。

村は静である。小川に鎌磨ぐ水影も、叢に囁く男の子女の子の聲も、消えて何所へやら……、春なれば梅に寒きを包み、桃の暖きを纒うて見ゆる小學校の、今日は秋とて菊の香のみ、獨り僅に柵を洩れて、草刈る童が隙の學びの窓を裝ひ、飾つて居る。恍惚として心耳に澄み入る可愛氣な唱歌の一節、二節、いと面白く、今亦其の窓より溢れて、村一面に漲る。

どう思うてか、百舌鳥の一聲高く、キーと鎭守の森を放れて、村外れの水に落ちた。

(雨評) 風に朝日に國旗に擬人の表出を用ひたるところに、一寸味ひがある。

○◎短文

東京　檜皮芳子

床に入ると間もなく、ゴーッと屋根の上を行く風の音、折々は雨も交じるらしいけはひがして、落葉が雨戸をたたく、夕べの怪しげな雲は、夜に入つて、小嵐となつた樣子。はげしい外の物音が耳について、眠られぬまま、寢返りして燈火をみつめて居たが、ふと去年田舍へ泊りに行た時の事を思ひ出した。田

舍とは、我家から左程遠くもない乳母の家で、丁度今夜の様に風雨のひどい時であつた、あくる朝起き出て見ると、空はよくはれて、雨の名殘が木木の葉にかがやいて居た。前の廣い庭は落葉に埋められて、足の入れやうもない。散りしいた紅葉が美しいので、ひろはうと思て庭に下りると、乳母の出て來て、挨拶しながら、栗が落ちたと知らせてくれた。ですぐ行て見ると、私のために取らずに置いたのか、つやつやとしたのが、かずしれぬ程目に付て、あふげば上にも、今にも落ちさうなのが、其の葉の間間に見える。都住居の身には珍らしく嬉しく思はれて、夢中になつてざるに入れた。泥にまみれた足を洗はうと、勝手口から入つて行くと、ぢいやがしきりと爐の火を吹いて居る所だつたので、早速そばに行て、取た栗を見せて、そして、私の家にもあの様な栗の木があつてほしいと云ふたら、ぢいやはにこにこと笑ひながら、何か云ひさーにした時、ポンと音して、積んだ炭がくづれると、よい香りが鼻をついた。かき出してくれたあの燒栗の味は、いまだに忘れられぬ。今夜あたり、あの木の下にはきつと澤山落ちて居るであらう。ぢいやはきつと爐の中にそれを埋めて居るであらう。あゝ、田舍に行つて見たいと思た私は、直に燈火をかき立てゝ、乳母の許への文を書き出した。

（雨許）可憐なる情は愛すべきものあれど、筆未だたどたどしきふしあり。

○◎晚秋

福島　伊藤よし子

闇の中で轡虫が鳴いた、生きてるのだらう。死んだら、あんなに鳴けなくなるのだもの、虫は啼く又自分の命が縮まるのを知つて居やうか。自分から滅亡の譜を奏する程悲しいことは、他にあるまい。今迄細い〱愁たい聲で啼いて居た一疋が、啼き止んだ、死んだのではあるまいか、その闇の中に、錦をほこつた紅葉は、霜に合づた。一しほ紅を濃くしたが、もう紅葉の運命は短い、落葉程哀愁の含んだものはない、萩も籬に影を止めない、菊を覆せられた、何のこともなしに淋しくてたまらない、山は痩せてくる、川は枯れてくる、秋くれ

方の寒む風が、颯と曠野に充ちる、たゞ蕭條として、たゞ落寞として——あゝ秋の雅な、優美な、柔和なその姿が、何處に行つたらう、思ふまゝに泣いて、思ふまゝに考へて見たくなる。珠數つなぎに乾した豆栗に、カサ／＼音立てゝ虫が飛んだ、何虫だらう、むきかけた柿の皮が、一尺程土に落ちてゐる。どうしても儚ない晩秋の姿である。

（雨評）才は見ゆる。今少ししんみりさしたさころがほしく思はるる。

◎氷雨降る日　　下總　月沖百合枝子

永劫に寂しい風が、そよ／＼と吹く。妾は榛の根方に佇んだまゝ、うら淋しい冬枯の野の面を、熟々と見入つた。雲重き神無月なれば、何となく肌寒うおぼえて、枯草は吹く風に悲しいさゝやきをもらす。野末には人影もない。妾の胸底には言ひ知らぬ暗愁の影が、かすかに流れてゐる。

あゝ此寂寥の天地に、青春の胸を抱いて佇む妾は、痛切に紅の野の花が戀しい。

。。。。。。。。。。。。。。。

やがて、氷雨交りの細雨は、しと／＼と降りだした。空を仰ぐと、箒木のやうにそゝり立つてゐる梢の上には、紛糾つた夢のやうな灰色の雲が動いてゐる。何となく明くない、沈んでゐる樣な景色？妾はふと愁に惱む眸をあげて野末を眺めた。

此時、肉は落ち、骨は瘠せたる白髮の媼が、とぼとぼと歩いてくるのを見た。年は六十を越したであらう。破れた布子の衣を纏うて、懷には、生れて間もない稚兒を溫めながら、低い哀れな聲で兒守歌を歌ひつゝ行く。

雨の降る日を、傘も持たずに、横さまにくる飛沫に身を斜にして、眠つてゐる稚兒を氣づかひながら、うつむきがちに胸のほとりの衣、引寄せつゝ行く樣の、あまりに慘ましいので……妾は急いで母屋に立ち歸つて、破れたれど濡るるよりはよいだらうと、雨傘を取つて、彼れに與へた。

老婆は幾度か、厚く／＼禮を言うて、又もや低く歌口誦みながら行く。

雨は止んだ、霰降る野のほとり、冷たい夕風に裳を拂はれつゝ、見えずなる迄其後姿を眺め入つた。

老婆の影が森の木影に消えた時、何となく哀しくなつて、冷たい泪が頬を傳うて落ちた。
妾は胸の中でかすかに叫んだ『あゝ人生は悲哀だ』と!!!…………

（雨評）身にしむ氷雨ふる日とは存じ候へど、何んとなく文のまとまり惡しき心地す。

◎姉の友

在清國　鵜澤貞子

姉の友の緒子と相知つた。姉とは小學校時代から親しくて、今は大津の多少資産家へ嫁入つたとか云ふ。毎年秋祭りには歸つて來て、矢張り親しくして居る。姉とは年下で二十二だけれども、十八位にしか見えない。眼と口元に無限の愛があつて、色の極めて白い下ぶくれの、最もその言葉は人をチャアミングする蜜を含んでゐる。濃い髮を丸髷に、赤い手柄も初々しい。ハイカラ的教育をうけないのが、かへつて無邪氣で、これが奥樣かと疑はしめる。かと思ふと、急に衣服の事などを云つて、夫人ぶる處もある。
今日は丁度兄が役所の宿直なので、三人が圓く欅の膳をかこんで、晩餐を共にした。さうして、樂しく語り合つた。外は蕭々たる秋雨の降りしきつて、總てが重々しく活氣ない日であつたけれども、家の内では、春のやうな話しの花が咲いて、みんな小供のやうに笑ひ戲けた。「わたし家でねえ、讀んだ小説の話しをして上げませうか。濱子と云ふ、それは〳〵可哀想なのよ。泣いたわ、わたし。だけれども、本當にあなたでも泣いてよ、さうしたら、良人のに見つかつて、大變叱られてねえ」、
「叱られたけれども、嬉しかつたんでせう、ね」、と、そばで姉がからかふ。
「知りませぬわ、あなた直きにからかふんですもの。もう話しはして上げなくてよ。」
と顔を赤くして、優しく睨む。
今度はお互に小説を話し合つた。自分はテニソンのイノックアーデンを話して聞かせた。緒子は瞳をよせて熱心に聞いて居た。
「お緒は居りますかの」、とお母さんが迎へに來た。
「あらすみませんねえ」、と緒子は歸り仕度をする。
「おばさんまあお上りなさいな」、姉が聲をかけると

「ハイハイ有難たうお緒が永くお邪魔をしまして。」
「お母さん提灯なんか持つて來て、外は月夜だわ。」
「お前は町に居るから、田舍道は歩きにくひと思ふての。」
緒子は只笑つた。
其夜は、自分は、いつもの恐ろしき、胸の響きを忘れた。そうして、温かな物を注射せられたやうに、何んとなく樂しかつた。(妾に一人の亡き兄がある、その兄が殘せし日記抄を讀みて筆を執る)

(雨評) 亡き人の文である。

◎吁吾が肺は　遠江　鈴木いわ子

肌寒い秋の氣が迫つて、吾知らず襟を正した。顏を洗はんともせず、後の窓を押して、ドサリと、座して、遠く眼を放てば、アア、美くしや、露の白玉簪す千草の姿……都田川の音は、靜な空氣を振動させて、微に耳朶を弄するのである。
ヅッと北の方、一連の峯巒は、山腹に濃霧を纏うて、山頂恰も松島の如し。而して、吾は未だ松島を見たことがない。
やがて、旭は紫雲紅雲を破つて、靜に吾が窓を訪ひぬ。東から北に飛ぶ鳥三羽。霧は淡くなつて、麓の村落が、ボーッと見える。三三五五、木の間に陰見して居る伏屋からは、朝餉を焚くか、白い煙が悠々と大河の逆流する如く、天に上がつて行く。他は皆平凡、雷露の散る光が、何時に變らぬ光景を示して居る。
忽ち聞こゆるは、玉雲寺住職が叩く木魚の音、……吁淚……吾も亦彼れが媒介の下に、不歸の客と、なるの日も、遠くは、あるまい……不治の病……自分の肺は、何故、かく腐つたのか、十八才の紅血は刻々青化されて居る。明日から、もー早起きする勇氣は出ぬ。
朝飯を呼ぶ母の聲に、力なくも立ち上がつた。
(をはり)

(雨評) 一篇の文を作る時には、情の統一が大切である。其處に少しく申し分がある。

◎雁の詞　河内　竹内久子

花に別れ都の春を跡にして、紫匂ふうす霞ぬひつつ、

雪の越路へと立かへる雁、いと哀れなり。やがて春さり夏すぎて、萩の上風うら淋しく、小萩の露のかゝる夕まぐれ、琴柱立てたらんごと、親しき友どち打連りて、霧をわけつつ渡りくるは、猶昔の宿を忘れざる心、いと嬉し。まして、長き秋の夜は、折ふしの初雁の聲きくにつけても、いよよ思ひはまして、なつかしい故郷の空忍ばれて、彼方よりの便の前徴かと、ゆかしう思はるる。花橘軒端によりしなつかしの故郷立てより、はや三とせ。螢集むる窓の明暮さうざうしきまゝ、流石こひしき心の絶えざるに、わけて悲しきは秋の夜なり。萬籟聲なく氣澄み渡り、芭蕉葉に音訪るゝ風の音のみ聞ゆるに、仰げば中天一痕の名月、鏡を磨きたらんやうにて、昔を語り顔なる折、はた、星影清き夜半、をちの砧の音に寝ざめて、枕べのそゞろにつゆ滋き折など、友にや後れけむ、親をや見失ひけむ、天涯遙に孤雁のなき行く聲、細うきこゆる、一しほ哀ぞまさりて。

（雨評） 文は整うて居るが平凡をまぬかれぬ。

○病床日記　　岩代　木内よし子

一日。繡眼兒小さく囀りて、柿の木に遊ぶ日なり。柿は熟せり、栗は笑めり、秋の山家程豐かなるはあらざるべし。

楓の葉の紅葉せしより、日毎飛び來る小鳥あり。頰白なりと妹は曰ふ。思ひしよりは醜き鳥ならずや。椽近く銀杏の黄なるは落ちければ、手延べて拾ひ上げぬ。なつかしき此色は、いつ戀の詩をや染むべき。侘びしき我思詩とならば、戀しき人に禿筆まゐらせん。されど、あゝ、されど、死の旅に導かるゝ我身の、寂寞と悲哀の胸に溢れて、さらに憂の増すのみ、如何にすべしや、弱き子と母はの給へども、煩悶の子と生れし我身なれば、懊惱は日に〳〵重く、冥府の扉の一歩々々背に迫れるを……おゝ、我心はあまりに少なりき。我思はあまりに淺かりき。虚榮と名譽とは、華やぎの夢をして、實を結ばしめざりしなり。

白陽の煩しさは、我をして益々狂はしむ。熱は高くなり増りて、胸の思は亂れ更に烈しく、腦はあやしく響きて、靜かなる夜のぞ待たるゝ。冴えたる月の

光は、苦より救ふの光なれば……おゝ靜かなる月夜ぞのみ待るゝ。昨宵は雲の出てゝ月を見ざりしを。今宵は更に戀しく、低き窓より雲の往來をながめては、一片の雲さへあれば、心濁るもをかし。月は輝けり。窓の隙漏れて、わか生を甦すに似たらずや。暫し胸を沈めて、わか身の懊惱を思ひぬ。さなり、暗き世を大なる謎なりとせば、我はその謎を説かんとて、暗がりを迷る弱き迷子なり。

二日。

今朝はいみじうも心地すが／＼しければ、庭をそぞろありきぬ。萩は枝をふり上げぬ。秋花はなべて花を散らせど、紺青の虚空、何とはなしにうれしき日なり。

あらぬ空想に思を走せて、庭を回りぬ。ふと草の中に到れて咲ける野菊を見つけぬ。わが胸ははしなくも動きぬ。狂はんばかりに心亂れぬ。色褪せし野菊……そはわれを薄倖に導く花ならずや。失戀の苦みを與へし花ならずや。小さき花なれど、千々に裂きても罪や尙輕かるべき。手はそのゝきぬ。涙はハラ／＼と襟にこぼれぬ。裂くに力なくて、地に強く捨てゝ踏みにじりぬ。

（雨評）末の野菊の道具立てが、少しく突然にて、何んの爲めの怨みやら、判然せぬところが、遺憾である。

〇小春小品　飛驒　南　みね子

小六月の空、鏡の如く澄み渡りて、浮雲一つだも見えねば、日の影、ほしたる綿にくゆりて、ほか／＼と暖に照つてゐる。

菊の香高く、山茶花の色鮮に、紅梅の狂ひ咲きさへ、ちらほら床しの籬に垣見ゆれど、鶯來らず、眼鏡せる嫗が、運ぶ針の手氣長かう。淸き音たてゝ歌うたふ乙女も歌に倦みて、五つばかりなる妹を中に、川の字書きて、遊びにとや出で行つたやう。眞晝靜かなる籬の梅に、名も知れぬ小飛び來て、鳴く音床しく、枝飛びかはしては遊ぶ羽風に、狂ひ花三ひら四ひら、胡蝶のそれの如く、亂れ散るに、犬の兒なれば夢路破れて、首もたげしが、また溫う夢路にぞ入る。

雨霽りの今日、小春日和の長けさは、春にもまして

一入である。野邊は秋の七草の盛りを過ぎて、香りもうすく、花野の中を薄き花の香うけて、うねりゆくなるいさゝ小川の水。水に臨める桔梗、糸萩、晩秋の色を湛えつゝ、風なきにほろ／＼と散りて流るゝ萩の花、妾は危げなる土橋の上に立ちて、そが行末を眺め、人生の果敢なきを偲へば、妾の孤影長く水にあり。かなたの畦の果に、木の間よりほの見ゆるさにぬりの宮居、あゝ畫にもほしき產土の森。此方の小さき山には、栗拾ふ里の子のかしましき聲、手にとるやう聞ゆ。

山重疊の末にほのかに見ゆる、硫黃嶽にのぼる煙、風になびきてか、平日にまして細かりけりな。野の家は秋にせはしく、こぼれ籾あさる鷄の聲ゆるう聞えて、小春の光り溫う流れたり。

山鳥の夢を驚かしつゝ、童が山に薪拾ひて、馱馬に積みつゝ歸る蹄の音、里の紺屋に布張る乙女に揶揄いて、肩一つ叩かるれば、馬は主を思ひてや高く嘶きぬ。二人は互に『ほゝ』と笑みて、童は馬引きつゝ家路をさして、歌節高く、『雪が降つては仕　が出來ぬ、今が仕事の盛り時』餘韻長く山に反響せしが、かすかに何處ともなく消えはて、藍ときて流し前に、小菊さく庭面に、冬籠りの柴高く積みあげし上に、風なく山雀なきぬ。

宗嚴寺の入相告ぐる鐘の音に、夜の幕は下りぬ。晝より出でし十日餘りの月、冴やかに色付て、影丸窓にあり。窓あけて望めば、秋の灯火ちらほらと、田面を渡りて見ゆ。一家思ひ／＼のさゞめきやみて、祖母の君は妹を連れて臥床に入り給ひぬ、口惡き兄君になふられて、妾は腹たちしまゝ書齋にとたてば、母君、兄君、義姉の君は笑み給ひぬ。秋の歌詠まむとて筆とれど、兄君の言の葉など想ひ出されて、歌ならず、振袖の長きを怨みつゝ、手すさびに生けし、床の黃菊の花を眺めて、浮びし一首

思はすも眺めし菊の一枝に
心のもつれとけて嬉しき

(雨評) 口語の詞づかひと文章の詞づかひと なほ 調和が出來て居らぬふしがある。

、、〇汽車待つ間　京都　堤　撫子

此所は七條停車場……御別れ仕てより七百有余日間懷し懷しいせ、

露片時も偲ばぬ事の出來ない位ゐ慕うて居る、姉上は、この九時四十分てふに着京せられるのである。あゝ、もう三分間だと思ふと、何んだか、嬉しい様な恥しい様な變な〳〵氣が仕て、心が落ち付かず。着かれたら、何と云はうか。御挨拶なんかいらないから、すぐにあの暖かな兩手に縋り付いて、ね、姉さん〳〵と、あゝも言はうかうも言はう、早く着けば好いのに、まあ三分の長い事と待ち焦れて、西の空滊車の來る方許り眺め見渡して居たら、あゝ見え出した〳〵、白烟が。胸は堪らなくて、もう前後不覺。思はず前に出ると、ピイと一聲。あぶないッと驛夫の聲と共に、滊車は停車した。戀しい人を乘せて來て呉れた滊車は着いた。乘る人、降りる人、俄かに四邊は喧しく、なか〳〵の混雜である。私は、彼の室か此の室かと下り來る人一人も見のがさじと、四邊に目を配ばつて見廻してるが、袴付けた、姉様に似た様な人は一人も見えない。あゝ見えない、若しや未だ車室に殘て居られるのぢやないか知ら。夫れとも一番に出て私をさがして居られるのぢやないか、と、一番の終まで殘つて構内を隈なう探したが、矢張見えない。田舍訛りの聲高に語り行く人、嬉しさうな顔仕て荷物を後から驛夫に持たせて迎への人と話仕ながら歩行るいてる方などが、一層樂しさうに目について堪らなくなる。あゝ、姉様は見えない。今迄では萬一見逃がしたかも分らないと少なからず賴みに仕て居たが、いよ〳〵見えないとすると、今迄で張て居た氣は、どーと落ちて、仕舞うて、もう〳〵前後の考もなく、四方の人に恥しい氣もせず、かなしくて〳〵涙は頰に傳ふて、もう向うは見えなくなる。終には、例の短氣の髮の毛もむしりたく、思切りに四邊の人を、いたゝきたくもなつて來る。もうぢッと仕て居られない、腹は立ッ。あゝいよいよ姉様は來られないのか。

昨日の御手紙に斯くまで確な時間迄で書いて來ながら、斯く迄で樂しんで居られたのになぜ來られないのか、常々から弱い身の姉様、若しや、急病でも起つて苦るしんでなさるんぢやないか。あゝ病氣には勝てないが、斯んなに樂しんで待て居るのに、如何仕ても來られないのなら。キット今頃は宅の方に電報でも來てる筈ださうしたら、宅から誰か報らせに來て呉れるだろーに……西から走て來る電車、東に走る車、斯う仕て勢好く走る人許りだのに、姉様も來られず宅からも報せはない、もう泣くにも涙は出ない、勇氣は失せて、夫んな勢の好い物見てると目が廻りそうになる、傘の先で土地に分らぬ字亂書仕て、詫しう獨り昨日の御手紙の車許り偲んで居ると、耳を貫ぬく滊笛一聲。あゝ次の列車は又着いた。私はつと走り出した。事に依つたら此の滊車ででもと思うて、あゝ戀しい姉様ははたして來られただろーか。

、、〇秋の月

東京　倉重千惠子

一年には屹度十二度、淸く圓い姿を見せて、人の心に美しい感情を與へて下さる御月様は、幾年たつても一向御年を召した御容子もなく、矢張小兒の口から御月様幾才十三七つと數へらるゝ其年より、老いもせず、毎時も笑々した若い御容子である。

滿月の時はいつも同じではあるが、春は霞の衣に美しい御身を御つゝみあそばす朧月とやらも奧ゆかしくてよいけれど、私の好きなのは、世の中も人の心も靜まつた中秋の滿月である。又、秋の月ほど人心に色々の影響を與へたり、詩材に富んだ時はありますまい。

もの學んで居る私等の樣な者は、春のやうに人心がうき立つて居るさ、つい遊びたくなりますが、秋などは、勉强がいやになつても、すむ月を見ては、親の事など思ひ出して、一汐いそしまなければさいふ心持になります。ですから、私は、春櫻花が爛熳さ咲き其間に朧月がかゝつて、人は畫の樣ださ評しましても、私は决していやさは申しませぬか、脊のすべてがたゞ飾であるさ思つて居ますから、飾の春よりも、誠の神に操られて居る秋の方か、興が深いやうな心地が致します。

私か如何に秋の月が好きだからさいつても、月に叢雲花に嵐は世の習ひで御座いますから、年毎名月を仰ぐ事は出來ませぬ。よし月を觀ずさも、此の長夜に託して歌を詠んだり、家族團欒の會食や親朋相友の淸談に各自興を作る時を得て、天心の美を人心に注ぎ入れて、人の美をひき出す好時期で、美を好む人生の心の底もよくわかります。今夜の樣ないゝ月夜に、峯の嵐か松風か、尋ぬる君の琴の音かさ思ひし仲國の㾾でも、此所嵯峨野の奥でも御座いませねども、妙なる琴の音がほしさに、耳かたむけた事が、幾度御座いましたらう。

○折にふれて　伊豫　益田春子

あゝ兄さんが、植ゑておかれた……さ一人椽先にたゝづんで、しつさりさふる小雨に枝おもさうな、庭の小萩を、ながめてゐるさ、いつの間にか、そばに來てゐた、弟の、やーもー、萩が咲くれ、咲いたら、僕が一番に兄さんのお墓へ……さいふ時又新らしい涙がほろり、さした。

投書家諸孃に

◎投書用紙　半紙に限る（卷紙などは平に御免）

但し一人一題にてすべて用紙をかへること

◎同字體　歌と、云はず、すべて漢字は階書に限る

◎同作者　其作物の傍に住所姓名を記載すること

短文、新體詩はもとより、兼題も二つとも別々の用紙にしたゝめて姓名を其傍に記すること

右規定に違反するものは、入選するも賞品を呈せず、又其投稿を沒書にすることあるべし。

◎同〆切　前月十日までに着するものを採る

本欄當選者への賞品

先々月誌上に載れるものに對して、本月送品することゝせり、その理由は、兎角入選の句にあやしきものあり、一號發行を隔てゝその間讀者諸君より注意なき分に限りて送呈すべければ、その期間だけ後るゝ譯なり、遺憾なれど止むを得ず。

◎剽窃の文　止むを得ざる、第九月號に於ける適例

女鑑第十八年第九號新體詩地賞、河內竹內久子の落花流水は、明治三十四年十一月十五日發行女學世界增刊磯千鳥人賞、信州松本小岩井愛子の作その儘、また同號短文河內竹內敏子の無花果をおくるに添へては、磯ちどり埼玉大安隆子の作を梁上の君子的行動に出でられたるにてはあらざるか、甚あやし。（越後岩本芳子）

新躰詩

日本女子大學教授　文學士鹽井雨江先生選

天

秋扇　　大阪東區横堀六丁目四十六番邸　木村春江

流るゝは涙なりけり、　八千草の色ある露を愛でませは―
影はづかしと枯尾花、　瞳に湧く涙そと秘めて、
病なき身を殊更に、　すまの浦わのかりまくら、
松ふく風や浪の音を、　一人してきくこの夕。
見はてぬ夢のさめさらば、
磯なれの松の深翠、　雫に袖はぬらさじを。
やる方なさの心から、　ありし濱邊をさまよへは、
愛も冷えしうらふれの、　身を知る雨の淋しみや。
思寐に見し秋の夜の、　はかなき夢を頼みては、
ありとしもなき音づれを、　猶さりともとまたれしか。
音なく今日もたそがれて、　短かき髪の脱け落るに、
思ひあまりてつくゞゝと、
ながむる空は、灰色の、　目の面にあまる鈍の色―。

（雨評）　紅涙滴々落ちて聲あり。

地

わが歌　　下總習志野三山　秋月廣江

（渡し守となりて）

流れてやまぬ川の瀬の、　行方をさひて、何にせん。
散るをば急ぐ花瓣に、　宿世を解きて、何にせむ。
昨日は昨日、今日はけふ、　めぐり行く世ぞ、うたふべき。
浮くも沈むも、一本の、　棹にまかせし我が身なり。
水に宿らば、月も見む。　堤に咲かば、花もみむ。
小さきのぞみといふ勿れ。　名利に狂ふ青年を、
戀に迷へる若人を、　世路に疲れし人の子を、
慰安の岸に送りては、　歌ふもうれし、棹の歌。
もし旅人の折にふれ、　昔語りをとふあらば、
只夕暮の雲の色の、　胸に染みしと答へつゝ。
ゆるう棹さす水馴ざを、　底の心はえしらねど、

清き流れを結ぶ身は、　渡るも安き夢なれや。

（雨評）ゆかしう忍ばるゝ渡守りに候かな。

人

『獨り兒』　福島市本町　伊藤善子

鳥がコロ／＼鳴く頃は、　米粉櫻が赤く咲く。
雌の羊が生む頃は、　苜蓿が萠黄色。
國を賣られて薪採る、　お小夜十三、愛らしや。
花を拐つて山を見て、　草を拐つて凉を見て、
遠いお山に紫の　雲に、お小夜は涙ぐむ、
廣い野原に水紅色の。　花に、お小夜はよく泣く娘。
薄か露を醸す頃は、　蟋蟀虫は鈴を振る。
萩か濃紅を生す頃は　機織虫は衣作る。
國を賣られて木綿紡ぐ　お小夜十三、愛らしや、
露をこぼして山を見て、　花をこぼして原を見て、
遠いお山の鹿の子なす　雲に、お小夜は涙ぐむ、
廣い野原の白梼の　霜に、お小夜はよく泣く娘。
わしや白粉のいらない子、　わしや口紅のいらない子、
虫か小鳥になつたとて、　鳥が白くなつたとて、
山程この身泣いたとて、　海程この身泣いたとて、
國を賣られて來たこの身ー。　故郷を離れて來たこの身ー。

（雨評）辭句はなほ銑煉を要するものあれど、可憐なる詩趣はあり。

秀逸

◎秋雨　遠江　鈴木いわ子

降らば降れかし、秋の雨、　落葉の上に音たてて、
悲しう唄ふ松虫の　聲を、半に止むるとも。
打つな、裏戸の白菊を。　打ちなば艶の美は失せて、
姿亂れん、徒に。　亂れば花の、いかにせん、
君待つ室の、淋びしさを。
降らば降れかし、秋の雨、　板屋の軒に音たてて、
淋しく結ぶ我が夢を、　半に破ることあるも。
打つな、小庭の白菊を。　打たば、花瓣打ち解けつ
茈の香、あたら消えもして、　佳節の宴を待ちてける
甲斐あらなくに朽ち果てん。

（雨評）趣味深き秋雨の吟。されど末段の數句、今一入の工夫を要するものなり。

◎城趾の夢　美作　鈴木錂子

月おぼろなる花の宵、たをやめあまた召し具して、
綾のみけしの袖かろう、やをら下りまし、静々と
そゞろありきの庭のおも、今ぞ我が世と美はしう
匂ひこぼるゝ花園に、盛りの色香きほひつゝ、
ほゝ笑み立たす姫の君、人の世ならぬ姿かな。
折しも、花の雲がくれ、夢とかすめる奥殿の、
香のか、高きあなたより、風のまに〳〵もれくるは、
誰が手ずさびの爪音か。美くしの夢さそふこそ、
絶えつゞきつ聞ゆなり。果てなき榮にゑひはて、
我れを忘るゝ折しもあれ、夕ぐれ告ぐる鐘の音に、
目をみひらけば、あゝゆめか、しらべ床しき琴のねは、
いつしか絶えて、松風は　ひとりさやけき音を立てつ。
ありし金殿玉樓の　榮ある姿かげもなく、
見わたす限り目もはるか、秋草ふかみ露ぞ布く。
變りたてしな、城のあと。榮えきはめしそのかみを、
夢ならで、またいつか見む。天そゝり立つ老松の
梢に巣ふ烏こそ、主なき城のぬしならめ。
苔ふりにたる石垣に　立ちてぞ、一人ながむれば、
昔ながらに山は立ち、水は流れてつきねども。

（雨評）流暢。されど、詞のびすぎて少しく弱し。

◎露と虫　河内　竹内久子

同じ草葉をよすがにて、定めは一つ露とむし。
廣き野邊をば宿として、すくせはおなじ、虫と露。
露の光のさやけさを　音に歌ふか、虫の聲。
虫のなく音の清けさを　色に出てか、露の玉。
されば、夕ぐれ虫なきて、しづくは滋し、露の玉。
されば、あけぼの露消えて、音細りゆく、虫の聲。

（雨評）どことなく淸き韻あり。

◎失題　東京　倉重千恵子

誰か云ひそめし言の葉か、零落の影になけゝとは、
師なき友なき筑紫地に、さすらふ身とは成り果てぬ。
千草八千草枯れ果てゝ、次第に弱る虫の音も、
都戀しの譜とはなり、夕を告ぐる鉦の音も、
都忍べの歌となる、幽居の宵の淋しさよ。
橿が原の秋草も、今はた枯れて山里の、
秋は我身と諸共に、老い行くものを、東路に、
理想希望の旗たてゝ、日毎いそしむ友たちが、

上こそ、いとど羨やまる。　あはれ榮なき我身哉。
荒のみあれし欄干に、　力なき身をもたせつゝ、
都に通ふかりがねの、　只一聲に斷腸の、
想も彼に得傳へで、　只默想に首だれぬ。
あはれ、なつかし師の君よ、　如何に幸なる我友よ、
失意の我に問ふなかれ、　秋の夕の風の音を。

（雨評）末段の句は感深し。其の他は、言ひまはしなほ拙し。

◎硯　埼玉　高橋とよ子

滿ふる海は淺くとも、　寶の玉を秘めつ可く、
耕す陸は狹くとも、　千々の言葉を拾ふべし。
霞の朝、この海に、　筆をひたさば、紙の面に、
花の色香や匂ふべく、　立田の姫の裝へる、
錦の色もあやなして、　紙の面を彩らむ。
うれしきことも悲しきも、　餘る思も其まゝに、
うつして永久に殘すなる、　功は高し硯石、
汝が血潮をそゝぎなば、　眼に見えぬ鬼神も、
熱き涙に慟哭し、　この天地も動かなむ。

（雨評）ことはりはきこえたれど、情の動くものなきをなしむ。

ゝゝゝ○秋の夕野原　横須賀　渡邊比佐子

夕日靜かに影落ちて、　繪絹に似たる夕霧の、
此方彼方にかゝる時、　萩や薄の丘の邊を、
里の男の子は、追分の、　節面白う、染分けの
手綱を曳いて、牛曳いて、　家路をさして急ぐなり。
無弦の琴の巧にも　女神妙へなる調べをば
奏で給へるさゝ川の　岸の邊歸る乙女子の、
姿可愛ゆく、花籠に　千草百草滿せつゝ、
鄙唄高く聲淸く、　流れに合せ唄ひ行く。
男の子女の子の影消えて、　微に月の影宿る
花野の奥の笛の音は、　折しも淨く野を越えつ、
余韻を曳いて流れくる、　誰がすさびの調べかや、
今しも淡き月影は、　光りをなげて水に散る。

（雨評）今一層情も想像も活しかてほしき心地す。

ゝゝゝ○秋郊逍遙　飛騨　南みね子

彼方此方の山々の木々の紅の葉は紅葉して、
峯に谷に紅の錦の色や漲れり。
麓をめぐる野面に、　秋の香包む紫の、
桔梗―夢と流るゝに、　女神―天降るか野を戀て。
秋陽照る野は果もなく、　花に眠れる胡蝶さへ、

招く尾花に招ねかれて、
妾、思ひぬその昔し、
血汐流しし武夫の、
昔の影を千代かけて、
それとさたかにわかずして、
妾、思ひぬ亦も今、
女神天降るか、野の榮に、
桔梗―苅萱―女郎花、
鳥―歡樂の曲奏で、
亦も思ひぬ妾今、
亡靈ひそみ―さはあれど、
追憶多き憂愁も、
昔荒びし影消えて、
女神の御座やつくる。
この高野に矢叫びの、
その兩雄の面影を、
傳ふ石碑の刻み文字、
只靑々と苔の花、
昔すさびし跡もなき、
花よ匂よ、永久に、
鈴虫―松虫―くつわ虫、
乙女―戀ふ如憧かれて。
命落せし武夫の、
萬象―秋の光りして、
昔語らぬ野のさまに、
女神―天降るよ、秋野哉。

(雨評) 苦心せられたるものならんが、ごつ〳〵したる散文の如きにあらずや。

○失 題

東京 平塚いと子

夕日うすらの岡の上や、
むろ毛ふくるゝ秋風に、
そさくちづけて見もやせん、
葉がくれ見ゆる房ぶだう、
野ぶだうつばむ白鳥の、
うましにほひのなかれては、
甲斐は葡萄の豐つくに。
自然の神の愛のつゆ、
たゝへてそめし濃紫。
なりはひろればむささつむ、
なののきつゝもつみさりて、
細指にしむるやつゆのいろ、
市にさひさぐ甲斐乙女。

○失 題

上野 小野里鶴子

やゝしばし夕榮えのする山紅葉、
くまなく野べを見渡せば、
早や枯れ果てゝ、實もおちて、
赤黄色さぞかはりける。
巢跡なし秋虫も、
昔をかこつ如くなり。
肌寒げなるそが羽根に、
狂ふが如くかけまはり、
思へど花はあら悲し、
浮世の外にまさゐして、
榮華の夢は早やさめて、
ながめせんまのわづかなる、
思ふ花にはやさもなく、
空しくさまよふ西東、
はかなく枯野にたふれんや、
ひさながめし己が身は、
あゝ無情なる世の中よ、
うつろひやすき人の世に、
すぎこし方や行く末を、
ながめつゝ行く枯野原、
一時榮えし八千代草も、
名殘りに止めし莖も葉も、
ふし面白くこの野べに、
今は哀れやたえ〴〵に、
折しも、秋の蝶一ツ、
彼處此處にひら〳〵と、
一夜の宿を求めんと、
昔たのしく百花と、
うれしき契り結び合し、
心のそこに世の中の、
なさけのつゆは受も得ず、
春秋の季をなげくらん。
身を焦れつゝ末途に、
あゝあはれな小蝶よと、
はろかに空を仰ぎつゝ、
み空に漂ふ雲の如、
榮華にくらす己が身の、
そゝろに想ひしのびては、

身も世もあられぬ思して、　思はず野べに打ち伏しぬ。
ふたゝび蝶を見上ぐれば、　羽根もたゆげにちら／＼と、
いづこともなくまよひ行く、　あはれはかなき蝶の身よ、
天にまします神々よ、　神の使となられたる、
可憐の蝶を救はれよ。
ふと心付く夕榮の、　色はいつしか消え失せて、
西の端山に日は落ちて、　入相つぐる山寺の、
鐘の響もほそ／＼と、　ねぐらにかへる鳥もなし。
たゝかの蝶のしのばれて、　またも見返る小さき影、
時しもいともあはれなる、　鳴く音さびしきさを鹿の、
妻戀ふ聲や紅葉の中、　小蝶をしのび身を思ひ、
はたまた鹿のこゑきけば、　鐘のひゞきともろともに、
わが身にせまる如くにて、　あやしくさわぐ胸の中、
ふみしむ足もしどろにて、　かへりを急ぐ枯野道。

短册の文字

岡山高蔭

晩近歌の盛なることは、世の所謂舊派新派を問はず、實に其極點に達しゐるかと思はるゝほどにて、名あるは云ふも更なり、かいなでの人のにても、面白くめでたきもの甚少なからず、されど其短册をみれば文字いと拙くして、さきに耳にせし名歌も聊價値を減ずるの憾なきにあらず、こはもとより歌の上に付ては關せざるものなれども、少し

注意なすれば其難のがるべきをも、大方の人は、更に頓着せざるが故なり。

凡そ書は能く書かむとすれば、なか／＼に拙くなるものゝやうなり（名家は此限に非ず）今の世相當の書き手といふ人にても、餘りに苦心して却て見ぐるしきものを作れるが多し、たとへば足曳の山とあれば、足曳のやまと書かむ、かされどやまのつゞけむむつかしければ、あしひきの山とせむなど、其字形にのみ泥みて、子供の清書なするやうなる心持になれるは、大にあやまれるものにはあらざるか、

昔より書は姓名を記すに足るなどいふ諺さへありて、餘りに深くはたどらずとも、用をなすものにはあれど、其法は一わたり心得おきたきものなり、されとかくいへば自然書論に渉るべきにより暫く措き、まづ短册に認めむとするをりの心ばへをいひ試みむとす。

書の巧拙はとまれ、第一に目につくは槩付なり、されば古へよりも初二とかきて三の句にて墨を付け、四の句までかきて五の句にて亦墨を付けよといへり、こは簡單にて心得やすきことなり、併其句の都合によりてかくまもり難きこともあらん、そは自ら斟酌すべきことにこそ。

さて歌を認むるにあたりて、其歌の意をまづ心にをさめ、而して筆さりたらんものなれば、自然文字の上にも其精神あらはれて、雄壯なるものはをゝしく、優美なるものにはやさしく成るべし。

かくて其文字其歌のすがたをあらはし、耳に目に其微妙を傳ふるものならんと考ふ。

以上おのれの卑見にして、幸ひに先進大家の指教を仰がむとてなむ。



東京帝國大學講師 佐々木信綱先生選

天

東京麻布區新堀町 神田けい子

秋晴や海を見わたす丘の上に白帆かぞへて友をまつかな

（評）景あり。情あり。すぐれたる作。

地

飛驒國高山國分寺通り 南 みね子

病みませる母をいたはる湯の宿にきけば身にしむ秋風の聲

（評）原作結句水島とあり。ゆの宿と水島との調和よろしともおぼえず。秋風に改む。

人

辻

美濃關町加藤裁縫舍内 傍島みゆき子

猿曳に道敎へやりて別れけり紅葉ちりかふ野べの四つ辻

（評）猿曳を點出したる、おもしろし。

秀逸

須磨 有村さみ子

○

わがたてるまさご磯道さよふけてつきにさえゆく小波のおと

東京 竹山いつ子

海邊の月

見渡せば雲井につゞく海原のなみより出る月のさやけさ

播磨 三木郁子

秋草

いづれをか手折りてゆかん花ごとに今をさかりの野邊の秋草

大阪 磯 俊子

○

只一人かれ野を急ぐ旅僧やゆくてなゝめに雁なき渡る

福島 伊藤よし子

○

山駕に落栗きゝて木曾路ゆく夢心地なる朝月夜かな

○
大淺間煙うごかぬ夕ばえに
馬してたどる蘆原かな
東京　平塚つゆ子

暮秋
露にぬれし芭蕉の葉影こほろぎの
むくろ殘りて秋くれんとす
河内　竹内久子

晴夜月
降りにも霽られぬ人の聲すなり
あまりくまなきいざよひの月
美濃　各務濵子

月前紅葉
かぜもなき秋の月よのてりそひて
もみぢのいろのさやかなるかな
横濱　鈴木まつ子

秋の歌に
描し終へて繪の具まだ干ぬ小春まど
もみぢ散りきぬ繪はがきの上に
岐阜　傍島曉子

折にふれて
通路は萩のさざすにまかせおきて
夜すがら月に虫なきかはや
東京　家壽子

○
苫舟のさもし火ふけて月さむき
入江しづかに芦の花ちる
岩代　岸野豐子

○
富士かれにわれ一人たちて霧白き
岩代　岸野つれ子

蘆をてらす夜半の月見る
同　岸野常子

水邊萩
昔しわが友とあそびし故郷の
野川のまはぎ今かさくらむ
岩代　岸野菊子

○
杜鵑なくや江は東雲の遠明り
岸の松原うす月のして
名古屋　土屋たま枝

田家虫
すみすてし昔のいほを秋さへば
あろしがほなる虫の聲かな
福岡　大坪かつ子

○
月の夜は君待ちなれし竹の戸に
み影はあらで白萩咲きぬ
岐阜　芳賀敏子

○
朝月夜海ばら清し松島の
松のひまより白帆もれ見ゆ
相摸　藤原下枝子

○
故郷を出でゝ五日の舟がゝり
月の夜を聞く雁の聲
相摸　服部八重子

○
虫鳴くや家まばらなる水の村
藁屋に宵の月細うして
東京　中村千代子

落葉

幼子にいろは敎ふる文机に
　散りてかゝれる夕紅葉かな　　下野　井上倚子

落葉

小雨ふる片山みちの大いてふ
　賤の小笠にうまのせにちる　　名古屋　山根しげ子

枯野

たび人のひとりすき行枯野原
　かたくもりしてふる時雨かな　　千葉　秋野亮子

○

花もなき冬枯野道一人行かば
　亡き母上に逢はんかと思ふ　　美濃　文野さかへ子

紅葉

山すその陶やく窰の板びさし
　夕日うすれてちる紅葉かな　　美濃　傍島眞佐子

秋雨

世のつらさ人の冷たさつく〳〵と
　思へば淋し秋の夜の雨　　神戸　今西白露

○

亡き君が奥津城ところ秋更けて
　まねく尾花のかげぞ淋しき　　美濃　松田重子

○

鐘鳴りて雨にくれゆく長谷の道
　順禮の子に柳散りかゝる

甲

寄日祝

おほやしまてるひのもとのみひかりはとつ國までもみちわたるらむ　　東京　西村直子

山時雨

木の子がりわけいる道のあとゝひてしぐれもけふは山めぐりする　　靜岡　中村志賀子

○

なきつまのかたみのかみをとりいだしなみだに子らを勵ますろよや　　須磨　有村紫芳

○

ちごにゆひしながきくろかみとりいだしむかし話をおきな語りぬ。　　須磨　有村紫子

折にふれて

みゝづなく軒の柱によりそひてそゞろにしのぶふるさとの原　　兵庫　湖東澄子

秋日折にふれて

風の音はそゞろさむくもおぼゆれどすゞめの聲ののどかなる哉　　兵庫　湖東靜子

秋朝

そばの花わたの實かるゝゐなか道秋はや寒く朝しものふる　　茨城　脇坂須磨子

○

牛もみえず童も見えずたそがれの牧場さびしく時雨ふるなり　　越後　岩本芳子

○

きゝなれし尾上の鐘の音すなり夕べ身にしむ秋のくれがた　　兵庫　梶原玉子

川舟

里の子がつなぎし舟に棹さしてはからず見つる川よどの月　　東京　小栗捨子

虫

てる月は尾花の露に影ふけて野邊の徑に松虫のなく　　埼玉　高橋ふき子

きりぎりす

露しげき芝生の床や寒からんつゞれさせてふきりぎりす鳴く　　埼玉　高橋さよ子

枯野

咲き匂ふ花の俤夢にだに見るよしもなき枯野原哉　　横須賀　高橋つれ子

秋眺望　　美濃　各務不美子
千町田のなしれのたり穗ゆたかにてこゝしの秋の見えわたるかな

題しらず　　東京　平塚いさ子
紀のくにや蜜柑すゞなる葉がくれにたもさゆたけき里わらべかな

秋雨　　岐阜　長濱鬮子
あひむかひいはず語らずうれしさの昔を思ふ秋雨の夜や

秋　　東京　繁子
人々の稻刈りはこぶさま見えて柿熟したる山本のさと

月前雁　　岩代　岸野せい子
遠つあふみいなさ細江の秋風に月かげかすめ雁なき渡る

天長節祝　　遠州　疋田伸子
かご每に御旗さゝげて大君のみいづも千代さ祝ふけふかな

折にふれて　　靜岡　河津樂子
夕雲の空定めなくふき迷ふこよひ野末にこほろぎのなく

髮　　岐阜　目島まさ子
十年前二十年前の思ひ出でやかもじ入るべき我が髮さなりぬ

パノラマ　　東京　原　三幸子
つゝおさのきこえもすろさおもふまでたゝかふ如く見ゆろうつし繪

雁　　美濃　平岡かん子
父まさばさすらひせずさこしかたをくりかへし思ふ雁なく夕べ

秋の旅　　美濃　傍島小枝子
夏三月きみさあそびし湯もさ道さざせろやごのもみぢ色こき

○　　常陸　岡田萬子
朝まだき筑波は晴ろゝ秋日和聲よき鳥の數多群れ來る

原上月　　磐城　木幡きよ子
吹く風に嘶く駒の影あれて月の聲きくすゝき野の原

野菊　　長野　小川つめ子
千草かれ虫さへちさなく秋を咲きほこりたる野菊ひさもさ

○　　橫須賀　渡邊比佐子
やみませる妹をたすけて窓に見る柿の實紅く秋風の吹く

○　　千葉　吉松秋子
小木曾路や紅葉の麓霧立ちて白き駒ゆく夕榮の里

○　　千葉　秋野露子
賴みつる芭蕉はさけて影もなし何にかくれて泣かむ憂き身が

暮秋　　神戸市　今西操子
鵯鳴く野邊の眞萩の露散りて吹く風寒し秋の夕くれ

友の逝きしをいたみて　　美濃　吳みせ子
ありし日のこさ〳〵うかびまたゝきも吾眼をさらす君さ別れて

○　　美濃　渡邊ひろし
くづまゆのいさゝかほしゝ屋根の上に小春日ぬろし小猫ねぶり居る

雪　　岐阜　中村はな子
ふる雪の影を眺めて思はずも父母しのぶ故里のそら

虫　　東京　津浦豐子
にぎはしき都のうちも秋來ればいづこなるらむむまおひのなく

初冬　　東京　青木たま
けさよりは人めも草もかれなんさ思ふばかりに木がらしのふく

江上月　　東京　諏訪ゆり子
夜網打つ海士が影のみか黑にて入江の浪にすめる月かな

乙

○　　靜岡　河合粂子
あらき風あらき水にもあはずして秋もくれぬさ百舌鳥のなくらむ

月前言志　　橫須賀　小野ゆき子
澄み渡る月を見るたび思ふ哉迷ひの雲の掃ふよしかも

秋　草　　埼玉　横田やな子

もみぢ散池のきしれのかゝみ草みるかげ寒く秋さびにけり

夜　旅　　東京　田代糸子

開け行く御代の光りに獨り月よろの旅路もやすらけきかな

○　　神戸　足立ゑい子

露霜はうつり行けども移ろはぬ籬の菊ぞさかり久しき

○　　神戸　足立あさ子

花に見しあはれも添てあらし山秋は月こそさかり成りけれ

晩　秋　　東京　牧　千春

山の井に月の影さへ見ゆるまで落葉の數はまさり行くなり

○　　清國　鵜澤貞子

ややなりし夢ははぐれぬしみ／＼と枕にひゞく秋の夜の聲

こほろぎ

こほろぎ泣くかうたふかわれに似て秋の幾夜なつひにねむらず

○　　上野　小野里鶴子

荒ふれし海原いつか風なぎてさやけく昇る秋の夜の月

○　　上野　小野里佐久良子

澄み渡る月に名殘をさめずして曉知らす鷄の聲

朝　萩　　東京　白井文江

山賤が垣根にさける萩の花うすくつゝめる今朝の秋ぎり

折にふれて　　伊豫　益田春子

月見れば千々に思ひのみだれ來て友の戀しさます夜頃かな

秋　風　　伊豫　巽　秀子

秋風やふきたちぬらん花すゝきみだるゝみけの見ゆる夜半かな

○　　京都　廣　子

青葉陰君と別れて不如歸聲のみ戀ふる身となりにけり

霜中落葉　　京都　堤　德子

朝寒むやまはらに殘る梅の葉も置く霜白き庭に落ち行く

○　　大阪　木村春江

父まさば母しあらばとこのゆふべ寒き秋に妹を抱きぬ

望　月　　岡山　鈴木錢子

鎖す手も暫し小窓にたゆたひぬ影さやかなる望の夜の月

月映水　　美濃　各務照子

海と空いづれのものとわかぬかなはてなき沖にうつる月かげ

題しらず　　東京　平塚つた子

馬の上に富士あふぎ見るすその十里草の香もする虫の音もする

秋　草　　神戸　宇野なつゑ

いろ／＼に咲きも揃ひし道のべにたをるも惜しき秋草の花

題しらず　　東京　平塚白百合

蘭の香も高うものして木曾の路や霧よりあくる初秋の朝

秋の歌の中に　　埼玉　高橋さよ子

秋萩にうす色そへておく露を羽風に雁の散らしてぞゆく

秋のうたの中に　　下總　秋月廣江

旗すゝき折れてなびけて駒の上の憂はしおもや秋の夕暮

秋日山行　　埼玉　横田秋子

秋ふかき山路の末のくるみ原まはしもあへず山がらのなく

菊　　神戸　富士幸子

我宿の垣根に植し菊の花今朝を初めと咲き出でにけり

紅　葉　　神戸　小山波枝

愛らしき少女がみ手にかざされし花と見まがふ紅葉一枝

秋深し　　對馬　畑島郁

夕風も身にしみつなく蟲のこゑもよわりつ秋ふけぬらし

野　菊　　東京　西村きよ子

ますくにと一本ことによしたてゝつくりしよりは野邊の白きく

友　　東京　小林春子

友と云へばたやすく思へど得難は心をあかすともにぞありける

讀者文藝

撫子　　　　東京　白井春子

あけまきが鎌やふれけん撫子の花はいつしか刈られける哉

○　　　　千葉　田山糸子

桔梗切るさ尺かに君が御手白し淡絽の袖の夕月の影

○　　　　美濃　中村たま子

山すその駄菓子いさゝか賣るみせに雨やごりしぬたけがりのむれ

○　　　　岐阜　長濱ゆさみ

山の峯に一つさもれるさもし火をまたゝかしては木がらしのふく

○　　　　美濃　遠山よしの

ゆふまぐれあらしなふりぞ我背子はまだ山かけをたどり來まさむ

○　　　　美濃　儀島敏子

なま鰯ひさしほ鰯うるこゑのさよめきさわぐ濱の朝市

○　　　　岐阜　中西よし子

四五尺の雲をふみわけ野に山にけさも我せは狩にいでつゝ

○　　　　美濃　松田昌子

歌はれつ又なしまれつ紿かれつ落葉よ雨に恨みながらむ

○　　　　美濃　松田信子

秋雨に木の葉散りしく小松山茸匂ほはん乳母が古里

○　　　　美濃　松田春子

往來の人も立たずむ傘ながら紅葉さび散る一つ屋のかご

○　　　　美濃　松田直子

雨そぼる山王の門日はくれつ落葉するなり鐘鳴るあたり

○　　　　岩代　木内よし子

三千年もこゝに事なし藤原の大臣の庭の菊咲きほこる

山月　　　　兵庫　三宅くみ子

旅人の歩むも安し空清くひるにもまかふ秋の夜の月

帝室御物和漢朗詠集の刊行

藤原行成卿の書として、古來嘖々喧稱せらるる和漢朗詠集は、帝室の御寶物中にても殊に貴重なるものゝ一なるが、行成卿は人も知る如く、今より凡そ九百年前即ち藤原時代の中葉に於ける名家にして、多才多藝最も書法に長じ、當時冠絶と稱せらる長保年間外祖源保光の舊宅を捨てゝ、世尊寺を創めしより、後世行成卿を仰で、世尊寺流書法の祖と稱するに至れり、和漢朗詠集は四條大納言公任卿の撰集したるものにして、長く文雅の諷誦に弄ばれしが、行成卿は即ち撰者と同年代の人にして、此書の成れる頃直に書寫せられしものなるべく、筆致流麗にして、氣品の高雅なる好古書家の欣賞措く能はざる所なり、仍りて帝室にては今回　内親王各殿下の習字の御手本に供し給はんが爲めに、特に東京京橋區新肴町審美書院に命じて、若干部を印刷に附せしめらるゝにより、審美書院にては此調進の光榮に浴せるを機とし、特に宮内省の許可を得て、好古家及び書法の研究家の渇望に副はん爲更に數百部を印刷し、世の同好の士女に頒つといふ、女流の書漸く儘美の風すたれ、高雅の趣を失はんとしつゝある今日、本書の出版は多大の稗益を女流社界に與ふるものといふべし、



内藤鳴雪宗匠選

天

四辻に分かれて寒し秋の風　　横須賀汐入町　渡邊比佐子

地

蝶見しと妹の日記の秋さびし　　岐阜縣關町　傍島曉子

人

ふところを通りぬけたり秋の風　　大阪東區横堀　木村ゑい子

我が庭は松植ゑてさて月見かな　　大阪　木村春江子
人戀し古鄕戀し秋の雨　　對馬　畑島郁子
蜻蛉や瀞の穗浪黍の風　　岩代　岸野常子
白萩に紙燭さもして人や來る　　下總　月沖ゆり子
蜘蛛は巣を營み兼れし野分哉　　品川　岡本幸枝子
神の鈴鳴らしても見ろ紅葉哉

村雨の錦流すや龍川　　兵庫　梶原玉子
うら枯の野末に見ゆる白帆かな　　上野　小野里鶴子
十六夜や一竿くらき渡し舟　　上野　小野里佐久眞子
馬の息旅路の霜さなりぬらし　　福島　伊東よし子
夕紅葉馬上に小手をかざしけり　　神戸　足立あさ子
行違ふ人に吹くなり秋の風　　新潟　岩本芳子
更くる夜や月に隱るゝ影法師　　千葉　秋野花子
島山に沈む夕日やかりのこゑ　　東京　倉重喜代子
吾秋のかもじほしくも老ひにけり　　美濃　傍島眞佐子
哥戀に似て秋草の哀れなり　　美濃　傍島小枝子
秋雨や梢に殘るあけびがら　　石見　山根武子
馬市に小馬牽き行く野分哉
初冬の禿山くづす工事かな
電燈の白き夜寒の廣間かな　　相模　藤原下枝子
渡舟待つ頭の上や渡り鳥
犬の子の小春見て居る日和かな　　神奈川　杉義登代子
名月の窓に顏出す女かな　　相模　服部八重子
大寺の後ろ明るし夕紅葉
秋晴の空に弓ひく童かな　　横須賀　齋藤松代子
燒跡に啼き居る猫や秋の雨
鷄頭や夕日をあびる彌陀如來　　常陸　岡田萬子
家近く馴來て淋し神の鹿
秋風に待るゝ人の使かな　　美濃　加藤君子
西行を思へばなかし萩の花
雪信が硯洗ふや萩の花　　美濃　加藤愛子
夕風の芒を濳るきつれかな
栗飯や五十の秋の寺男　　美濃　加藤清子
詩心俳腸人は無言の月の椽　　美濃　松田星子
秋風の通ひて淋し波の音　　美濃　松田元子

思ひ出した樣にはら〳〵秋の雨
朝寒や蓿にかゝる甲虫
濱千鳥松の嵐に亂れけり
荒鷲の羽風に落つる木の葉哉
菊一枝姉さ妹の發句かな
夕霧の中より敵の矢文かな
萩寺の萩の雫や虫の聲
朝寒や鋭の中の立姿
朝露の草に鎌研ぐ男かな
旭さす菊一鉢や化粧部屋
紅葉散る樣に帯解く女かな
むら雲に抱かれて月の薄明り
慥へ虫の飛びこむ殘暑かな
輿で越す女の群れや秋の山
音もなく唯流れけり秋の川
文月の机に燭を剪りにけり
秋立つや窓に富士見る旅枕
粥を煮る灯火くらき夜寒哉

東京　諏訪ゆり子
岐阜　中西よし子
岐阜　中村はな子
飛騨　南　みれ子
美濃　松田菊子
美濃　松田花子
美濃　松田秋子
美濃　松田菫子
横須賀　渡邊比佐子
大阪　木村ゑい子
横須賀　小野ゆき子
横須賀　高橋つれ子

本誌和歌兼題

佐々木信綱先生選

◎十二月　冬月　　◎來年一月　茅屋の梅

入江爲守先生選

◎十二月　遠山雪　　◎來年一月　元旦

（十二月號に來年一ヶ年の兼題を披露すべし）

定價

	前金
一冊	貳拾錢
三冊	五拾七錢
六冊	壹圓拾錢
拾二冊	貳圓拾錢

全國郵送無料

廣告料

五號活字一行廿字詰	四半頁（十六行）	半頁（二十行）	一頁（四十行）
特等		二十圓	三十五圓
一等	六圓五十錢	十一圓	二十圓
二等	五圓	九圓	十六圓
並等	四圓	七圓	十二圓

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）◎前金領收證は差出不申本誌の到着を以て御承知ありたし◎領收證を要せらるゝ方は別に郵券切手御送附ありたし◎爲替は四谷區霞ヶ岳町卅九番地中川愛氷宛に願ひたし◎御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十一年十月廿八日印刷
明治四十一年十一月一日發行

東京市四谷區四谷霞ヶ岳町三十九番地
編輯兼發行人　中川[illegible]平
東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷人　佐藤保太郎
東京市四谷區四谷霞ヶ岳町三十九番地
發行所　女子新聞社
東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷所　中屋商店活版部

發行書目

唱歌 我國赤十字 全壹冊
定價一冊金五錢　郵税金貳錢十五冊迄

赤十字主義 全壹冊
定價一冊金拾貳錢　郵税金貳錢

日露戰爭 日本赤十字社救護寫眞帖
第一編第二編定價各七拾錢郵税各拾拾錢

大日本里程地圖 全壹冊
定價參圓五拾錢　送料貳拾錢

賣捌所 日本赤十字發行所
麹町區飯田町五丁目卅六番地

明年一月入學セシムベキ當校私費保育實習科生八名ヲ募集ス志望者ハ來十一月三十日迄ニ當校到達ノ日取ヲ以テ願書ニ履歴書戸籍謄本ヲ添ヘ差出スベシ尚詳細ハ十月一、二兩日ノ官報又ハ當校ニ就キ承知スベシ

四十一年十月　東京女子高等師範學校

觀世流 謠曲教授
神田區錦町一丁目【中央大學前】
瓢聲庵 土居香海

篆刻亦應依賴

☞ 日曜日は赤紙刷 ☆ 土曜日は青紙刷 ☜

日刊新聞

女子新聞

世界唯一

◎發行延期

女鑑擴張の爲、明治四十二年四月五日に延期、同日必ず第壹號發行

女子新聞は、通俗にして穩雅なる文字を以て、大方女子諸君の耳にすべき社會の出來事を報道し、其問題ともなるべきものは、擧げて諸大家の高見となり、事に後れずして每號の紙上に現はるべく、尙連號家庭敎育の一助ともなるべき小說講談を掲載し、且雅麗なる木版寫眞版を挿入すべし、

女子新聞は、文字繪畫の排列に多くの意匠を費やし、紙質の良好と印刷の美麗なるは他に比較なかるべく、廣告の末に至るまで、一毫だも不快文字なし、

女子新聞は女子諸君の和歌小品文の寄稿を歡迎す、尙每號一技一藝に秀でたる諸孃の小照、及び團欒の家庭を紙上に映出すべし

更に其內容を頁にて分くれば

第一面　社說及諸大家の論說、詞苑、小說、講談等を掲ぐ

第二面　政治及社會の出來事を何人にも讀み易く解し易きやう平易に記述す

第三面　婦人界の出來事、家庭訪問記、諸般の女藝、すべて家庭に有益なる諸記事を載す

第四面　紹介して不都合なき廣告

女子新聞發行に就て

日刊新聞は、社會萬般の事情を知る上に於て、男女共通の讀物たらざるべからず、然るに廣きを求むるの結果雜駁に過ぎ、時流に投ぜんとして自然主義に陷るの弊あり、もし善良なる家庭に於て、聲を大にして全紙を通讀し得らるゝ新聞はと問はゞ如何に、たゞ首を傾けて指を折るに苦しむのみならん、故に新聞を讀む人の多くは、時勢に後れざらんことを期して、却つて望ましからぬ傾向を進むるの恐れなきにあらず、予素より不敏の一寒生、到底潤澤の資本と、多數の名士によつて成れる、新聞社の多き中に介立して、花々しき藝當は演じ能はざるも、風俗改善の旗幟の下に、婦人の常識を養ひ、延いて家庭を和樂に導かんことを期す、幸に社會の或一部分の空氣をだに淸うするを得ば、本紙發行の目的を遂行し得たるものと信ず、

中川愛氷

東京四谷設ケ岡　女子新聞社　本社にて女鑑發行

國光社出版教授參考及家庭用書類

理學博士坪井正五郎先生講述
人類學講義 全 定價 金壹圓拾錢 送料 金八錢

元文部省體操遊戲取調委員 井口あくり 可兒德 川瀨元九郎 高島平三郎 坪井玄道 諸先生共著
體育之理論及實際 全 定價 金壹圓參拾錢 送料 金八錢

高等師範學校教授文學士松本孝次郎先生著
家庭に於ける兒童教育 全 定價 金五拾五錢 送料 金六錢

水產講習所長松原新之助先生閱 水產講習所技手石田鐵郎先生著
水產製造論 全 定價 金壹圓貳拾錢 送料 金拾錢

三輪田女學校長三輪田眞佐子先生著
女子の本分 全 定價 金貳拾五錢 送料 金六錢

三輪田女學校長三輪田眞佐子先生著
女子處世論 全 定價 金貳拾錢 送料 金四錢

東京高等女學校長棚橋絢子先生著
女道叢話 全 定價 金參拾錢 送料 金六錢

生田目經德先生著
雅文消息集 全 定價 金貳拾五錢 送料 金四錢

新潟縣師範學校教諭平野秀吉先生著
國語聲音學 全 定價 金六拾錢 送料 金八錢

清國唐芸洲先生原著 日本百東持中先生譯解
日清對照通俗文範 全 定價 金壹圓 送料 八錢

內國通運株式會社編纂
日本里程地圖 全 定價 金參圓五拾錢 送料 內地金貳拾錢 清韓金五拾錢

福本日南先生著
筑前誌 全 定價 金壹圓貳拾錢 送料 金八錢

北海道廳拓殖課編纂
北海道殖民圖解 全 定價 金八錢 送料 金四錢

東京高等師範學校教諭樋口勘次郎先生著
教育者と **國家社會主義** 全 定價 金八拾錢 送料 金六錢

島田三郎先生序 小島幾次郎先生著
腦力增進論 全 定價 金參拾五錢 送料 金六錢

小島幾次郎先生著
體力增進論 全 定價 金四拾錢 送料 金八錢

東京美術學校教授島田佳矣 同校卒業生野口俊尾 兩先生共著
女子技藝 **編物模樣圖案** 五冊 石版極彩色 大和綴美本
定價松の卷金四拾錢櫻の卷藤の卷各金五十錢 菊の卷、梅の卷各金五十五錢 送料各金四錢

土方伯題辭、毛利公母堂、三井男夫人、遠山女史題詠 青木子夫人、松村理學博士、落親學、棚橋女史、山脇女史序文 寺西絲子著
九重編造花法 每卷首二尺に三尺の石版極彩色大附圖あり
定價松の卷附豫修法金九拾錢梅の卷櫻の卷各金八十錢 以上既刊菊の卷、蘭の卷續刊 郵稅各金八錢

發兌元 東京市京橋區築地二丁目廿一番地 電話新橋八八番、二六九三番 振替貯金口座壹壹七八番 株式會社 **國光社**

大賣捌 東京、東京堂、東海堂、良明堂、至誠堂、須原屋、北隆館、文魁堂、春祥堂、上田屋、榮進館、○大阪東區北久太郎町積文社

宮内省御藏版

書道の珍書豫約出版

原本帝室御物

行成卿倭漢朗詠集

本書の原本は本朝書道三蹟の一たる藤原行成卿の眞筆に係り古來嘖々として喧稱せらるゝ名帖にして帝室の御物中にても頗る貴重なるもの也、行成卿の書道に於けるや實に始めて和様を大成せし一人にして、その水莖の跡の優にやさしく氣品高雅なる趣は古今多く其比を見ざる所にして、誠に日本書の妙詣極致なり、されば畏くも　帝室にてはこたび之を　内親王殿下がたの習字の御手本に用ゐさせたまはむが爲めに若干部を印刷に附せらるゝことゝなり弊院特に之を調進するの光榮を荷へり、仍りて別に數百部を増刷して世間の學者、歌人、乃至好古書家及び書道研究家に頒ち又特に習字に志す者の爲めに無二の手本たらしめむが爲に特に御許可を得て茲に本書の豫約出版を爲さんとす、大方の淑女令嬢がた、その色紙短冊乃至消息の書風に一層の美を添へられんが爲めに必ず本書の一部を机上に備へらるべし

書冊の大さ＝縱凡一尺、横凡六寸◎紙數＝二百廿四頁◎製本種類＝上製、並製の二種とし、上製は最上和紙に印刷し緞子の表紙を附して大和綴させる物全一冊、並製は西洋紙上質に印刷し假綴させる物拾冊に分て發行す

定價＝上製全一冊＝金拾五圓◎並製全拾冊＝金拾貳圓五拾錢、但し各冊分賣なれば一冊金壹圓參拾五錢宛

特別減價＝本月中に御申込の分は左の特別減價を爲す◎上製＝申込と同時に前金御拂込は金拾貳圓五拾錢、各冊引換拂は金拾參圓五拾錢(外に東京市外は荷造遞送料金四拾五錢)◎並製＝御申込と同時に全部前金拂込は金拾圓、各冊引換拂なるときは壹冊金壹圓貳拾錢宛(外に荷造遞送料各冊金貳拾錢宛)

發行期＝本年十一月二十日發行し御申込順により發送す◎申込期限＝十月三十日迄

發行所　東京市京橋區新肴町十三番地　審美書院　(電話長新橋三〇五五番)

◎本誌購讀諸君に限り特に十一月十五日迄前記の特別減價にて貴需に應ず

女鑑

明治四十一年十一月一日發行　每月一回一日發行　明治廿五年三月十二日

第拾八年第拾壹號　第三種郵便物認可